

七日の旅

案内

山内

72
398





嬰兒の哺育品は母乳に優るものはないと醫學上の定説なれども母乳を用ふることは出来ぬ場合も尠なくない。斯かる場合に生牛乳若くは「コンデンスミルク」の如き者や嬰兒に與へて間々大害を醸せることは嬰兒生理學上明瞭にして今日まで之れに代るべき哺育品のないのは育兒上の一大缺點なりし然るに最近英國より輸入される「アレクサンダー」小兒食は母乳と全く同一なる營養と消化性とを有す所謂完全なる乳兒の營養食物なるのみならず又大人の病後快復期に於ける食物として最も適當の滋養品である衛生愛兒家は「アレクサンダー」小兒食を用ひよ「アレクサンダー」小兒食には左の三種あり
 即ち第一號は生後三ヶ月間、第二號は四ヶ月より六ヶ月迄の嬰兒に適せる様滋養成分の割合は人乳と同一にせしものなり。第三號は六ヶ月以後の兒用として麥芽精を調和せるものなり。

定價 一號二號各 一罐に付 壹圓廿錢
 三號 一罐に付 七拾五錢
 東京市日本橋區本町四丁目

一羊販賣元 **田邊元三郎** 各店あり
 電話本局 二八七三番
 振替口座 一六六六三番

旅立つ方は屹度

ヘルプを

携帯する様

- 痢病 ●嘔加谷兒 ●赤痢
 - コレラ ●暑氣あたり ●
 - 吐瀉 ●水あたり ●食傷
- 定価十錢廿錢卅錢五十錢一圓

東京市日本橋區通四丁目
 ヘルプ本舗津村順天堂
 ヘルプは全國到る處の藥店にあり



アレクサンダー

一日三度の刊行新聞
 堀間十三橋東京東

聞新とまや

あさに出す新聞は

例へば其題目を讀んだゞ
 けでも一日瞭然に前一

日中の世界の出來事を残りなく會得し得るやう大きくて
 鮮明な活字で記してある忙しい仕事をすする人は先
 づ之を讀んで更に一日を了へて後ち夕刊で詳細を知れ

正午に出す新聞は

毎日一回宛特別に詳細な
 る號外を出すと同様市内の

人は之によつて其日午前中の出來事を何人よりも一番
 早く知り地方の人は之によつて一日遅くれの新聞を
 讀む必要がなくなる蓋し正午版は本社の獨創に係る者である

ばんに出す新聞は

諸君の親切なる友人で又多智
 なる教師である諸君が一日勞

作を了へてゆつくり其日一日の出來事を知り一日
 の慰安を得やうとするは之に限る最も趣味に富んで最
 も記事の豊富な點が夕刊の生命で又我誇とする所である

●本具に依り慢性不治の難病を根治したる實証書に對し數百萬(説明書無代進呈)

電氣帶發明者 博士之像



奇効 可驚 主治 頭痛 耳痛 鼻痛 咽喉痛 船暈
 効能 (説明書無代進呈)

サデン電氣帶

●本店 東京市京橋區尾張町二丁目 銀座通 東京側
 電話新橋四一三二 振替口座東京一八四七三
 ●支店 横濱市相生町四ノ六三 電話一三三二
 大阪市東區心齋橋筋博愛町南入西側 振替口座大阪七三四四番

凡て代金引換は前金貳割御送附を乞

サンデン電氣商會

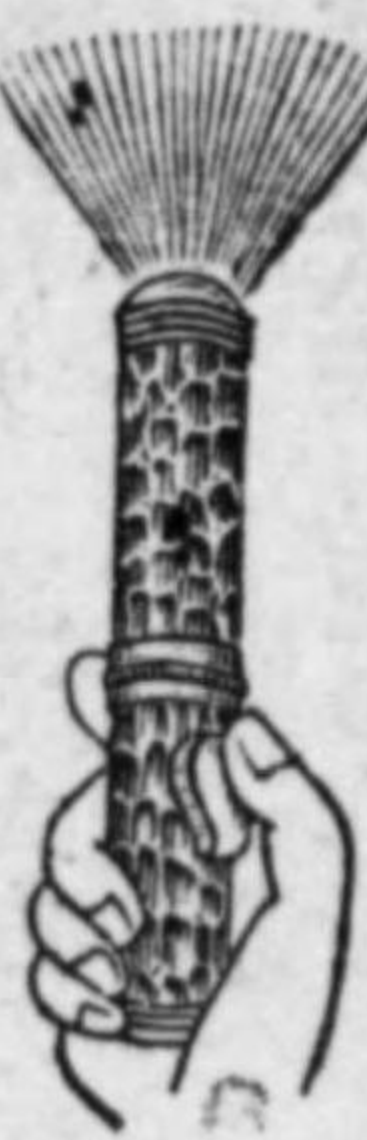
價定

三號帶	附屬共	金八圓	戊號帶	附屬共	金五圓
四號帶	同	金拾五圓	丙號帶	同	金七圓
五號帶	同	金貳拾五圓	乙號帶	同	金拾圓
六號帶	同	金貳拾五圓	甲號帶	同	金拾參圓
七號帶	同	金貳拾五圓			

舶來品

和製品

探見電燈



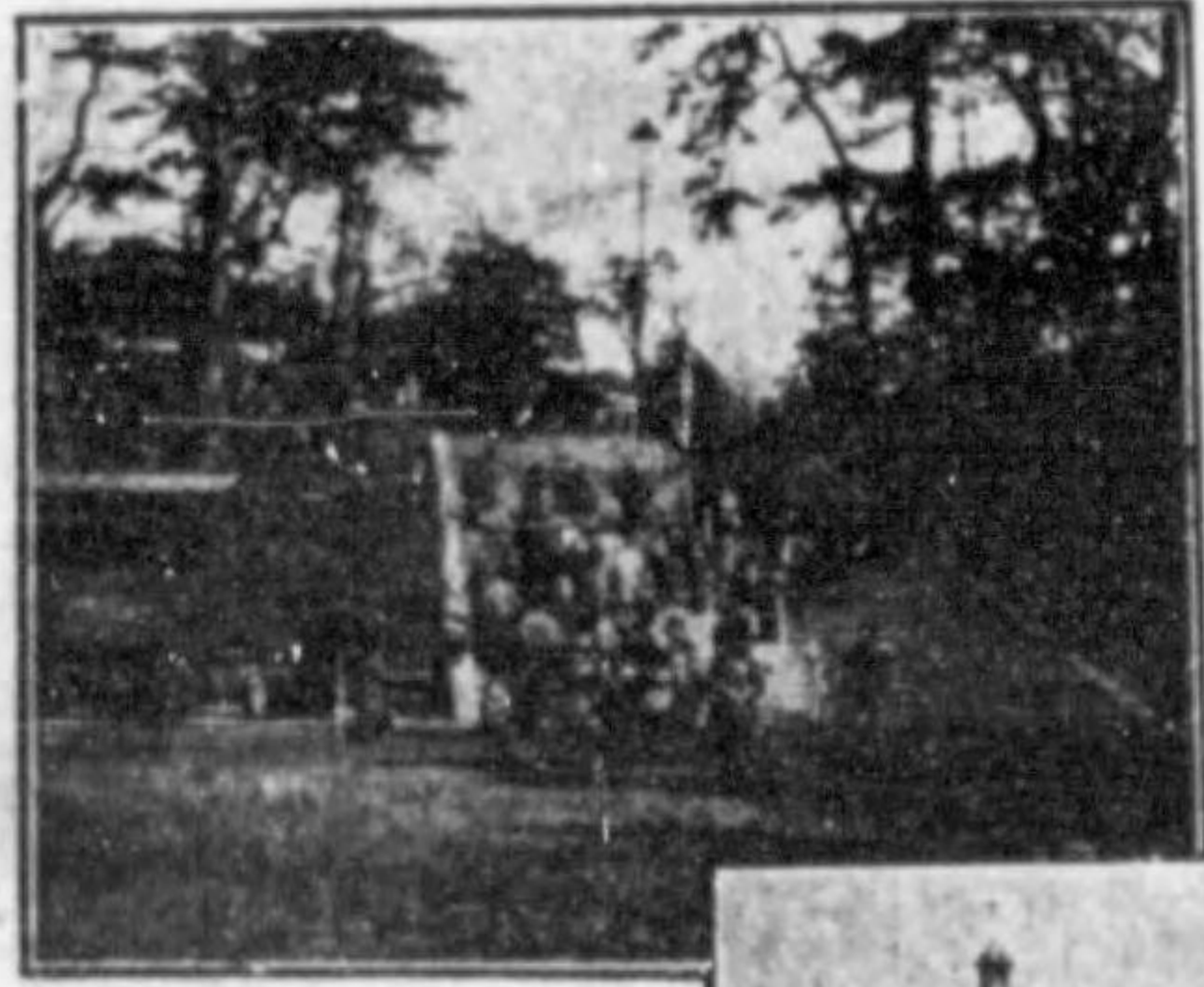
形大	參圓半	丙大形	壹圓半
形小	貳圓半	丙小形	壹圓半
形共	貳圓半	送料	十二錢

懷中電燈



最上	參圓半	B形	壹圓半
上等	參圓	替電池	七十五錢
並	貳圓半	送料	六十錢
			十二錢

72-398



新小説
七巻の終

明治
43. 1. 20
内交

著 雄 浪 合 落

外 宙 藤 後 任 主 輯 編

發 一
行 日

一 每
回 月

新 小 說

「新小説」は當代文藝の中樞にして、創作批評は勿論、其他苟も文藝に關する事項は細大收めて洩す事なし、創作欄には現代諸大家の作を網羅し、兼て新進の俊髦を束ね、思潮、時文、我觀錄、雜錄、文苑、譚叢、藝苑、家庭、社會、流行等從來の諸欄は、一層其範圍の擴張と趣味の横溢を期す、尙本年よりは小景、塵談、月旦、寸鐵の諸欄を加へ現代文壇に縦横の馳驅を試む。而も之を裝るに諸大畫伯の彩筆を以てする眞に錦上花を添ゆるもの蓋し之れ文藝雜誌界の檜舞臺たり、謹で大方の愛讀を望む。

實 價
●壹冊貳拾五錢郵稅貳錢五厘●六冊
前金郵稅共壹圓五拾九錢●十二冊前
金郵稅共金參圓拾貳錢●郵稅代用壹
割増(外國は拾四錢)

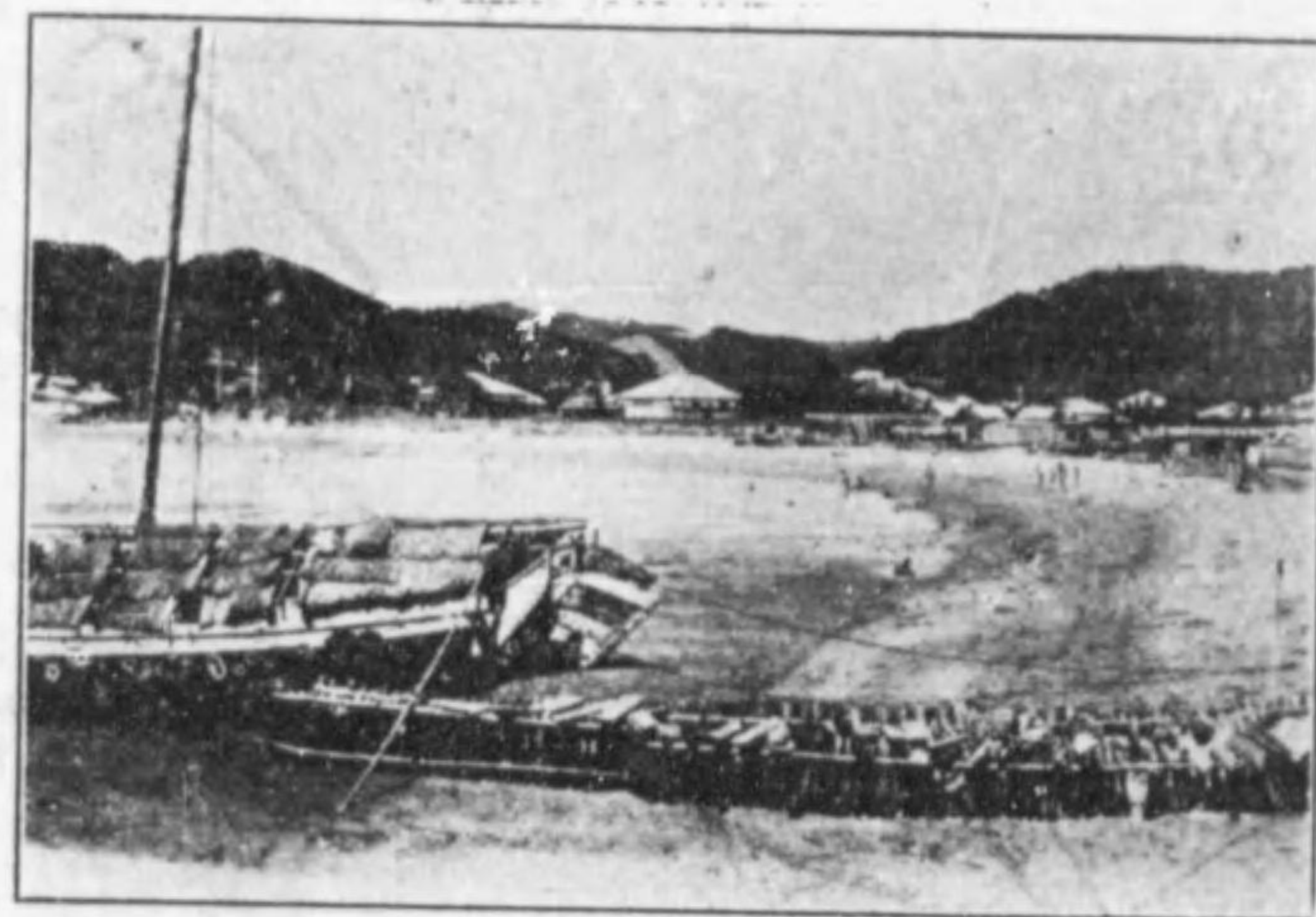
角目丁四通區橋本市京東

堂陽春 番一十五局本話電元兌發

番七-六一京東座口替振



伏見稻荷玉山社



葉山森戸明神より堀内を望む



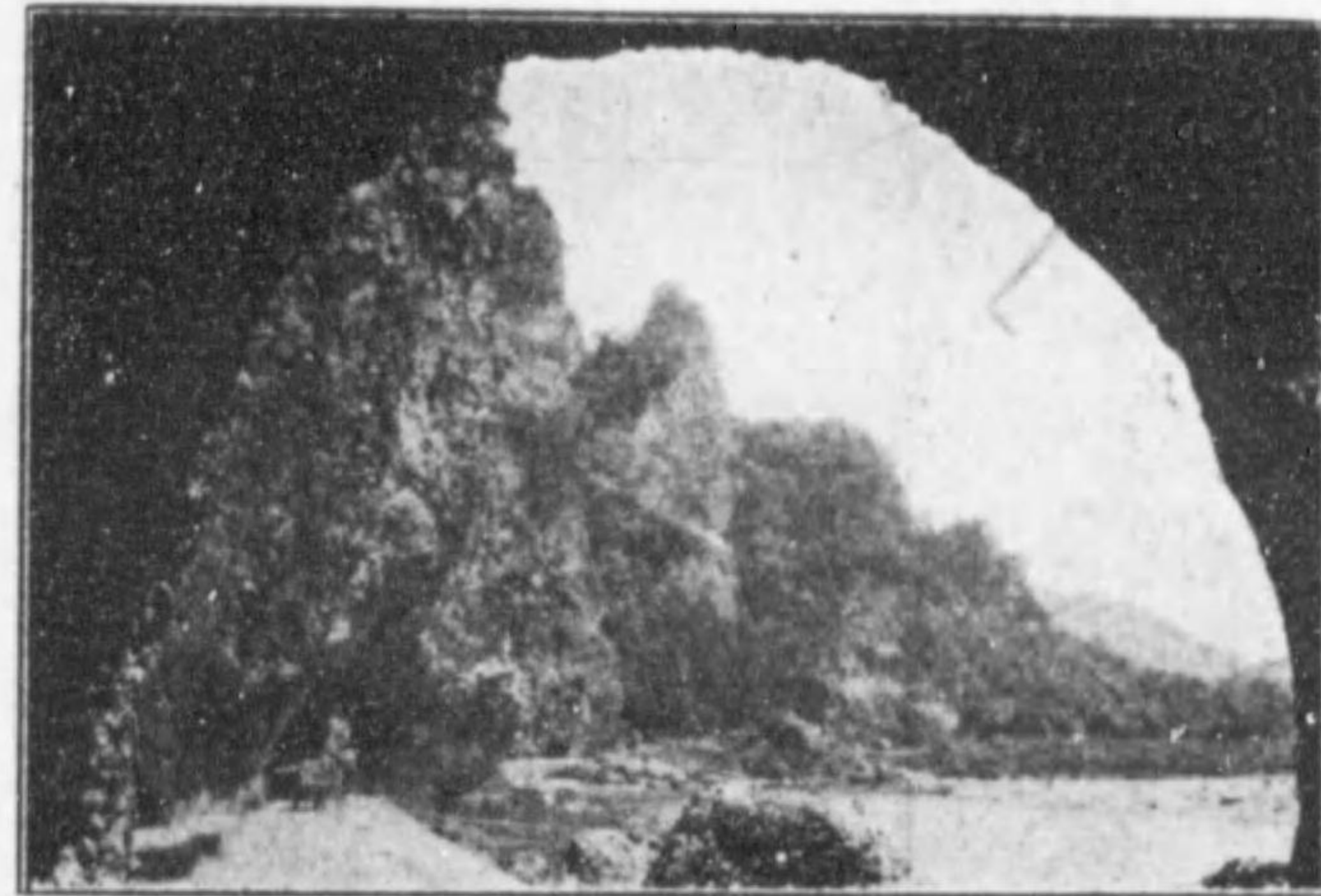
原松の田津 江松



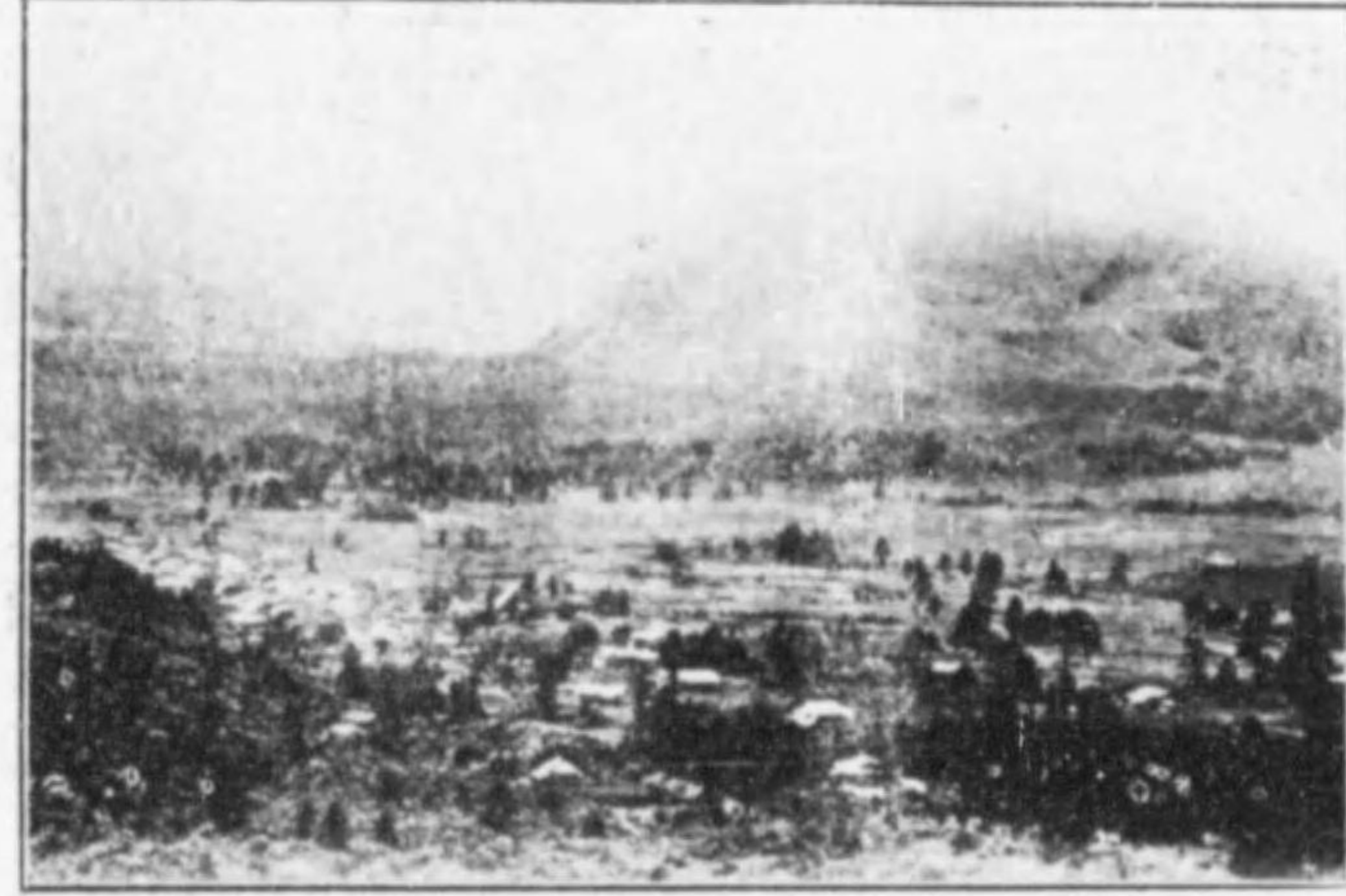
瀧巖華 光日



寺漢羅 溪馬耶



門洞の田樋 溪馬耶



澤井輕と山離



松泣稔の寺善修



本湯光日



堂本荷稻川豐州三



瀧頭龍光日



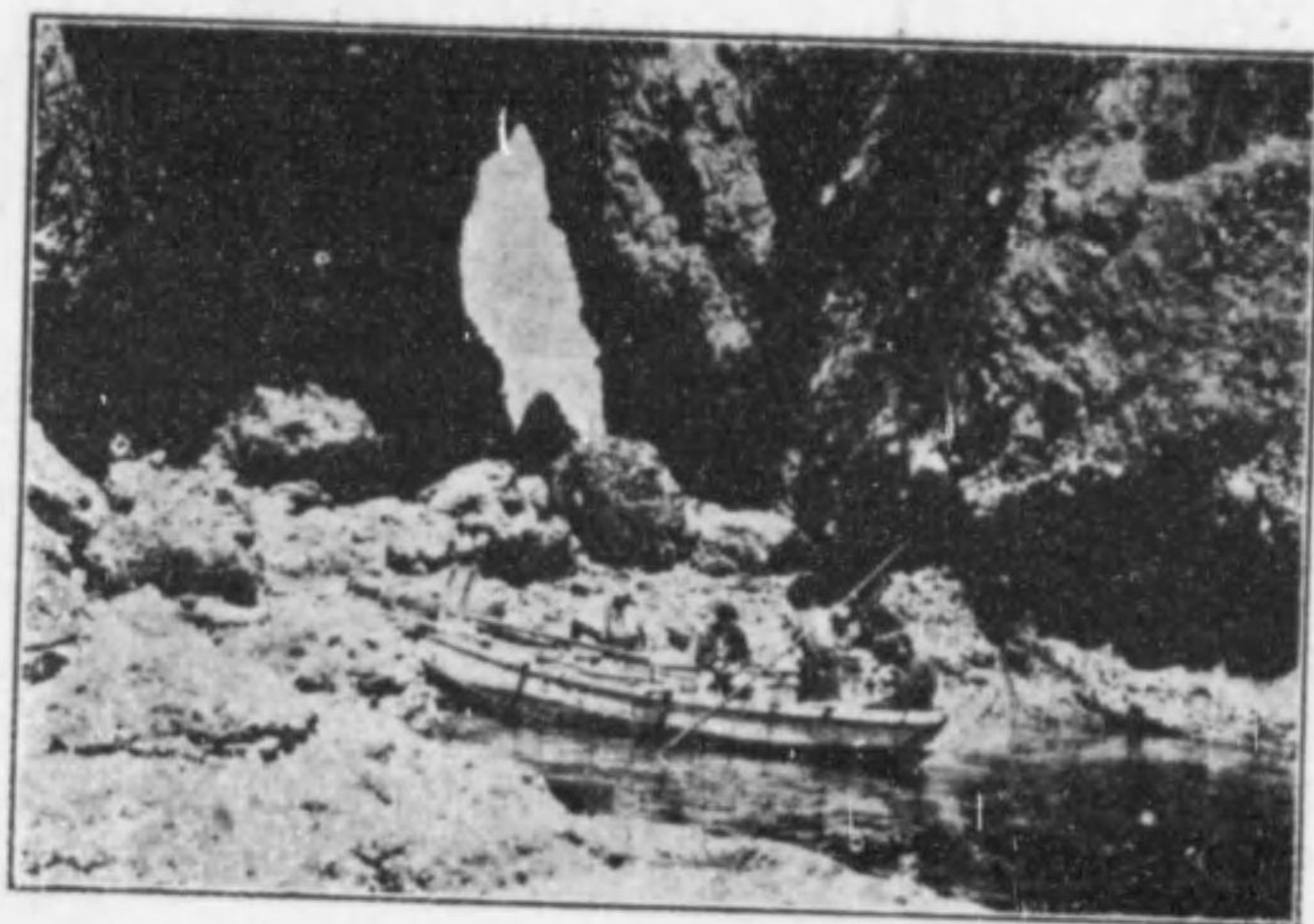
本萬目一瀨月



林梅谷の奥瀨月



日光の奥院石段



熱海鏡浦奇巖

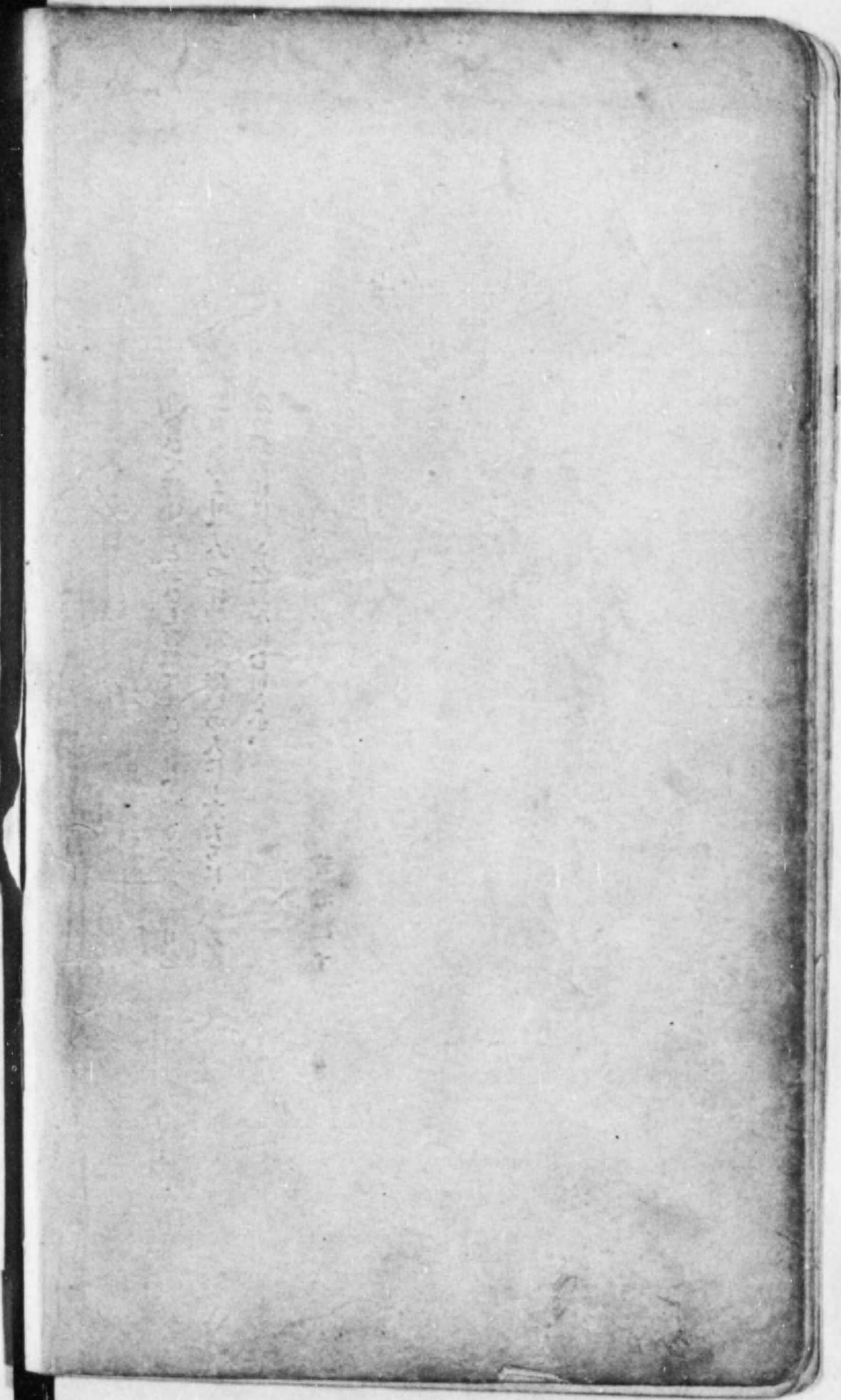
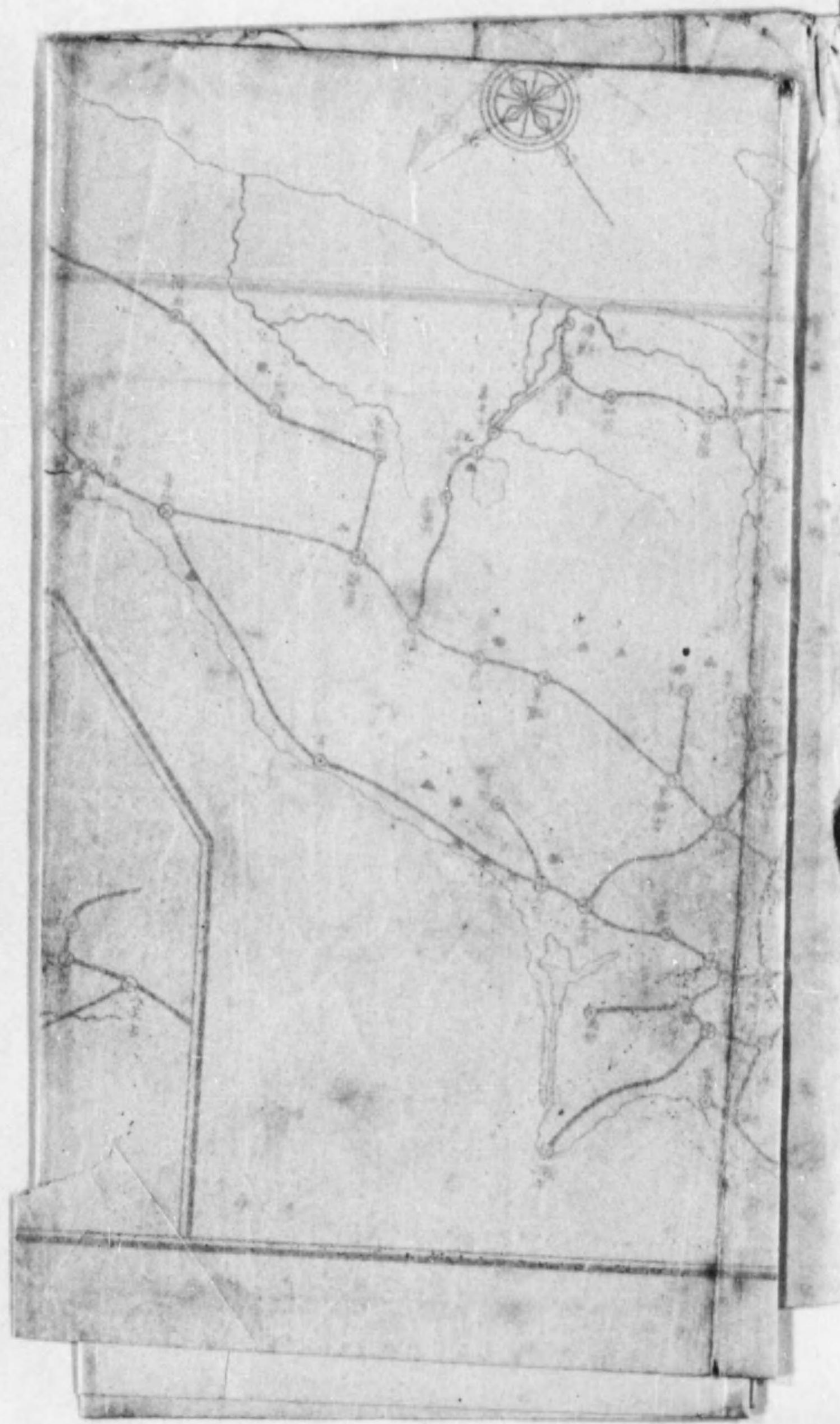
凡例

△七日の旅は旅行案内従來の編纂方法とは全く其選を異にし
一週日の時間を基礎とし一週日を以て巡遊し得可き場所を選
び發着の順序を指示して旅行者の便利を圖りたるものなり
△旅行には商業視察的のものあり修學旅行的のものあり、然れ
ども七日の旅は忙中の閑を悠遊自適に過さんとする人の爲
めに編めるものなれば六ヶ敷事は成る可く避け單に遊びの案
内をなすに止め、傍ら史蹟の著名なるものを紹介せんと務め
たるものなり、

△地方の古蹟は大概聯絡を爲して歴史的事實を語るものなり、
例へば本書中『豆相海岸』は全部鎌倉時代を語り、『大和めぐ
り』は南朝を語るが如し、故に旅行者は出發に際し目的地の
歴史に就て其大體を涉獵し到る處に歴史の鑑賞を試む可し、
△旅費は餘りに多くを携ふ可からず『七日の旅』の擧ぐる處宿
泊料の如きも單に標準を示すに止まり、廉きも貴きも是には
止まらぬ事なれば手加減して費に過ぎず吝に陥らぬ程度こそ
樂しみ遊ぶ旅行に適したるものならん、
△漁車賃は三等のみを擧げたり(通行税を加算せず)、誰やらが
一二等の覗み合ひより三等の凭れ合ひこそ旅は道連の古語に

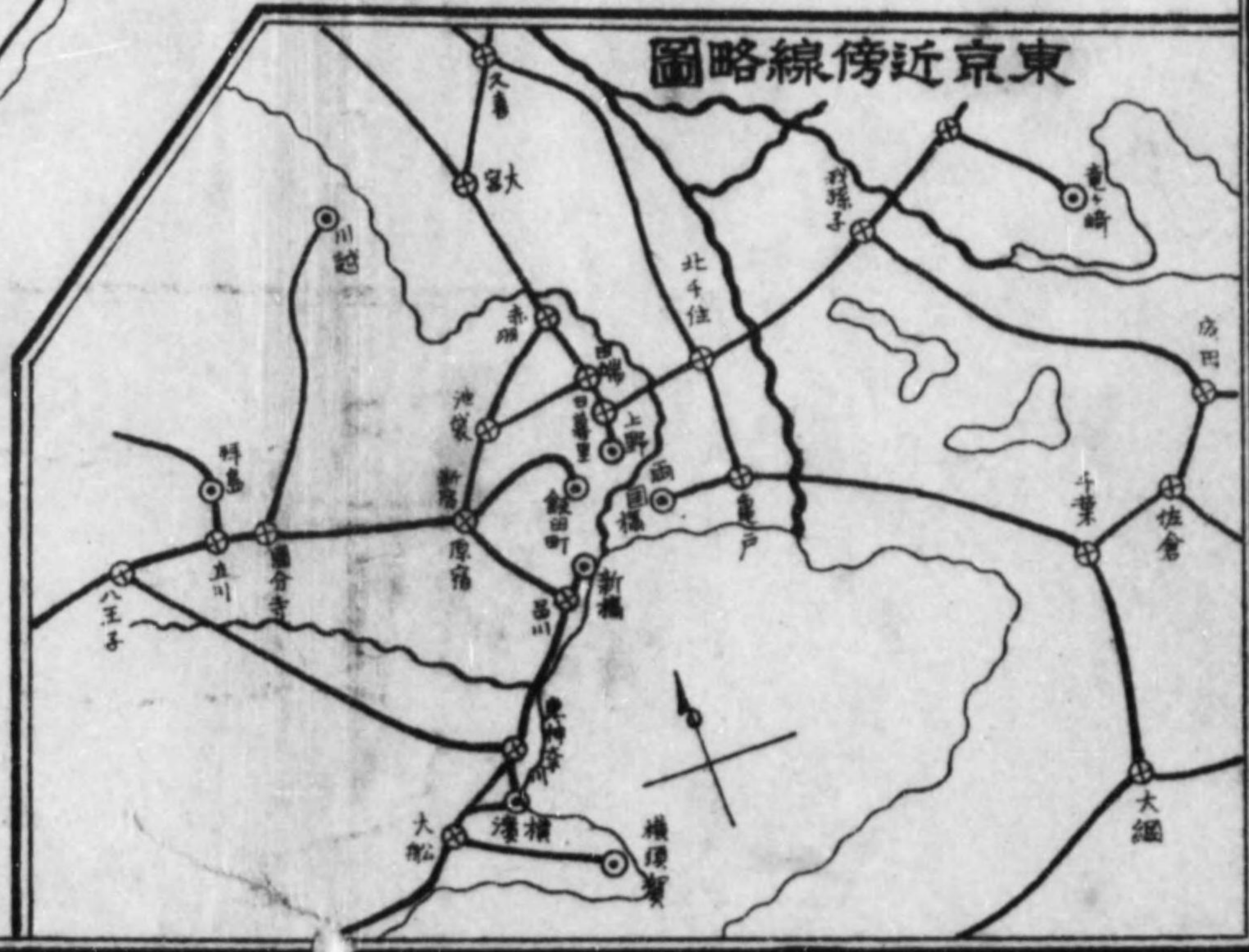
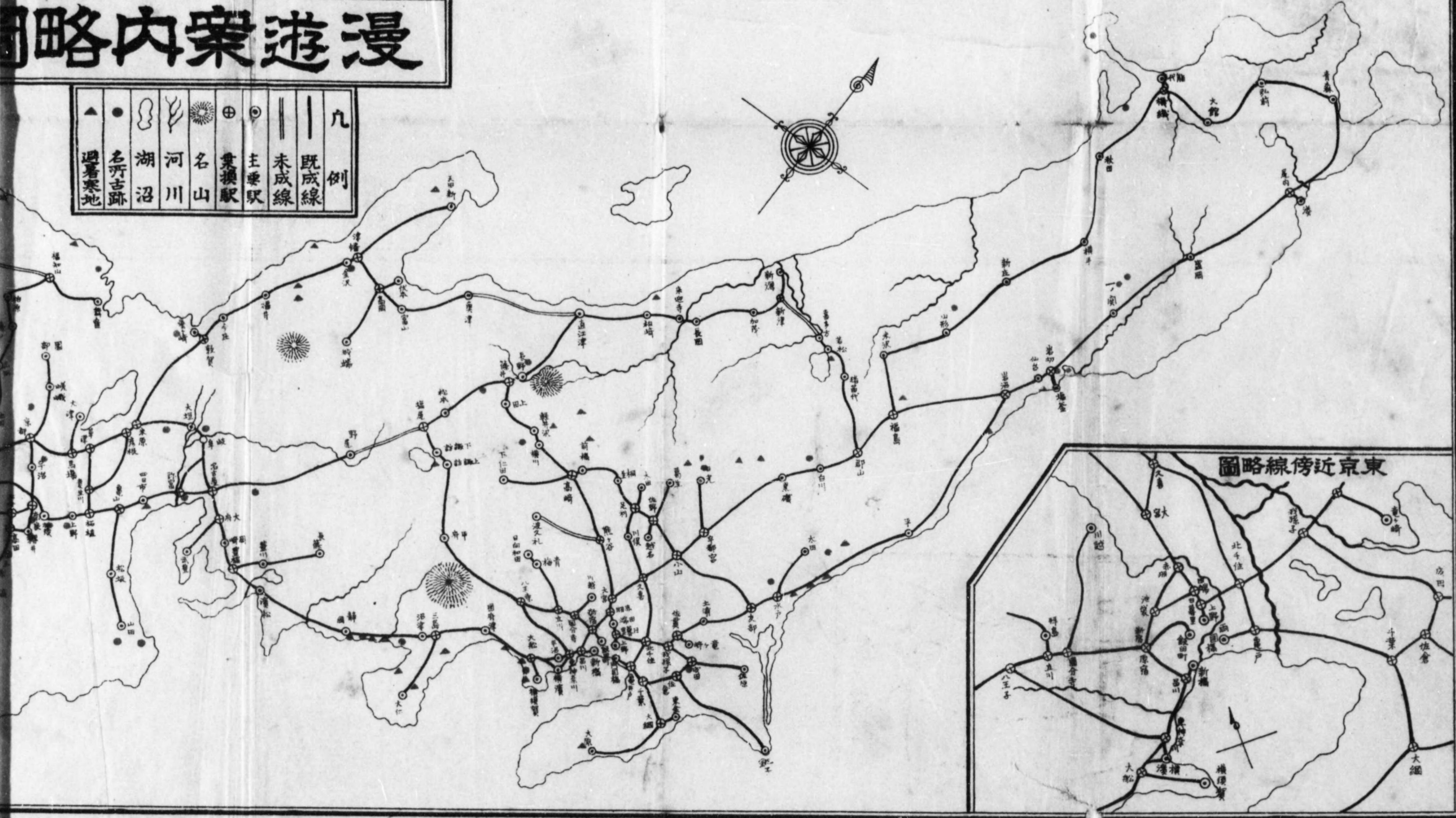
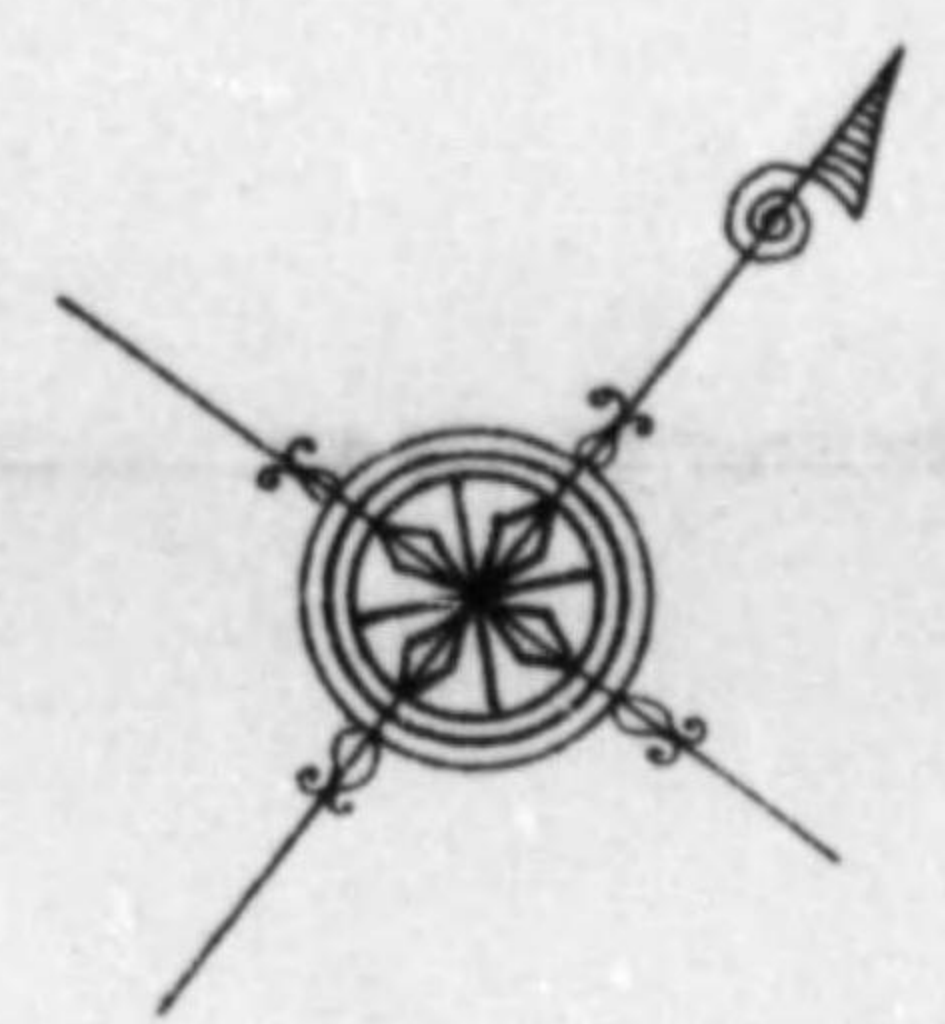
も合ひて好ければと云ひし言葉は味ひあり、行き大名の歸り乞
食たらんより、みやげ物重く家庭の人にも友だちにも樂みを
分つ爲めには行き乞食を選む可きか、

著者記す



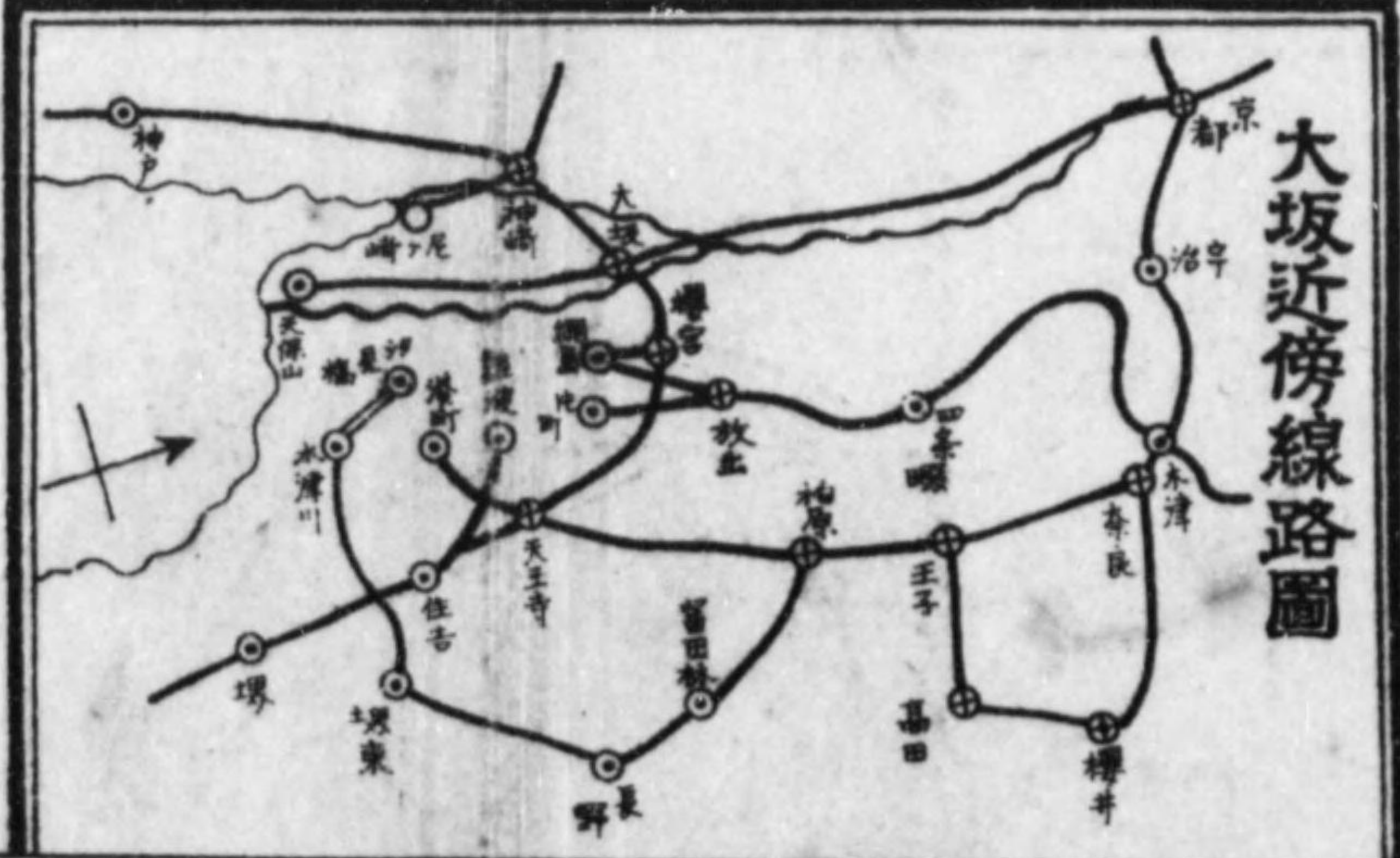
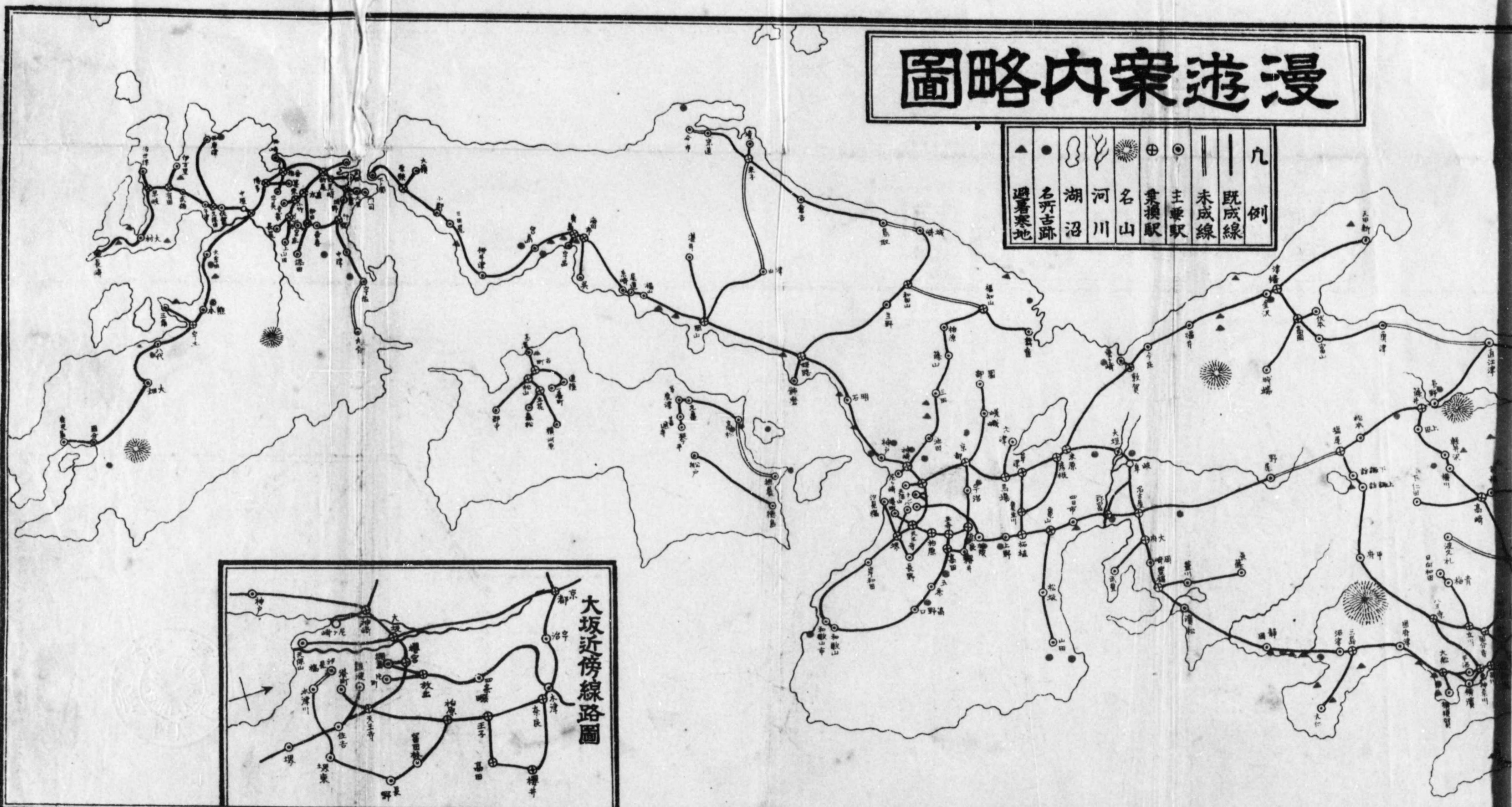
漫遊案內略圖

▲	●	○	☼	⊕	○			九
避暑地	名所古跡	湖沼	河川	名山	乘換駅	主要駅	未成線	既成線



漫遊衆內略圖

▲	●	○	☀	⊕	⊙		—	九
避暑寒地	名所古跡	湖沼	河川	名山	乘換駅	主要駅	未成線	既成線



大坂近傍線路圖

案内 七日の旅目次



何處へ往かうか……………(1)

先づ一週間……………(2)

次の問題は費用……………(2)

所の名所名物……………(3)

第一線 鹿島詣……………(4)

兩國||成田||佐原||香取||銚子||鹿島
||潮來||土浦||筑波町||筑波山

第二線 箱根の七湯めぐり……………(14)

新橋||國府津||小田原||湯本||塔の澤
堂ヶ島||宮の下||底倉||木賀||強羅||

七日の旅目次

大瀨谷||梶子||小瀨谷||芦の湯||湯の花澤||元箱根||三島

第三線 日光と鹽原……………(25)

上野||日光町||中禪寺||西那須野||鹽原||黒磯||那須

第四線 松島と常磐の海岸……………(38)

水戸||太田||大洗||平磯||大甕||助川
湯本||五浦||勿來||仙臺||鹽釜||松島

第五線 伊勢參宮と月ヶ瀬……………(51)

新名古屋||四日市||上野||月ヶ瀬||津
||松坂||山田||二見||鳥羽

第六線 豆相の海岸……………(63)

横須賀||葉山||逗子||鎌倉||江の島||
鶴沼||藤澤||茅ヶ崎||平塚||大磯||國

(1)

七日の旅目次

府津||小田原||熱海||湯河原||伊東||
修善寺||大仁

第七線 木曾路の旅……………(80)

飯田町||猿橋||甲府||御嶽||上諏訪||
松本||鹽尻||洗馬||奈良井||飯原||宮
の越||福島||寝覚の床||三留野||名古屋

第八線 宮島と瀬戸内海……………(91)

神戸||須摩||明石||宮島||廣崎||宇品
高濱||松山||道後||多度津||琴平||丸
亀||高松

第九線 越路の旅……………(106)

長野||直江津||鯨波||出雲崎||寺泊||
彌彦山||彌彦||三條||新潟||夷||相川
長岡

第十線 大和巡り……………(116)

大阪||堺||濱寺||和歌山||和歌浦||高
野山||高野口||吉野口||吉野山||奈良
清隆寺||王寺||畝傍||橿井||笠置||
宇治||京都

第十一線 房總半島……………(133)

稻毛||千葉||佐倉||成東||東尾||一ノ
宮||大東||大原||勝浦||小湊||鴨川||
清澄山||館山||北條||那古||勝山

第十二線 京都と大阪……………(145)

岐阜||馬場||大津||京都||龜岡||大阪

第十三線 富士と三保……………(176)

御殿場||富士山||興津||江尻||三保||

龍華寺||久能山||静岡||舞坂||濱松||
沼津

第十四線 出雲大社(舞鶴と橋立)……………(187)

舞鶴||宮津||天ノ橋立||海上||境||松
江||米子||安來||庄原||杵築||新舞鶴

第十五線 妙義と榛名……………(196)

磯部||妙義町||妙義山||高崎||榛名山
伊香保||澤波||四萬||草津||前橋

第十六線 北陸めぐり……………(204)

敦賀||福井||大聖前||山中||山代||動
橋||金澤||七尾||和倉

第十七線 奥羽一週……………(211)

米澤||山形||秋田||雄鹿半島||弘前||

七日の旅目次

青森||淺蟲||盛岡||一ノ関||平泉

名勝案内地圖入

漫遊案内 七日の旅目次終

漫遊 七日の旅

落合浪雄著

▲何處へ往かうか？

山紫水明の温泉場、白砂青松の海水浴、何處へ往かうかしら、夫も十日も廿日も一月も悠然たる閑日月のある人とは違つて、忙しい都會の人が年末年始の休暇、さては暑中の休暇を得ても日数は精々一週間が關の山、七日と云ふ日限を越すに越されぬ關と定めての忙しい旅、さて何處へ往かうかは大なる問題でなくてはならぬ、旅行案内を擴げて見ても道は四通發達の、汽車は東西南北、電車もあれば汽船もあり、あれのこれのに移りがして結局極められない極まらないで半日一日の閑を潰すも残念至極な事であらう、

七日の旅

▲先づ一週間

と時間を定めて何處から如何廻ればキチンと日限通りの旅行が出来ようか、目的の名所舊蹟は勿論の事、序に何處々々の見物が出来やうか、夫を手輕に御案内しやうと云ふのが此書の出来た譯、此本一冊さへあるならば、一週間宛の閑を見て全國を漫遊する事が出来るばかりか、行き度い處は巻頭のインデキスで御探しになれば、一番便利な道順と一番手輕な見物の仕方が分る様になつて居る、

▲次の問題は費用

であるが、途中必要の汽車賃馬車賃、汽船賃も宿料も一日調べ上げて書き込んであるから、行先を極めた序に一寸算盤を手に入れば費用の概算も分らうと云ふ、此書一冊さへあれば途中で物を尋ねずとも、汽車の時間を待ち合す世話もなく、キチンと豫定の通りに楽しい旅が出来る仕掛、無駄な費用と無益な時間を失はないで文明

的に諸君の案内者たるものは實に此書の外にはあるまいと思ふ、

▲所の名所名物

は勿論、何處では何と云ふ宿屋が好いか、御土産には何が好いと云ふ迄調べてあるから、讀みながら旅行をすれば相談相手は決して要らず、獨旅でも寂しくないと決して手前味噌の辛さに過ぎたものではない、

▲第一線▼ 鹿島詣 (成田参詣と筑波山)

- ◎第一日 兩國⇨成田⇨佐原
 - ◎第二日 佐原⇨香取⇨佐原⇨銚子
 - ◎第三日 銚子⇨鹿島
 - ◎第四日 鹿島⇨佐原⇨潮來
 - ◎第五日 潮來⇨土浦⇨筑波町
 - ◎第六日 筑波町⇨筑波山⇨筑波町
 - ◎第七日 筑波町⇨土浦⇨上野
- ▲兩國より成田 此道は上野より日鐵線に依るも好いが、歸りには日鐵に依らねばならぬから、總武線で兩國發、哩數四十哩、賃金は三等七十錢、二等一圓五錢、但臨時列車の出る時には往復三等一圓、二等一圓五十錢、時間は二時間から二時間五十分、直通もあれど多くは佐倉で乗換
- ▲成田より佐原 此間は成田線、哩數十六哩、賃金三等は三十四錢、二等

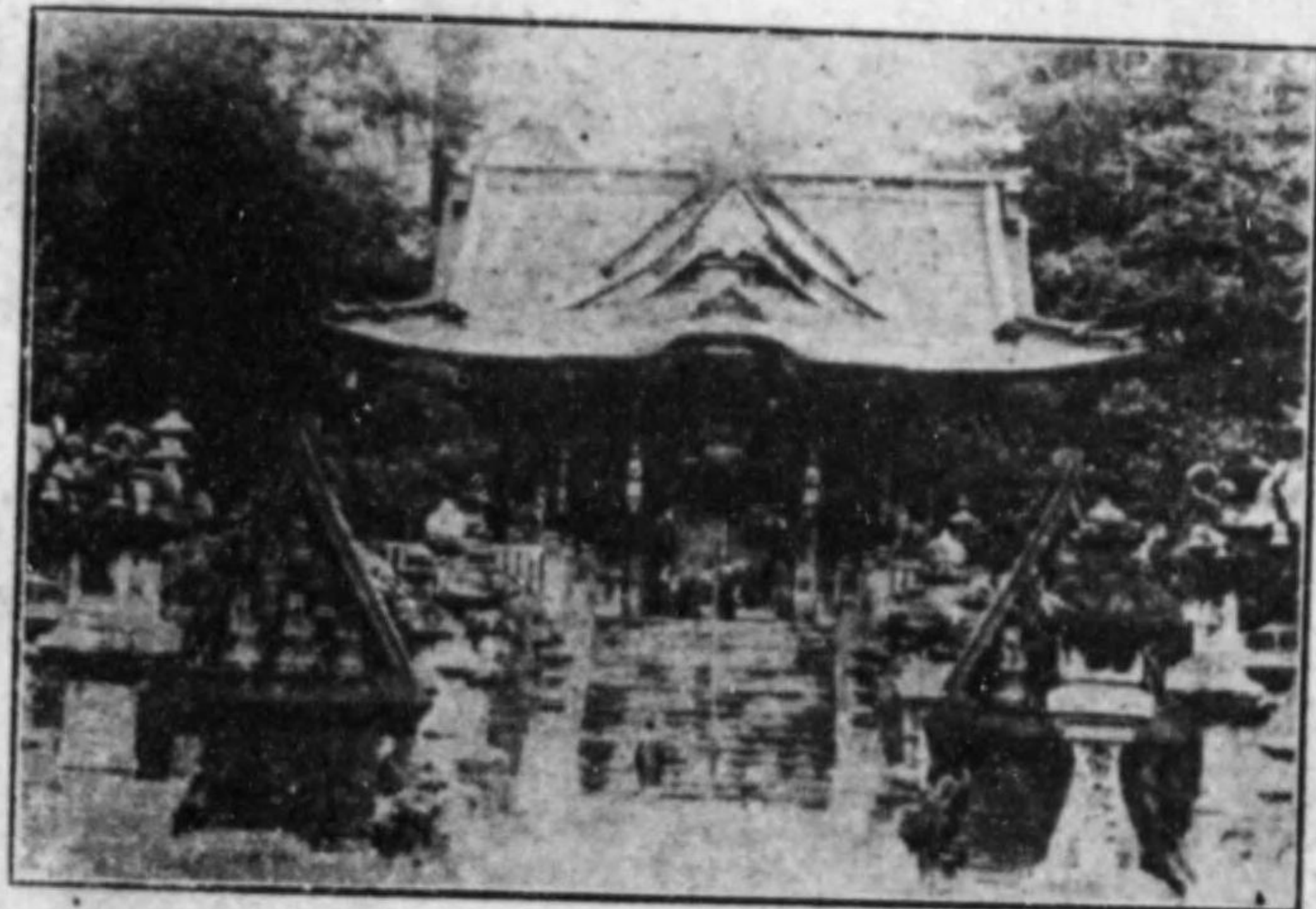
五十二錢、時間は僅に五十餘分、乗換なし、

- ▲佐原より香取 佐原より道程一里、人力車の便りある、
- ▲佐原より銚子 の間には内國通運會社の汽船あり、
- ▲銚子より鹿島 は汽船にて佐原まで溯り、利根川を對岸に渡れば雜作なし、
- ▲鹿島より土浦 は例の有名人る霞ヶ浦を縦斷して湖上蘆荻の間を汽船で通る、時間は六七時間賃金約五十錢、
- ▲土浦より筑波 道程五里廿九町、人力車賃七十五錢、
- ▲筑波町より筑波山 町より絶頂まで一里卅丁、
- ▲土浦より上野 土浦より歸途は日鐵線にて上野へ歸るがよし、哩數四十一哩、賃金は三等六十八錢、二等一圓〇二錢、時間は二時間五十分、

▲成田停車場から成田の町に入る不動の門前まで十四五丁、人力車に乗つてもたつた十錢だ、成田の不動、更めて御名を申上げれば神護山新勝寺、本尊は天竺から傳來、將門謀叛の時に此地に安置し怨敵退散の祈禱に初めて靈顯を著はされてから信者日に益し多く、今では關東第一の名刹で有名な節分の豆蒔式の如きは東京其他か (5)

ら二三萬の人が出てお籠りをやる、其本堂は十四間四面、扉は誰の作、額は誰の書と云ふ御案内は實地見た時にお聞きなされるが早分り、三重塔もあり護摩堂もあり、斷食堂もあり、多い寺寶の中には天國の寶劍と云ふがあつて年に一度のお開帳がある、本堂前には貞松館、若松屋、大野屋等の宿屋あり序にパノラマ館のあるばかりか、本堂の横手には圖書館があり、少し離れて理想的幼稚園のあるのには誰しも一寸驚く。

成田から出て佐原に向ひ次の停車場滑川に下車して藤原の師賢を祀つた小松神社阪東廿八番の札所滑川觀音などに參詣もよし、少し離れて滑川町字西大須賀には日本三三井寺の一と云ふ東三井寺がある本尊は千手觀音、將門の愛妾桔梗の前の鏡と懷劍が寺寶になつて居る。



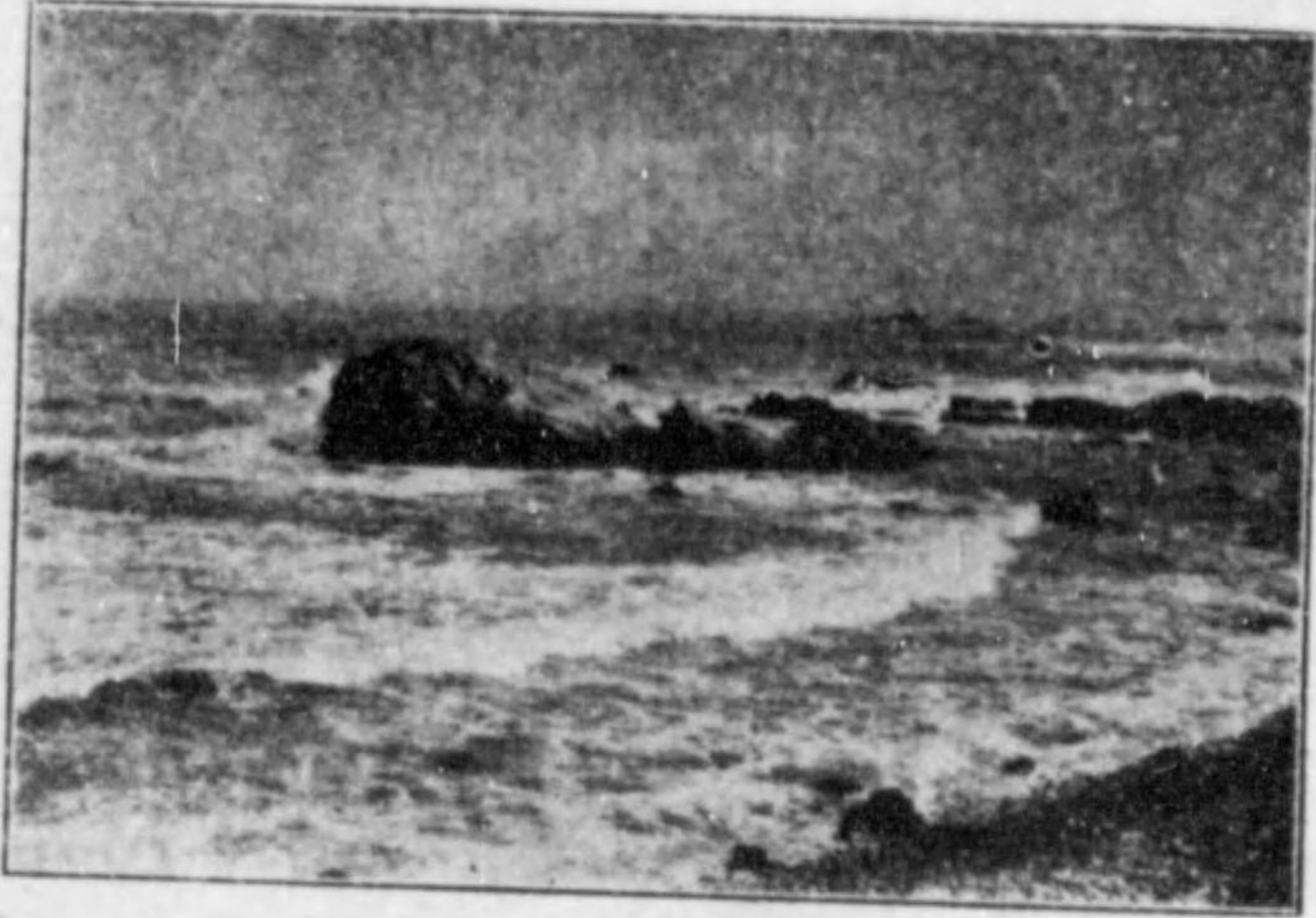
成田不動

佐原は利根川の南の岸、停車場を下りて北を望むと煙霞の間に見えるのが筑波山である、前には下新島があり、關東での酒が出来るところ、旅宿木内樓に泊つて新酒の香を嗅ぐも妙であらう。

香取神社は鹿島神宮と共に日本で一番古いお宮と傳へられて居る、佐原停車場から一里、祭神は經津主神、武甕槌神、姫神の三神、鎮坐しましたのが神武天皇の十八年であると云ふ、境内の名所は擧げて數ふべからず、茲より直に鹿島に賽せんと思ふ人は半里を北へ向つて津の宮へ出るが好い、津の宮は利根汽船の發着所で香取神社の一の鳥居が水中にある處、川を渡れば直ぐに鹿島へ參詣が出来るのである序に船を待つ時間を利用して澳津彦神、澳津姫神を祀つた津の宮神社へ詣れば水上の安全を護らせ給ふ事になる善だ。

此旅程では鹿島から銚子へ下つて更に戻つて鹿島に賽し土浦に向ふ事になつて居るが、鹿島を先にして銚子を跡廻はしにするも好し、土浦行をやめにして房總方面へ廻るも好い、(房總半島參照)

銚子へ行くには佐原からは船で一時間と費らない、東京から直接なら總武線で



銚子犬吠時

銚子泊りを一日増して汽車で飯岡(哩數八、賃金三等十五錢、時間四十分)まで

行く二十町で岩井の不動と云ふがある、弘法大師の逗留して居た處と傳へられ境

内四十八瀧の名があるが、今では大瀧、六根の瀧、遍照の瀧、秘密の瀧、女人の瀧

等があるばかりだ、一つ手前の猿田驛には猿田神社、一つ先の旭驛には木曾義仲十

九世の孫義昌の墓がある。

銚子から佐原へ戻り、佐原から船で利根川を北に渡ると舟着きは大舟津、夫から

東へ十町で官幣大社鹿島神宮に達す、祭神は武甕槌神、境内古松古杉林を垂れ葉を

重ね誠に神さびて夏も冷風肌を襲ふほど、七井、七不思議の名所がある、七井と

は染井、成井、葶柄井、清水井、保太井、寸府井、波左間井を云ふ、七不思議と云

ふのは例の要石、御手洗の水、未無川、御藤、海の音、根上り松、松の箸で、如何

な不思議かと問ふ勿れ百聞一見に如かずで話ばかりでは難有味のないものである、

此内要石は本社ほんしやの東南へ一町、御手洗池は二町、神宮の裏手の山を御笠山と云ひ、武甕槌神の兜を埋めた處と傳へられて居る。

神宮を東へ海岸へ出ると鹿島明神が悪鬼の來襲を防いで、悉く退治されたと云ふ高天ヶ原あり、鹿島神宮中に推古天皇の建立になると云ふ根本寺、さては大職冠鎌足の館の跡と云ふのもある。

潮來は霞ヶ浦中の名所である、鹿島香取の參詣を濟せし上は此水郷の銷金窩に一寸足を入れて見るも面白き事、芦荻の間から聞へる潮來節、泊りは是非茲に振替へる必要なきにもあらずであらう、佐原から三里廿八町、稻荷山、汐浪の里、硯の宮、地藏川岸、さては賴朝公の烏帽子を掛けた烏帽子の松、十六島などの名所がある。

霞ヶ浦は東西七里、東北六里、周圍卅四里と云ふ大きい湖水、春夏秋冬折り々の風物奇ならざるはなく、霞ヶ浦めぐりも旅行家の一度は試むべき事で、土浦より海岸の沖宿、木原、湖中の浮島を見に行く近道なる、江戸崎、牛堀、志度崎、井上、

麻生、霞ヶ浦一帯を一瞬に集め得るのは牛堀の千歳樓。

土浦は九萬五千石の城下、銚子佐原方面への汽船の出入は日々七回、汽船の發着所は停車場の傍なり、此邊交通の衝に當つて居る、汽車で來て茲を起點に逆に廻はつて見物するも好し、宿屋は松庄、江戸崎屋、櫻井、笹本、將門の叔父さん平の國香の墓、字明神にあり、けれども好事家の調べに依ると國香の墓は外にも二三ヶ所あつて少々怪しいと云ふ事である、停車場から程遠からぬ西子岡公園は櫻の名所春であつたら是非杖を拄ぐべし。

筑波街道を筑波に志す、五里餘の間名所は中々に多い、藤澤には藤原藤房の遺髮塔、高岡の法雲寺は山も水も奇なる好風景、小田には小田治久の城跡、北條には多氣の城跡、泉觀音、田井には養蠶家の是非參拜を要する、蠶の守り神蠶影神社がある。

筑波の町に入ると、既に筑波山は半ば上つた譯だ、町には江戸屋、緒東屋、大越屋、石濱屋などの旅宿と如何はしい飲食店などが澤山にあつて、聊か山靈を恥めて

居る、町より上りは一里二十町、絶頂は海拔三千百八十尺、峰二つあり東を女体西を男体と云ひ男体には伊弉諾尊、女体には伊弉册尊を祀つてある、日本武尊の新治筑波を経て幾夜かねつるの連歌を仕賜ひし連歌裾、御幸原、大黒石、胎内潜、高天の原、石門、水無の川等奇勝中々に多い。

筑波の北に足尾山あり、加波山あり、是は加波山事件の蹟、其北には雨引山が聳えて居る、阪東廿四番延命観音のある處、御信心の方は御廻りあれ。
小山線に乗つて少々寄り道をすると思ふ處が中々にある、下館驛には北畠親房の城趾、三里離れて高田山専修寺、結城驛には結城秀康開基の弘經寺、稱名寺には結城朝光の墓、新治驛から一里の小栗村は小栗判官の生れた處、驛から廿町の桔梗ヶ池は前に記した將門の妾桔梗の前の投身した處だと云ふ事である。

▲みやげ物

味淋(佐原) 羊羹、梅びしを(成田) つくばね(筑波山)

筑波山の峯より落つる水無の川戀を積りて淵となりぬる
櫻川瀬々の白波しげれば露をながす信太の浮島

(陽成院)
(貫之)

『潮來出島の眞菰の中で菖蒲咲くこほさ歌にはあるが、咲いてゐるかえ
『當然よ、寒中菖蒲が咲くかい
『ア、左様く、眞菰さあるから盆時分だれ

其者もまたたしむるもせんし、二屏より三つあり(伊弉册尊)
よもろもまたたしむるもせんし、二屏より三つあり(伊弉册尊)
膝あちぬはり河にせし御幸原

▲第二線▼

箱根の七湯めぐり

- ◎第一日 新橋△△△國府津△△△小田原△△△湯本△△△
 - ◎第二日 湯本△△△塔の澤△△△堂ヶ島△△△宮の下△△△
 - ◎第三日 宮の下△△△底倉△△△木賀△△△
 - ◎第四日 木賀△△△強羅△△△大涌谷△△△姥子△△△小涌谷△△△
 - ◎第五日 小涌谷△△△芦の湯△△△
 - ◎第六日 蘆の湯△△△湯の花△△△元箱根△△△
 - ◎第七日 元箱根△△△三島△△△新橋△△△
- ▲新橋より國府津 までば汽車、距離四十七哩、賃金三等にて七十八錢、二等は一四十七錢、普通列車にて二時間卅分を要し最急行なれば一時間廿四分
- ▲國府津より湯本 までば電車あり汽車の着毎に發車し小田原を経て湯本まで約卅分にて賃金三等十五錢、二等は二倍、一等は三倍
- ▲湯本より箱根 に入りては山路なれども概ね道普請行き届き靴下駄にて踏破すべし、足弱ならば宮の下底倉邊までは人力も通じ、駕、馬等は何處までも行く
- ▲三島より新橋 汽車、哩數八十一、時間四時間半、賃金は三等一四廿四錢

箱根は俗に七湯めぐりと云ふが、近年新湯が出来て其數合せて十二湯となつて居る、宮の下、小涌谷は外國人、湯本、塔の澤は紳士連と客筋に極りが出来て頗る贅澤で不自由のない代りに中々お金の要も處もあり、底倉より上へ上れば質樸で安いのに驚く程の處もある。

箱根と云つても塔の澤か湯本なら一晩泊りでも、結構潤聲を聞きながら温泉に入つて太平樂を並べて來る事も出来るが茲には一週旅行の第二線として七の字に因ひんで七湯巡りをやる事にする。

新橋から國府津までは皆さん先刻御承知、國府津で下車すると直前に小田原電鐵の停留場がある、西南に眞鶴ヶ崎を眺めて岸には磯を打つ荒浪、耳には松の嵐、海水浴には一寸好い處だから夏場は流行る、葦屋か國府津館に一泊して濤の音に寝られぬ思ひをするのも一寸一興かも知れぬ、電車に乗つて湯本に向ふ、酒匂の松濤館前で停車する、盤蛇たる老松の間に茅葺、瓦屋根二部屋三部屋の小亭が幾軒となく建て連ねられて、貸別荘とし、又旅館として、夏はお客がぎつしり、此家には寫

眞用暗室があるから、素人寫眞師には便利である、道寄りしては時間が後れる、小田原の外郎屋の前も素通りにして、やがて水聲の淙々たる早川の岸を走つて居ると思ふと湯本は直ぐそこだ。



箱根珠簾の瀧

玉の緒橋を渡れば環翠樓、玉の湯、清涼館、福住、新玉の湯、一の湯などいづれも綺麗だ、宿料は一圓から二圓と思へば間違はず、お茶代も出来る丈奮發したが御得であらう。

塔の澤湯本で見物す可きものは、玉簾の瀧に早雲寺、福住橋を渡つて突當つて左へ曲がる、須雲川の橋を渡つて川添ひに右へ上ると三四町で瀧へ出る、瀧の見物料と茶代で金五錢、高さ十間、幅七間余の飛瀑は絹を晒すが如く、誠に名に背かぬ、自然の景物としては餘りに小綺麗な瀧である、歸り道須雲川の橋を渡らずに右へ折れて坂一つ上り、畑道を二町許で早雲寺がある、北條早雲の建立で、狩野元信の龍虎の襖など見て置く可き寶物が大分にある。

宮の下へは塔の澤から一里十五丁、早川の流に沿ふて、夏は新緑の翠を浴び、秋は満山の紅葉、散り懸かる錦を見て徒歩もよし車もよし、爪先上りの道である、一里ばかりの處で、右へ溪流の間へ降りると、急坂直下、早川に沿ふて石に枕し、流に嗽ぐ可き處に堂ヶ島温泉がある、宿屋は近江屋に大和屋、石を噛み巖に激する早川を渡ると對岸數丁の處に調への瀧、白糸の瀧、白糸の瀧は箱根靈顯覺の仇討の初花が水行をした處ださうだ、「此處ら邊りは山家故紅葉のあるのに雪が降る」と云ふ程でもないが、山氣直に膚を襲ふて、夏の晝寝にも襦袢が要る。

宮の下へ行けば東京へ歸つた様なものだ、御用邸もあれば東洋第一と云ふ富士屋ホテルの輪奐の壯麗なるもあり、電信電話郵便局、是が鷹の巢山の中腹、海拔一千百廿尺、早川の流を蜿蜒たる白蛇の如く眼下に見て洋食も美味く食へ、玉も突ける、富士屋は西洋人が重だ、箱根へ来て洋行の代りになる譯でもないから、奈良屋にするも好し、堂ヶ島か底倉に根據を設けて出入するも好い。



路山の根箱

宮の下を右に見て西へ町續きに底倉へ行く、蛇骨川と宮城野川が合流して早川となる、但し流は深い谷底で、水聲の潺湲たるは脚下に聞き棄てて底倉に着く、蛇骨川に架けた、萬年橋を堺にして北には鷲屋あり、南には梅屋仙石屋あり、茲は宮の下に比して勿論、湯本塔の澤よりも手軽に逗留する事が出来る、

だから來がけに湯本塔の澤をザツト見物して茲に逗留して七湯をめぐるのも好いかも知れない、萬年橋から溪底へ下つて往くと秀吉が小田原征伐の時に入浴したと云ふ太閤の石風呂と云ふのがある、箱根草の採集旁一寸往つて見る必要がある、底倉から道は二つに分れ、蛇骨川に沿ふて行けば小涌谷、芦の湯、宮城野川に付いて上れば木賀、強羅、仙石原、姥子に行く、宮城野川の道を取つて行く事六町。

木賀の温泉に達す、山は愈々奇にして、流は更に奇である、澗聲雷の如く又急霰の如く、雲忽ち起り雨急に霽れ晴好雨奇の景色千變萬化、高山の面白味のあるのは此處が第一であらう、宿屋は龜屋、仙石屋の二軒、高くなる程安くなるのは國技館の席料と箱根の宿とでも云はうか、木賀を出て流を溯る事更に五丁で宮城野村と云ふがある、水田もあり農家もあり、名物の蕎麥屋もあり、奇に飽きた目には平凡なる村落の光景が強き印象を與へるであらう。

更に川を溯る一里、仙石原の温泉がある、宿の設備も不完全、態々行く程の事も無いが、爰を西北に去つて乙女峠へ出れば芙蓉の高峰指呼の間にあり、手に取れさ

うに見えると云ふ、爰から峠を下れば御殿場へ出られるから、里心の急に起つた人は直に歸るに便利である、宮城野村へ戻つて早雲山を上る一里許りすると新温泉強羅(がうら)へ出る、宿屋は早雲館一軒、庭に五間四方の湯があつて泳がうと騒がうと御隨意、但し淺草の常盤の様に日本一の湯瀧はないさうだけれども、全く俗界を放れる事遠いのであるから、閑寂無比、而も宿料は七十錢位で大威張。

大涌谷へ行くには強羅から僅に二十餘町、併し冠岳の半腹を繞り急阪に上るのであるから女連では困難だらう、大涌谷は小涌谷と相並で大地獄小地獄と云つて阿鼻焦熱の地獄を其儘、地面は洋杖で突いても熱氣迸り烟は凄じく立登り、障煙濛々として精進の悪い者は長くは居られない程の無氣味な處、但生きて居る内に爰へ一度往つてさへ置けば死んでからは極樂へ往ける事になるか如何だか、是を見物して米の飯の美味をつくく感じてから西の方角に鏡の如き芦の湖を眺めて飯を下るともう五六町で湖水の岸へ出やうとする處に、姥子の温泉がある、宿屋は二軒あるが差したる設備もない、爰の温泉は眼病に能く利くと云ふので、泊り客の多くは眼の

悪い人ばかりだから、見物の客は宮の下か底倉へ戻るか、又小涌谷へ行つて泊るも好いが、芦の湖の明媚なる風景を緩々賞翫しようと思ふなら、姥子に泊るも又一興だ、爰も勿論宿料大に廉なる方だ、姥子から湖水の岸へ出ると丁度湖水の北の端れ



大涌谷大地獄

舟を備つて湖上二里、ゆるく富士のやさしき姿が細波の上に宿るのを見物して居ると元箱根へ往かれるが、矢張戻つて道を順に取るが好からう。

て行くと、小涌谷へ行かれる、大涌谷と同じく地獄であつたのか、地獄の釜の火が消えたか、此方は今では極樂だ、温泉宿も三河屋と云ふのがあつたか、西洋料理も出来ず、玉突もありませす、土地の高さは海拔三千尺と云ふのだから見晴しは非常に好

い、朝日夕日を明星ヶ嶽、明神ヶ嶽の絶景に眺め溪に下れば千條の瀧の絶景もある。
小涌谷から更に一里上ると芦の湯である、箱根の温泉の多くは鐵鑛泉なのに爰
だけは硫黄で、病氣に依つては是非爰迄上つて來なければならぬ、上つて芦の湖
へ行くには一里八丁、下つて宮の下までが一里半と云ふ不便な土地でありながら、
中々の繁昌、随つて西洋人の洋館、日本人には日本室、喰物も和洋御好み次第と云
ふ松阪屋と紀伊國屋と云ふ二軒の宿屋がある。

湯の花を賣り出すので其名を呼ばれて居る湯の花澤は芦の湯からたつた五丁、
宿屋は花の湯と云ふのが一軒、温泉場としてより湯の花製造が土地の事業になつて
盛大であるけれども、芦の湯より駒ヶ嶽へかゝつて五丁登りになつて高燥な土地で
あるので外國人などは盛にやつて來るさうである。

蘆の湖(箱根湖)へは芦の湯から一里八町、此間に曾我兄弟の墓、多田の満仲の
墓がある、曾我兄弟のは苔蒸した五輪塔、いかさまと思はれるが、多田の満仲のは
いかものではないかと思はれる、其外此邊は箱根権現の奥の院の跡と云ふので、阪

道に自然の巨石に彫刻した廿五菩薩、地藏菩薩などあり、どれも古色蒼然昔を忍ぶ
に足る、坂を上り切ると忽然眼界開けて一碧の箱根湖、富士は其姿を逆に映し、浮
べるが如き塔ヶ島に離宮の建物誠に一幅の畫で、水迫り山急なる是迄の景色から一
轉、悠々たる天地に入りたる思ひがある、塔ヶ島の半島は湖の南岸より突き出で、
東は元箱根、西は箱根の堺となつて居る、元箱根の端れ、湖水と文庫山との間に昔
の御關所の跡がある、街道の風物昔を想ひ起させ金紋先箱の道中が目に浮ぶ様な感
も起る。

元箱根には箱根神社、賽の河原、箱根別當の舊跡などあり、賽の河原には今も石
佛の大小が散を亂して居る、元箱根から西へ離宮の御門前を通つて箱根へ着く。

箱根町は即ち東海道五十三次の一つで、町の東は小田原町、西を三島町と云ふの
は昔々住み手がなないので小田原と三島とから移住させたので名が残つてゐるのださ
うだ、箱根から三島迄は所謂箱根の古道、爪先下りに下る三里廿八町、天下の嶮と
稱へられて、磊々たる石ころ道、樂には歩かれないが、旅行家は是非踏破しなけれ

ばならぬ、三島から停車場の三島までは約十二町、時間都合で急行車に乗る人には西へ一里半、沼津へ出るも好からう。

更に最一つ最も趣味もあり、面白くもある道は箱根の古道を湯本まで下る事である、昔の東海道は温泉道以外に須雲川の川上から河沿に下つて畑、須雲の二村を過ぎ湯本へ出る道がある、老杉鬱蒼、上りには困難だが下りは左程でもないから、此道を取るのも洒落て居る。

箱根町から伊豆へ出ようとすれば半里餘を更に坂道に懸つて日金峠の絶頂に出で駿河相模の兩方の海を見ながら、下つて行くのも面白からう、(豆總の海岸の部参照)

▲みやげ物 湯本細工、湯の花、小田原の鹽辛、梅干、箱根草、湯の花染

箱根路を我へ来れば大磯やこゆるぎの磯に浪のよる見ゆ (實朝)

『箱根から東へは野暮さ化物も来ないさ云ふが如何云ふ譯だ』
『大方お茶代が怖いからだらう』

▲第三線 日光と鹽原

- ◎第一日 上野 日光驛 日光町
- ◎第二日 日光 中禪寺
- ◎第三日 中禪寺 日光
- ◎第四日 日光 日光驛 西那須野驛 鹽原
- ◎第五日 鹽原
- ◎第六日 鹽原 西那須野驛 黒磯驛 那須
- ◎第七日 那須 黒磯驛 上野

▲上野より日光驛 日鐵 哩數九十哩九、宇都宮にて日光線に乗換へ、乗換すに直通のもあり、成可く夫を運むも好い、時間ば四時間半、賃金三等一圓卅六銭、(年數回往復割引切符を發賣する)

▲日光驛より日光町 僅に五六町にして町に入る、日光第一の名所たる神橋までハさへ十二三丁しかない

▲日光より中禪寺 日光町から中禪寺道馬返まで一里八丁は人力車共に通じ、夫より先は中禪寺迄駕を備ふ、見物には徒歩尤もよし且つ憩ひ且つ眺めするのち旅のたのしみ

▲日光驛より西那須野 汽車、哩數五十二哩、時間二町間半、賃金八十五

▲西那須野より鹽原 那須野も原を行く事三里、既に鹽原奇勝の緒に達す、

茲まで人力車で行き(車賃三十五錢)、茲より徒歩むよろし

▲西那須野より黒磯 汽車、七哩、時間廿三分、賃金十三錢

▲黒磯より那須温泉 道程那須の湯元まで四里廿九丁、人力車あり

▲黒磯より上野 汽車、哩數九十九哩二、時間四時間廿四分、賃金三等一圓四十七錢

汽車は宇都宮にて乗換であるから一度下車して宇都宮の名所を一巡するも好からう、試みに二三を挙げると二荒神社は日光とは別物にて崇神天皇の皇子豊城入彦命を祀つたもの、古き人麿の畫像がある爲め柿本の人麿を神体 間違へて居る人も

ある、宇都宮公園は町の中央の山の上にあつて東に筑波、西に富士を眺め眼下には町の全景呼應の間にあり、櫻の名所である、大字北川原の興禪寺は宇都宮貞綱の建立にて啓書經得度の處、境内には淨瑠璃坂仇討の發端とも云ふ可き奥平内藏允の墓がある。

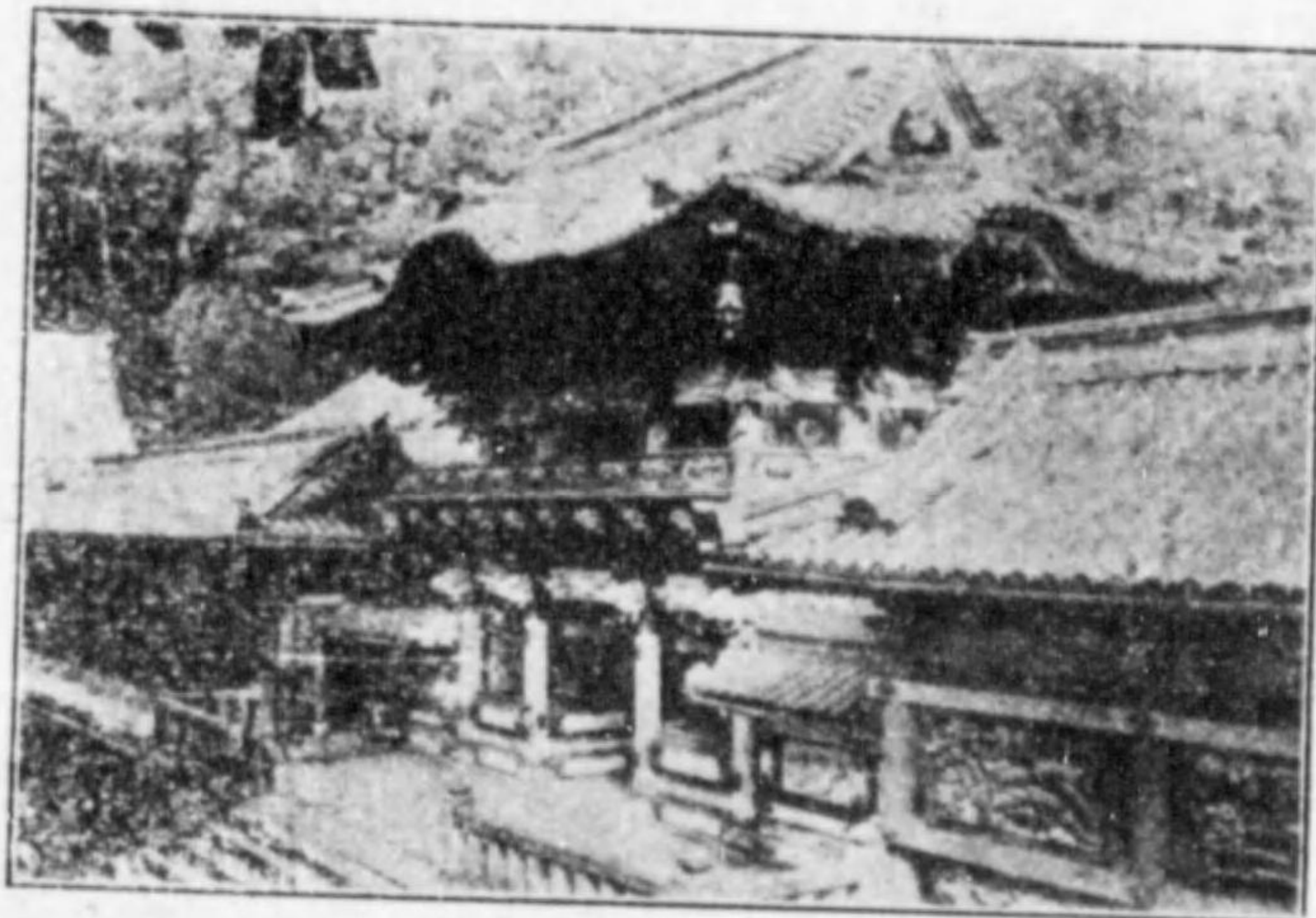
宇都宮から日光線に乗り換へて一時間半、日光驛に着く、停車場から真直に二町日光街道として有名な今市の杉並木の端れへ出で、右へ折れれば日光町、爪先上りに鉢石の町續き、突當りに日光の山々が仰がれる。

名物の羊羹屋、挽物細工屋、西洋人相手の美術品屋などの角並にある町を通り過ぎると、神橋(山菅橋)へ出る、朱塗の壯麗なる姿は寫真や繪葉書で誰でも知つてゐるが、此橋は渡れ



日光神橋

ぬ様に門が鎖してあつて右手に鐵橋が掛つて居る、徳川時代と明治時代が際立つた



日光陽明門

り中禪寺へ掛つて華嚴を見るとあべこべだ、だから遠くつても中禪寺へは是非向は

對照をして居る、此大谷川を渡れば既に日光で
ある、宿屋は小西、神山、いづれも宏壯なる建
物、日光山を一巡して泊るもよし、泊つてから
朝立ちに見物に出るもよし、神橋の袂に參拜人
取扱所があつて、參拜の旅客に參拜券を賣る
色々の名が付いて尠からぬ金を取揚げられるが
是を拂はなければ外側ばかりしか見られず、陽
明門や唐門の所謂結構は知られない譯だ。
大谷川を渡つて日光に這入る、丹碧の色、老
松古杉の轟々たる間に目も眩ゆい、が人工が自
然に勝つて居て稍壯嚴を缺く様に感じる、其代

ねばならぬ、日光の結構なる建物で必ず見残してはいけぬのを道巡に擧げると。深
沙大王社、輪王寺門跡を見て眞直に行く。石の大鳥居、柱の直徑が三尺五寸、黒田長
政の献納で後水尾天皇宸筆の額、西に酒井忠勝献上の五重の塔を見て、次には陽明
門、一名を日暮の門と云つて朝から晩迄見ても見盡されぬ程の結構壯麗、好い加減
に見て次の門は唐門、次に本殿、唐門を出で、左に敷町の處に蒲門あり、左甚五郎の
作、眠り猫のある爲め有名となりしもの、次に坂下門を過ぎ二百四段の石段を上る
と、是迄の華麗に似ず、莊嚴なる奥の院、寶塔には家康の遺骸が納めてある。
東照宮の見物を了り、序に寶物陳列所を一覽し、表門を出で西に杉の樹立を一町
行くと二荒神社がある、拜殿と本堂の間に刀痕を歴々と残せる化地藏がある、更に
石階を下り常行法華二堂の間を通つて老杉の間を降つて小山に登ると慈眼堂、と北
白川宮の廟。
三代廟は二王門より入り、持國天廣目天を安置したる二天門を過ぎると、拜殿本
堂、善美を盡し數奇を凝らした結構は、東照宮に競べて劣る事はない、本殿から包

裏門、皇嘉門から奥の院となる。

二荒神社の左を奥に十五六町、権現社あり、白糸の瀧あり、社の脊には子種石、泪の泉、三本杉。

稻荷山を渡り高原一里ばかり、踏破すると日光三瀑布の一霧降の瀧へ出る、瀧壺に面して居る望瀑臺から眺めると、瀑は一の瀧二の瀧の二段となつて壯觀比なし、更に五丁の絶壁を歩み下ると、瀧壺に達す、瀑聲轟々、飛沫霧の如く一の瀧は見えず二の瀧ばかり巖を噛み珠を碎くの光景、壯絶快絶を叫ばすには居られない、是を一段として宿へ歸つて少しく憩むよし、是より道は神橋に戻つて中禪寺湖へ向ふのであるから。



子種の越飛

神橋を渡つて左へ大谷川に添ふて僅に三四丁で含満ヶ淵を川の北岸に見る、數年前の暴風雨の際、岩崩れ石流れて昔の傾は止めないが、日光の一名所たるを失はない。

寂光の七瀑は田母澤の御用邸に付いて右に一里、寂光寺火災の後、僅に若子神社あり、寺號を負へる七瀑は其傍にある、一丈の素絹流れ落つる事七段、その奥に亦一の瀧と云ふのがある、路傍に馬蹄石と云ふのがあつて凹んだ處に清水が湛へられ暑中も涸れた事のないのと、中を掻き濁すと必ず驟雨に逢ふと云ひ傳へてある。神橋より西南に一里十五町、道の中禪寺舊道の分れる處から取つて字荒澤に着くと瀑聲の響々たるのが聞える、霧降華嚴と共に三瀧布の名ある裏見の瀧である、高さ十丈幅二間、昔は岩石に添ふて立てば裏から見えたこと云ふのであるが、惜しい哉是も暴風雨の爲めに崖が崩れて、裏は見えない。

裏見の瀧から清瀧村へ出る、清瀧から馬返、馬返には名物力餅あり、是より大谷川の絶景深澤の溪谷を渡る新道に入る、山は漸く高く水は愈清く、次第に變化し

て行く光景は繪にも筆にも及ぶまい、登る事十數町で、水聲近く脚下に響き谷を隔て、對ふの山に又二つの瀧が見える、大きいのが方等、小さいのが般若、舊道の近きを取つて又二三丁、中の茶屋からは阿嚴の瀧が見える、不動坂の急を登り切ると大平、山開けて道自から平なるを少しく行くと、左手に又瀑聲の耳を破るを聞く是が即ち華嚴だ、崖を下る事數間、危き岩石を削つて瀧見の茶屋が作られてある。欄干につかまつて見れば疑らくは、是銀河の九天より落つるかど、何にしる高さは七十五丈、瀧壺を見卸しても飛沫が濺々として唯岩燕の飛び交ふのが時々目に入るばかり、序に茶屋の柱を見ると藤村流の樂書數千百通り、讀で分らないのが即ち人生不可解宗とでも云はうか。

華嚴から僅の道程で眠れる如き中禪寺湖の岸に出る、周圍七里卅三町、岸に湖畔ホテル、鳶屋、米屋、泉屋と中宮祠あり、宿泊料は八十錢より一圓五十錢の見當、湖水に面して海拔八千五百尺の男体山、湖岸には立木觀音、歌ヶ濱、寺ヶ崎、五大尊、上野島などの名所がある。

湖水を舟で渡れば（陸路は約一里）龍頭の瀧を見る事が出来る、更に數町で戰場



日光湯木道

ヶ原、高山植物の低く生へ、落葉松の夥しく樹てる間を横断して一里、古賀谷の奥に高さ四十五丈の湯瀧がある、瀧の傍を上る事一町、湯の湖の岸に湯本温泉がある、風光頗る佳、旅館吉見屋、山田屋、松本、釜屋、米屋あり、暑さは暑中でも八十度に上らず、温泉は硫黄泉でき、目はあり、宿賃は六十錢より一圓と云ふ安直、そして日光と茲まで来れば借金取の來る虞はないだらう、思ひ切つて海拔四千尺の湯本から更に白根山に上れば五色湖、魔湖、佛湖の勝がある、但し餘り長く居ると鼻が高くなり肩から羽が生へるかも知れぬ。

日光から鹽原那須へ行くには少しく西洋料理のあとで牛鍋の如き感なきにあらず

、けれども又趣きの變つた處があらう、鹽原は西那須驛より三里にして關谷村へ來ると既に水石凡ならず、見返り橋、見返り瀧の勝景を見て坂を下ると鹽原の入口大綱だ、宿屋は佐藤、大綱から十八町、洞門を過ぎ寒凄橋を渡り山迫り水窮る岸に添ふて福渡戸(ふくわた)に着く、茲には満壽屋、松屋、玉屋、丸屋、叶屋など宿屋澤山あり。温泉は箒川の崖より湧き出し不動の湯、冷の湯、藥研の湯などあり、質は鹽類泉、リユーマチス、貧血病、子宮病等によく利く。

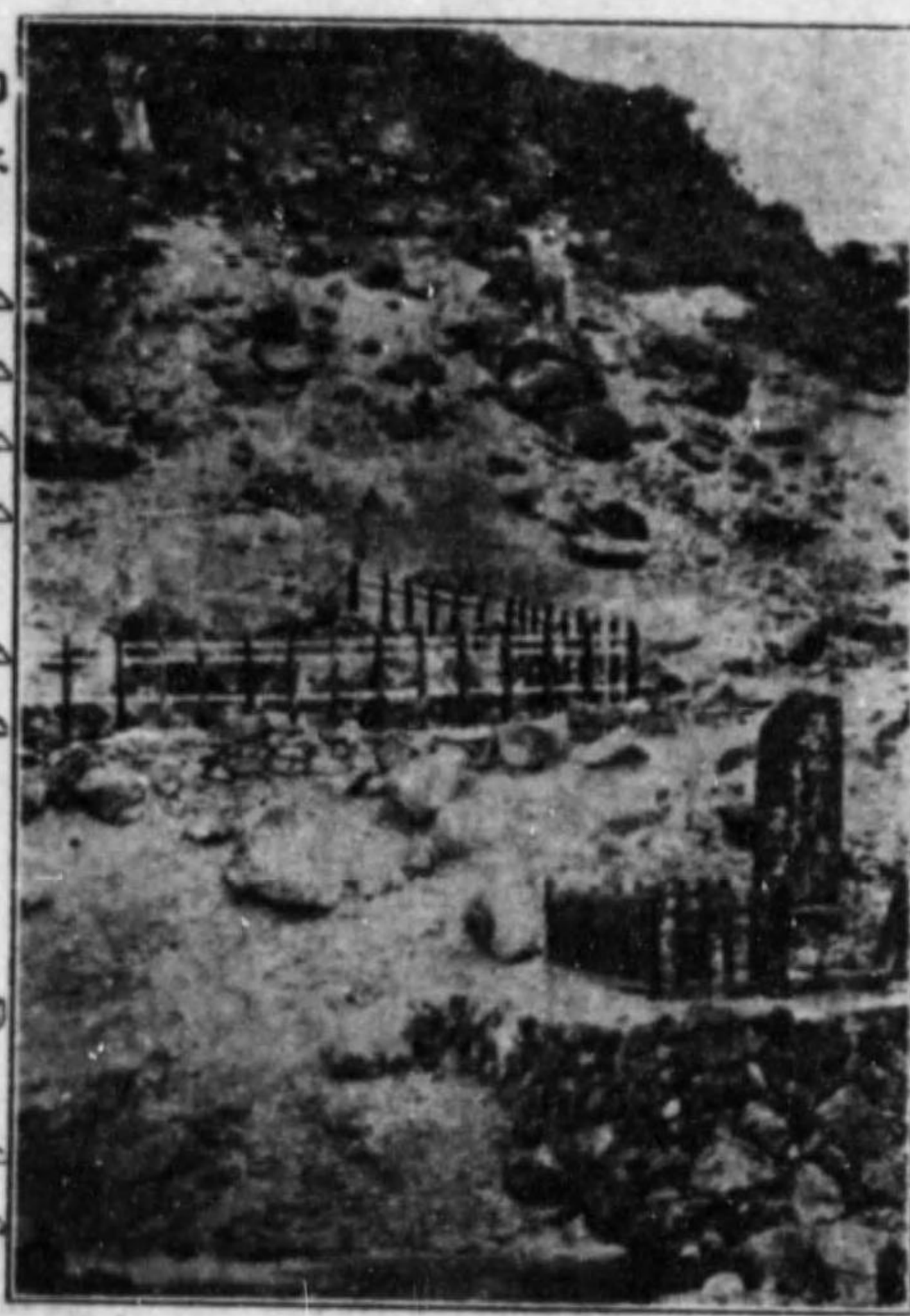
福渡戸を出て二町右に天狗岩、左には蒲生氏郷が乗つたといふ野立石、コレが今では冷み場所になつて居る、少し先に例の萬治高尾の碑がある「寒風に脆くもくつる紅葉かな」、畑下戸(はたおり)より十數間高十丈の吉井の瀧あり、畑下戸の温泉宿は佐野屋、紙屋、大和屋、伊勢屋、井桁屋、畑下戸より町續き門前(もんせん)と云ふ温泉場には宮田屋、松本屋、たゝみ屋等あり。
一の橋を渡ると古町、茲には上の會津屋、中の會津屋、米屋、萬屋、永樂屋、稲屋、楓川樓あり、會津道に入り六七町で、源三位頼政が隠れたといふ源三の穴、八

幡社あり、境内に周圍四丈、逆に枝を垂れて鹽原七不思議の一つに數へられる逆さ杉を見物し、戻つて鹽湧橋を渡れば鹽の湯(宿屋、明賀屋、玉屋、柏屋)前に石黒山、下には鹿股川、川に添ふて廿町を上ると雷霆、霹靂等六ヶ敷い名の瀧四つあり。門前に戻つて細路を山に攀る事八町で、須卷(すまき)に着く、湯瀧のある爲め瀧の湯とも云ふ。

古町より西二里の山中に新湯あり、藤屋、下藤屋、鶴屋、萬屋、などの旅館ありて湯は上湯、中湯、寺湯、貉湯の四つあり、新湯より西北へ廿町で古湯本と云ひ、頼朝那須の狩倉の時梶原景時が入浴したと傳へる梶原の湯、此邊にも瀑の數少からず。

散歩の序に見る可きは源三穴と箒川を隔てた處に伊豆冠者有綱を祀つた祠、高尾の兄書工普門が落ちて死んだ普門淵、其普門の描いた畫のある妙雲寺などであらう。那須の温泉は那須岳の四周にあつて其數七つ、一番近いのは湯本、宿屋は小松屋河内屋、松川屋、温泉は七湯とも酸性泉にて胎毒、瘡毒、リユーマチス、脚氣等に

好い、湯本から十六町で高雄股、湯本より北の卅丁で辨天の窟のある辨天、辨天から東へ十八町で北温泉、爰は四方を山嶽で圍まれて居る爲め朝九時から午後は三時迄しか日が中らない、道は少し峻阻ではあるが西へ十五町で大丸、爰の湯は華氏の百度から百五十度もあつて頗る熱い、大丸から新道を山に登る一里卅町、仰いでは茶臼岳の噴火を見、俯しては奇巖怪石の間を流る、湯川の急湍を眺めながら三斗小屋温泉へ出る、宿屋は大黒屋、三春屋、生島屋。



殺生石

茶臼岳をめぐり、三斗小屋からは四里餘で板室温泉、板室から三里で湯本へ出る道あり、外に南へ那珂川を渡つて黒磯へ戻る道もあり、ぐるりと廻はつて七湯をめぐる道もあるけれども、忙しい旅にはチト困難なれば、湯本ぐらいにて御免蒙り山

にばかり居て仙人じみない内に東京へ歸るが好し。

那須の湯本の傍に玉藻前の化して成つたる殺生石がある、石の大きき五尺、同じ湯本の温泉神社は譽田別命を祀つたもの、那須の奥一に加護を與へマンマ扇の的を射さしめた神様だ、其證據には奥一の鏑矢一筋が奉納してゐる。

▲みやげ物 日光羊羹、大谷海苔、寄木細工、埋木細工、

世の中に我はなにを、那須の原なす業もなく年や経のへき 蒲生 秀郷

「裏見の瀧さ云ふのは以前は裏が見へたんだそうだれ

「へい、裏は何んだらう

「多分、裏は花色木綿

▲第四線▼

松島と常磐の海岸

- ◎ 第一日 上野△△水戸△△太田△△水戸△△大洗△△
 - ◎ 第二日 大洗△△平磯△△大甕△△助川△△
 - ◎ 第三日 助川△△湯本△△五浦△△勿來△△湯本△△
 - ◎ 第四日 湯本△△仙臺△△
 - ◎ 第五日 仙臺△△鹽釜△△松島△△
 - ◎ 第六日 松島△△仙臺△△
 - ◎ 第七日 仙臺△△上野△△
- ▲上野より水戸 汽車七十三哩、時間三時間半、三等賃金一圓十三號(但仙臺又は鹽釜までの通し切符を買へば三等賃金二圓六十九錢)
- ▲水戸より太田 汽車十二哩、時間四十分、三等賃金二十五錢
- ▲水戸より大洗 陸路と水路の二つあり、陸路は三里二十五町、人力車で六十錢、水路は那珂川を下る汽船、祝町まで上等十六錢、祝町へ上つてから、更に人力車で大洗迄十錢取られる、人力にて陸路を取れば一時間半位、汽船は早く

- て一時間、遅い二時間も三時間もかゝる、けれど面白味はある、
- ▲大洗より平磯 那珂川の海に注ぐ河口の南は大洗で、北は平磯なのだから、おひろいでも行かれる、人力なら十五錢二十錢
- ▲大甕、助川 一先水戸へ歸つて又汽車で大甕までは三つ目の停車場、哩数は十三哩、時間は三十五分、大甕から助川へは汽車よりは却て人力が左なくば長汀曲浦をぶらりと歩くが好い
- ▲關本、土浦、勿來 湯本は助川から四つ目の停車場、上野から百十二哩、時間四時間半、五浦へは湯本から平磯へ出て北へ十數町、勿來は湯本の次の勿來驛から國道に入つて左へ數町
- ▲湯本 は温泉で有名な處、上野から五時間、哩数は百二十六、汽車賃は三等で一圓七十五錢、湯本驛で下車したら車へ乗るものはない、汽車の中からでもあれが温泉宿と指さしの出来る程の近さだ、湯本から仙臺へは汽車で四時間
- ▲仙臺より鹽釜松島 松島へ行くには仙臺より三つ先の松島驛で下車しても好い、茲で下車すれば松島村へ出るに約半道、夫から又數町(停車場より人力車で十五錢)所謂松島へ出られるが、鹽釜街道から行けば直に松島灣へ出て、島の

間を漕ぎ廻りつて松島村へ着くので見物の勝手はよい、船の嫌ひな人などは都合に依つて片道は松島驛からするもよからう、鹽釜へ出るに仙臺で乗り換へ、約九哩ばかり、時間も廿分ばかりで鹽釜へ出、爰からは何處へ行かうと自由、瑞巖寺前までは船賃十五錢、金華山へ行くには鮎川まで汽船で片道六十八錢、

▲仙臺より上野 汽車は哩數二百二十五哩、時間は九時間半も費る、前の晩の八時に乗れば翌朝五時四十五分に上野へ着く、閑のある人は更に一二の探勝が出来る譯である、

上野から海岸線へ乗つて出懸けると汽車の頗る早からざると石炭洋の雨の様に降り込むのに驚く我孫子を過ぎると天慶の亂の古跡地だ、所謂相馬の古御所なるものは取手驛から廿里半の守谷の町、夫から少し先桔梗が原は將門が桔梗の前と巫山の夢に耽つた處、將門の怨靈の爲めに桔梗に花が咲かないと云ふ噂、停車場の附近におさん泣すな馬肥せの鬼作左の墓がある、藤代驛から二里の眞王山延命寺に將門の墓、近き佛島は將門が武器を埋めた處だと云ふ、大花羽字羽生には累の塚、少し隔

れて鬼怒川縁に累ヶ淵と云ふ處もある。

女化ヶ原は佐貫驛から一里の處にある、命を救はれた恩に感じて狐が美女に化つて貞節を盡したと云ふ昔話、おまけに女化稻荷と云ふのも鎮坐しますが美人になるおまじなひをして呉れるか如何かは分り申さぬ、次の牛久驛と云ふのは大葡萄園があつて葡萄酒の醸造地サ。

水戸の驛へ入らうとする少し手前、左手に小山右手に田とも沼とも付かぬ廣い汚い水溜りがある、是が水戸で有名の常磐公園と千波沼である、水戸へ下車したら如何に忙しくとも此處までは來て見なければならぬ常磐公園今の名第一公園は停車場から僅に十五六町、人力で廿錢ばかり、椏枒たる老梅四十餘株烈公を祀つた常磐神社の東手にあつて梅だけでも東京から見物に行く價値がある、好文亭に上れば眼下は千波沼、周圍一里廿四町、八景とか十景とか云ふ程の眺は昔の事、今では水涸れて唯灌溉の役に立つばかり埋める事も出來ぬ厄介物となつて居る、北岸に東照宮の社がある、第二公園と云ふのは停車場の直ぐ上日本の儒者を集めた弘道館の舊蹟今

でも講堂は遺つて居る、茲にも老梅の參差たる間に弘道館の碑あり孔子廟がある、常磐村の墓地にある藤田東湖の墓も時間があつたら參詣するがよし、同村瀧阪にある、『今ぞしる思ひ出でつゝ曝井のさらにも人は戀しかりける』の曝井を汲むも妙であらう、第一第二公園の外は大して見る物もない、水戸で泊るならば鈴木屋、芝田屋、太田屋、泉屋、森川屋、清香亭、泊らずに大洗へ向ふのもよし、那珂川の汽船は停車場近くから出る、人力なら停車場から出る。

太田へ往つて西山館を見物するにも五六時間あれば澤山だ、西山は太田から西へ十町、光園が大日本史を編纂した處である。

『磯で名所』の大洗は人力で行けば直ぐ、汽船で行けば祝町へ上がり海門橋を渡つて『客を待つ』と云ふ祝町の娼家の間を通り白沙青松十餘町を過ぎ一碧萬里の海岸へ出る、其處が大洗、後手には丘陵一帯に老松鬱蒼として居る間に磯前(いそ)神社、大巳貴命、少彦名命を祀つて宮柱太しく建てられて居る、丘上へ登れば眼下は鹿島洋の絶景、真下には大洗、右手は磯濱、左手は港、平磯、朝日のまだ出ぬ夜明に海風

に面を拂はせて茲に上り雲か浪かの沖合から海を金色に染めつゝ上る日の出を見たれば定めし好からう、月の晩は浪打際の砂原、さては飛沫面を打つ巖の上に立つて濤聲に相和して對ふ岸の亞米利加人を呼で見るとよし、左なくば金波樓、魚來庵、小林樓、杵屋、大洗ホテルの樓上で鮮鱗を下物に磯濱藝者の磯節を聞くも一興であらう、南の磯濱にも海水浴場あり、那珂川を渡つて北の平磯にも海水浴場萬年樓、平野屋、平磯館等がある。

水戸へ戻つて又汽車へ乗れば汽車は磐城の海岸を走り白沙青松、紺碧の海に白帆の泛ぶ好風景、第一に大甕に下車、泉ヶ森の辨天に賽し、大甕神社の奇巖怪石重疊の上にあるを鐵鎖に頼つて上れば、前は磐城海岸水木の磯、久慈濱、磯ヶ濱の苦屋の烟かすかに、脊は富士筑波を一眸に集めるの絶景である、旅館には銀波樓、湊屋、若松屋などあり、此邊の特色として民情淳朴、宿料の低廉なると魚の新らしい事を云はねばならぬ。

下孫驛で汽車を降りれば鮎川と河原子との二海水浴場がある、いづれも停車場か

ら十五町内外、一里ばかり離れた眞弓山は寒水石の産地で八幡太郎が凱歌を擧げた處ださうだ、下孫の次は助川、此邊は停車場まで往つて汽車の出る時間を待つよりは草履ばきで貝でも拾ひながら浦づたひをするに好い、助川は第二の大磯といふ評判がある程で夏は涼しく冬は暖か、旅館松風館で八十錢から壹圓位で泊める、近隣に水車の漣、八幡清水あり、八幡清水は八幡太郎が弓の筈で巖を突いたら清泉滾々として湧き出し一軍渴を免れたと云ふ舊蹟。

助川の次の川尻も海水浴場として好適の場所、停車場から廿町、海雲樓、豊樂館本叶など旅館はいづれも五十錢から八十錢と云ふ相場、養蠶の祖と傳ふる稚彦靈命を祀つた蠶養神社、基石の出る基石の濱、伴部櫛形の城趾などいづれも近所である高萩驛に近い高戸の濱には砂の赤い爲めに名の高い赤濱、手綱ヶ濱、滑ヶ瀧などあり、宿屋は蓬萊屋、高萩館、松陽館、磯原は景色の好いので聞えて居る、停車場の北に天妃山あつて辨天社を鎮座し山腹に旅館山海館あり、海上二つ島に怒濤激浪の澎湃たるを眺める景色、義公が「大津瀧浪白、薄葉壓霜紅」と吟じられた處である。

關本驛から僅に十三町で平潟へ着く、芭蕉が「此邊り目に見ゆるもの皆涼し」と咏んだ處、昔から街道の要衝を爲して又舟着場になつて居る、旅館は青海亭、住吉屋平潟から南へ十町で大津にも海水浴場八勝園と云ふのがある、大津を過ぎて直きに五浦(えづ)である、波濤岩に激して音響を發し鐘鼓洞(かねつら)と云ふ處がある、一帯に絶壁奇巖波濤と相錯綜し常磐海岸の絶勝である、茲に美術院の岡倉覺三氏が一派の大觀、觀山、春章、武山の諸星と共に居を占めて以來、邊陲の一村が忽ちに美術界に重を爲すの處となつたのである。

勿來の關は勿來驛から國道に出で左に折れ七八町、爪先上りの高地、昔は櫻花雲の如くに咲亂れし處、今は其俵もなく義家の「吹く風を勿來の關と思ひしに道もせに散る山櫻かな」の歌を刻せし碑のみ、茲を勿來の關の趾と知らして居る、櫻の化石を賣る家が一軒、海岸へ出れば松川磯の海水浴仕吉屋、櫻雲閣、笹本屋がある。湯本驛から七町、湯本町には至る處温泉湧出し旅客集まる、昔は温泉宿即ち遊女屋であつたのが、此頃分業になつて料理は街道第一と云ふ松柏館、浴室では東京の

人も驚くと云ふ、鳶屋などがあつて立派な温泉場になつて居る。
 湯本に一泊仙臺に向ふ途中、平驛から舞子、明石に似て居ると云ふ久の濱に寄るもよし、海岸には大同年間海中から出現しました瑠璃光如来、是を波立の薬師と稱へて堂宇壯麗にしてある、序に平驛から西へ三里、赤井嶽の中腹に常福寺と云ふ寺があつて、此處で夏の末から秋へ掛けて海上遙の沖合から無數の龍燈、陸地に流れ寄り赤井河へ溯る、是を赤井の龍燈と云て筑紫の不知火と相並ぶ奇觀としてある仙臺は元千體の佛があつた爲め千體と云ひ中頃千代と改めたるを伊達政宗が今の字に改めたのださうな、廣瀬川、青葉山、櫻の名所躑躅ヶ岡、經ヶ峯の伊達家三代の墓、見る物頗る多し、町一巡の序に八ツ塚孝勝寺の政岡の墓、南鍛冶町東瀬寺の力士谷風の墓、北八番町の林子平の墓、北山町光明寺にある支倉六右衛門の墓など好事家は見逃してはならぬもの、仙臺ホテル、芭蕉館、安藤、針久等に宿を選び町を見物して仕舞ひ、料理店對橋樓に名物ハットセ踊を見るもよし。
 瀛車を乗り換へて鹽釜に向ふ途中岩城停車場に近く車窓より左手に田圃の間に高



松島渡月橋

社前の櫻は鹽竈櫻、參拜して女阪を下り昔此村の者に鹽を焼く事を教へたと云ふ鹽

松島と常磐の海岸

き小屋掛を見る、是が日本三古碑の一、有名なる多賀城の碑聖武天皇の御宇鎮守府

將軍大野東人が建てたもの、下車して親しく見物するもよし、碑より東へ十町松の枝を重ねて居る處に能因の歌を刻むで野田の玉川を茲よりと記した碑がある、小さい溝があるだけ。

鹽釜へ來れば松島へ來たやうなものだ、停車場を降りれば直ぐ海岸で沖を眺めると松島らしい景色が遙かに見える、町の方を見ると面前に聳えた山があつて老樹鬱蒼として居る、是は鹽釜神社、松島見物の前に是非社前に額き安産のお守其他を受けねばなるまい、町を數町眞真に上る石段の下へ出る是を上り切ると奥州一宮正一位鹽竈大明神

上様を祀つた神竈社さては其お釜、牛石などを見て居る間に松島行の船の仕度は出来様。
(48)

松島へ行くか金華山へ行くか、此二つを極めなければならぬ、金華山は牡鹿半島の南端に屹立して居て松島灣の端に位して居る、高さは八十丈怒濤の間に聳え立つて山腹に天女堂、黄金山神社、山頂には龍藏権現あり、神鹿數十群りて参詣人に戯れ誠に仙境である、汽船で鮎川に着いてから阪一つ上り下り山雉の渡場に出で鐘を撞いて金華山大金寺の参詣人を迎ふる渡船を待ち始めて此仙境に足を入れる、山は崢嶸、水は奇なり蓬來山も是かと昔の人は思つたものであらう、絶景一度は行く可き處であるが足弱や女連では思ひ切つて松島だけにせずばなるまい。
松島へは雑作もない、疊の上を歩くより樂に船でゆらくと漕ひで行く、其内にもう松島や松島やと八百八島が目の前へ出現して来る、船の着くのは瑞巖寺の前、五大堂を見、瑞巖寺に寺寶を見、結構壯麗の建築を見、政宗の木像を見、政宗が秀吉より拜領した桃山御殿の一部と云ふ觀瀾亭に上り、舟で七浦八崎八島を廻るもよ

し、松島全景東西百八町南北九十町是を一目に見る松島四大觀の名ある富山、大鷹森、多門山、扇谷へ上つて千熊萬狀碁布星列の八百八島を見るもよい。
松島の景色は春もよし秋の月もよし、夏の涼みにもよいところか、雪の降つた處が好いと云つて居る、勿論朝晝夜晴好南奇日本三景の随一ゆるくと見物して、歸りは眞直に夢を載せる汽車の上疲れた體を一息に上野まで運ばせるが好分別であらう。

みやげもの

- 梅びしな、梅干、寒水石の硯、文鎮
- (水月) 宮城野の萩の筆、埋木細工
- (仙臺) 實竹の印材、ステツキ(松島)

政宗木像



鹽釜街道に白菊植えて何をきくくたよりきく

俚 諺

松島と常磐の海岸

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

芭蕉

『此間は松島へ往つたさうだが何か面白い事があったかい
 『いゝえ、唯むやみにアノ松が燃しうがしたよ
 『夫は感心、併しお前庭もないのに
 『ナアニ正月の飾りに賣らうと思つて

▲第五線▼ 伊勢参宮と月ヶ瀬

- ◎ 第一日 新橋△△△△△△△△△△ 名古屋△△△△△△△△△△
 - ◎ 第二日 名古屋△△△△△△△△△△ 四日市△△△△△△△△△△ 上野△△△△△△△△△△
 - ◎ 第三日 月ヶ瀬△△△△△△△△△△ 上野△△△△△△△△△△ 津△△△△△△△△△△
 - ◎ 第四日 津△△△△△△△△△△ 松坂△△△△△△△△△△ 山田△△△△△△△△△△ 二見△△△△△△△△△△
 - ◎ 第五日 二見△△△△△△△△△△ 鳥羽△△△△△△△△△△ 山田△△△△△△△△△△
 - ◎ 第六日 山田△△△△△△△△△△ 新橋△△△△△△△△△△
 - ◎ 第七日 新橋△△△△△△△△△△
- ▲ 新橋より名古屋 哩 數三百三十哩、普通列車にて十二時間半、最急行にて八時間、賃金三等二圓七十五錢、都合にて上野又は島ヶ原迄買へば三圓卅四錢、山田までも同額

- ▲ 名古屋より四日市 關西線哩數廿三哩、三等賃金卅九錢
- ▲ 四日市より上野又は島ヶ原 月ヶ瀬に行くには上野又は島ヶ原の驛で下車しなければならぬ、四日市から哩程四十哩、時間三時間半、三等賃金六十八錢、

新橋より直行せんとするには名古屋にて乗換となる、列車に依り島ヶ原へ停車しないのがあるから手前の上野で下車する方が都合が好い

▲上野より月ヶ瀬 月ヶ瀬へは上野驛から四里島ヶ原からは二里、いつれにしても馬車も人力もあれど東京方面よりは上野、關西方面よりは島ヶ原が便利としてある

▲月ヶ瀬より山田 月ヶ瀬から上野又は島ヶ原に戻つて瀨車は逆戻り龜山で參宮線に乗り換へて三つ目の停車場津、津から四つ目が松阪、津迄は上野から二時間半、津から松阪迄は四十分、參宮鐵道の終點は山田で參宮は此處からである、松阪から時間一時間半、上野から山田まで四時間半、名古屋からでも矢張り時間半

▲山田より二見 山田より内宮までと、内宮より二見迄とは電車あり、山田より内宮迄片道八錢往復十五錢、内宮より二見迄片道十四錢往復廿六錢、二見より山田迄片道十二錢往復廿二錢、都合に依りては回遊券を買ふべし、回遊券は廿一錢、いづれも一等は五割増

▲二見より鳥羽 海岸の道二里にて人力車あり

▲山田より新橋 數三百三哩、龜山にて乗換、更に名古屋にて乗換、時間は十三時間山田を午前七時廿五分の急行にて出れば新橋へ其夜八時半に着き、山田を午後六時廿五分で發すれば新橋へ翌午前九時に着

▲新橋を朝出れば名古屋へは日暮に着く翌日名古屋を見物して又一泊、夫れよりは前夜出發、成る可く午前中に名古屋へ着き一日見物して其夜一泊、翌朝出發をよしとす、今は第三師團の兵營である、金の鯨まばゆき名古屋の城、長島町の東照宮、門前町の大須觀音、此處は東京ならば淺草公園と云ふ見世物もあり飲食店もありと云ふ賑やかな處、此觀音の西手に續いて旭遊廓ある事尙淺草公園に吉原あるが如し

此外は商賣用でもなければ歩くにも及ばぬ處、少し離れては停車場から東南へ二里の八事山、吞海峰、吐月峰を控へて名古屋市は一目の内、頂上には弘法大師の開基に係る遍照院、八事山の南には蕨茸の名所天道山と云ふがある、伯夷叔齊ならずとも喰ふに困つた人は茲へ行く、何故かと云へば天道人を殺さずか、いやはや洒落どころではない、停車場から西二十町で上中村、即ち關白秀吉の生れた處、今は豊國

伊勢參宮と月ヶ瀬

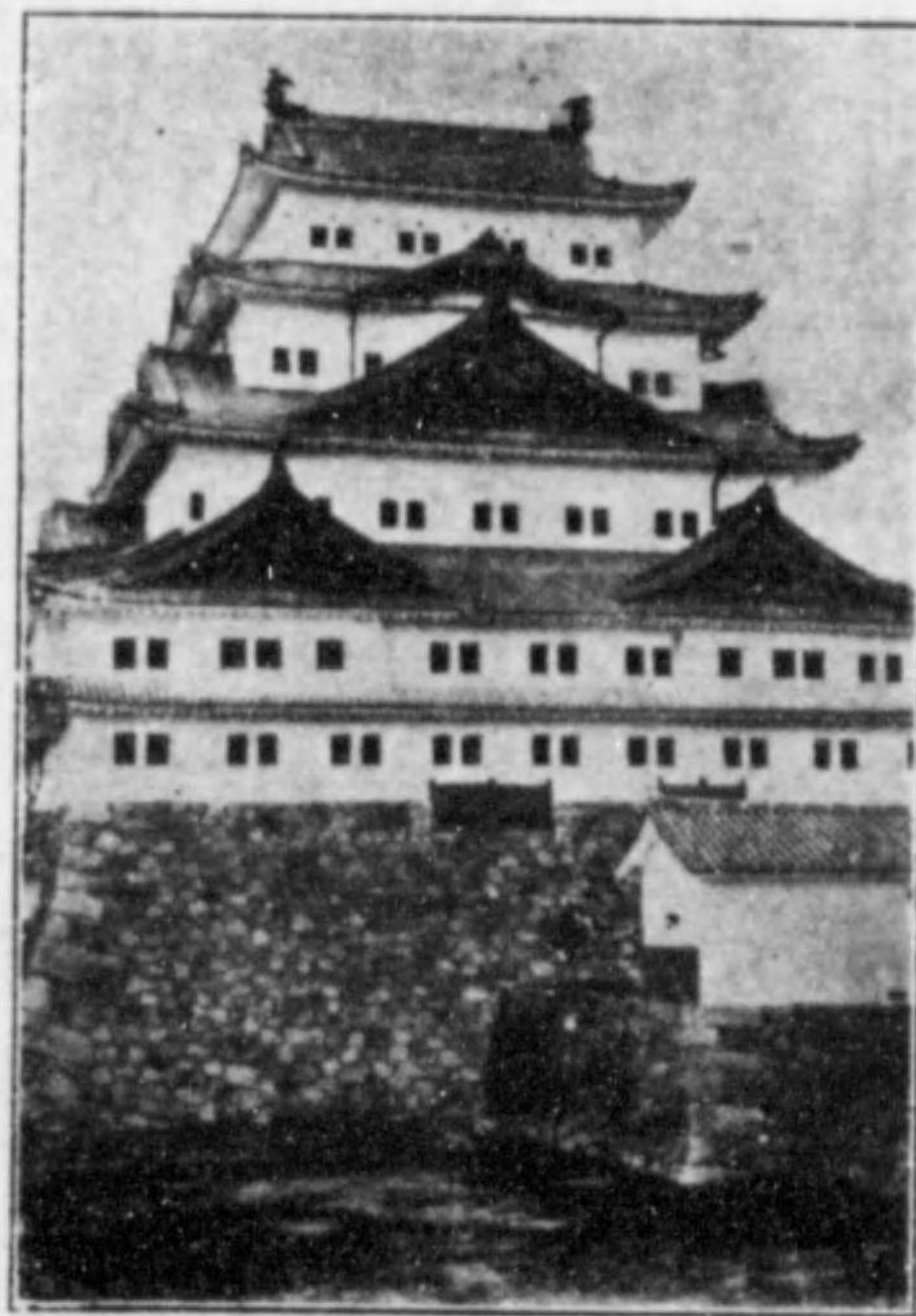
(52)

新橋を朝出れば名古屋へは日暮に着く翌日名古屋を見物して又一泊、夫れよりは前夜出發、成る可く午前中に名古屋へ着き一日見物して其夜一泊、翌朝出發をよしとす、今は第三師團の兵營である、金の鯨まばゆき名古屋の城、長島町の東照宮、門前町の大須觀音、此處は東京ならば淺草公園と云ふ見世物もあり飲食店もありと云ふ賑やかな處、此觀音の西手に續いて旭遊廓ある事尙淺草公園に吉原あるが如し

神社と云ふのが立派に建立されてある、停車場から西二里甚目寺と云ふのは推古天皇の朝に創建された古刹、夫から中央線の停車場から南へ半道ばかりの御器所村と云ふのが名古屋共進會の會場である。

停車場から車賃往復八十錢を投ずれば小牧山の古戦場が見られる秀吉家康兩雄の初手合をした處、今は公園となつて居るから其頂上の創華亭で静に茗を啜つて古今興亡の跡を見らる。

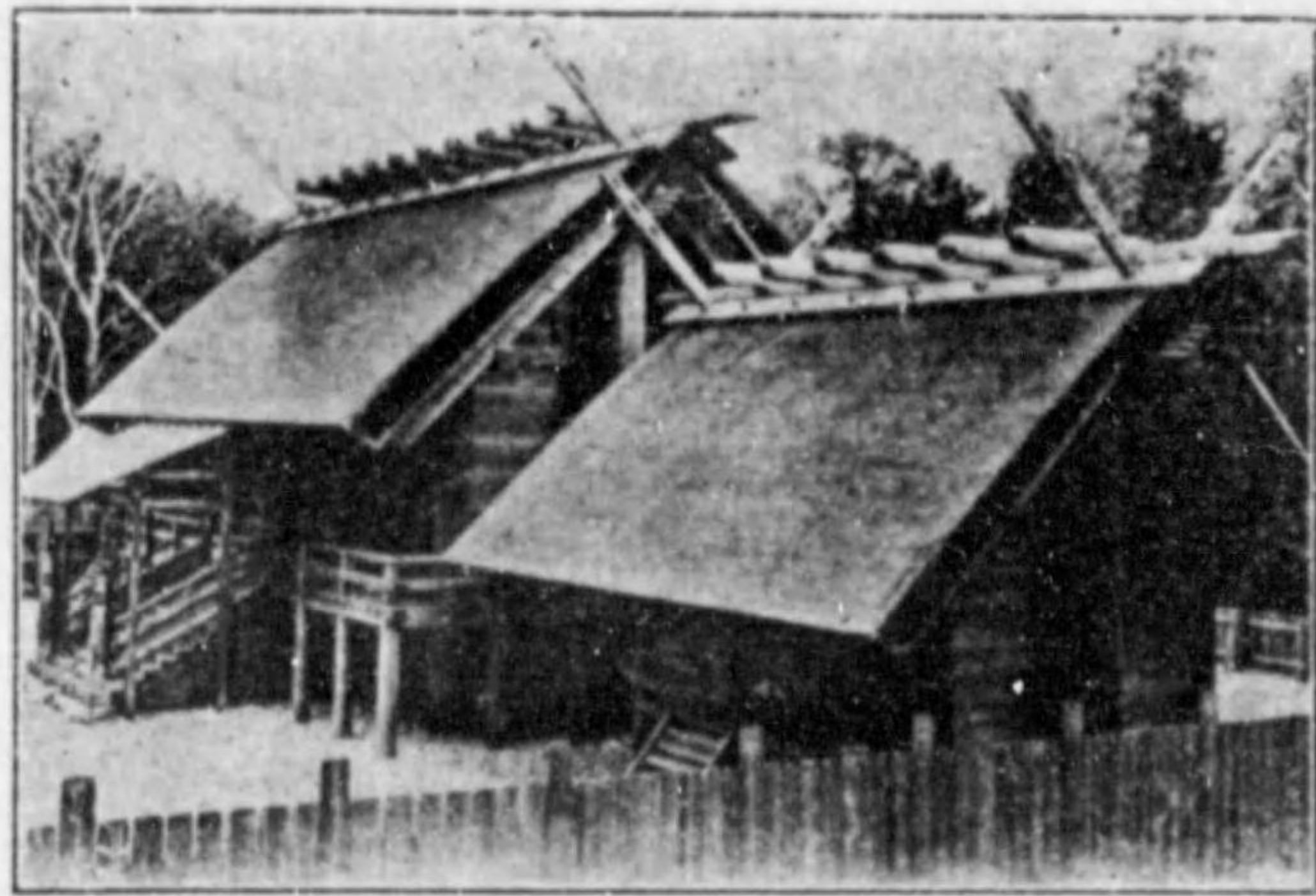
名古屋城



宿名は澤山ある、多波良、松宗、山田樓、春風樓、丸文、志那忠、鶴鳴館、明治館、名古屋ホテル、料理屋では得月樓、河文、魚半などがある、名古屋は東西兩京の中央であつて中央線を控へ四日市を経ては海外への交通の衝となつて

居るし、産物も中々多い、見方に依つては中々一日半日で見られる筈もないが、此旅行は唯風雅の旅として熱田の神宮を参拜して名古屋を出發する事にする。

熱田神宮は伊勢の大廟に次ぐもの、日本武尊を祀つてある、正殿には草薙の劔が御神體として安置してあると云ふ事だ、熱田から船が出て桑名まで七里は東海道五十三次でも渡船で通つたもの、今では近くは四日市、津、二見、鳥羽へ行く、遠くは大阪へも船便がある、春の日の長閑な頃などなら茲から船で伊勢灣を二見まで往くのも好い。



熱田神宮

麗な船山車が出て日本で幾つと云ふ見物になつて居る、『伊勢は津で持つ』と云はれ

た津も今は四日市に押されて居る、新進の貿易港として一寸下車して一巡するも好からう、夫とも直に月ヶ瀬に向ひ途中は後廻はしにして、先づ上野で例の荒木又右衛門の三十六番斬の舊蹟を訪はねばならぬ、復讐のあつた鍵屋の辻は町から西へ廿町の處今は公園になつて居て櫻の名所だ、旅館曾我忠、八百新、西澤のいづれかでゆる／＼仕度をして月ヶ瀬に向ふか、有名な赤目の四十八瀑を見物するも好い、赤目は上野から南へ五里乗合馬車で名張町、其處から人力で二里山麓の延壽院に着く延壽院から奥は悉く瀧ばかり、其數凡四十八で中にも布引の瀧は高百八十尺壯觀無比と云はれて居る。

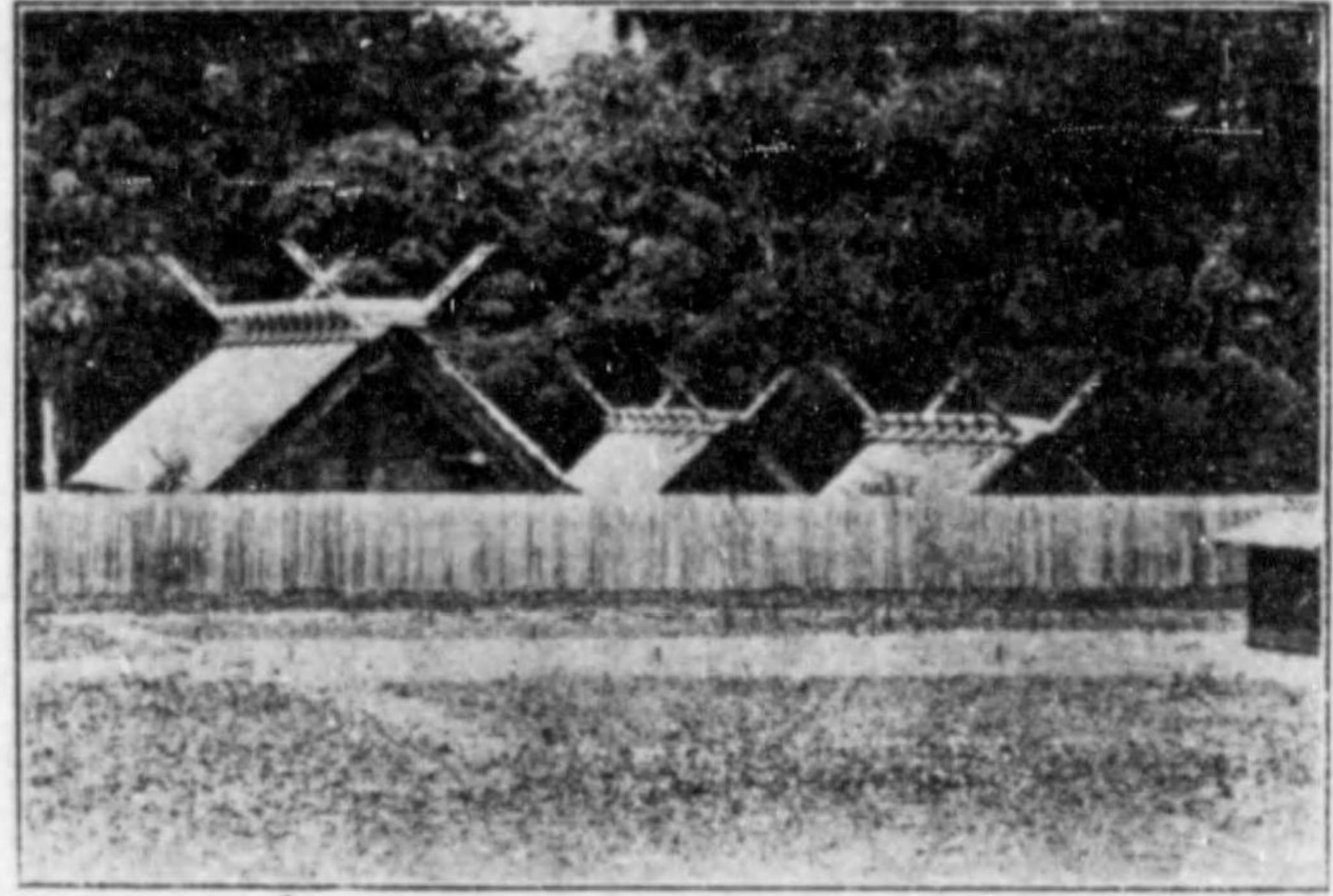
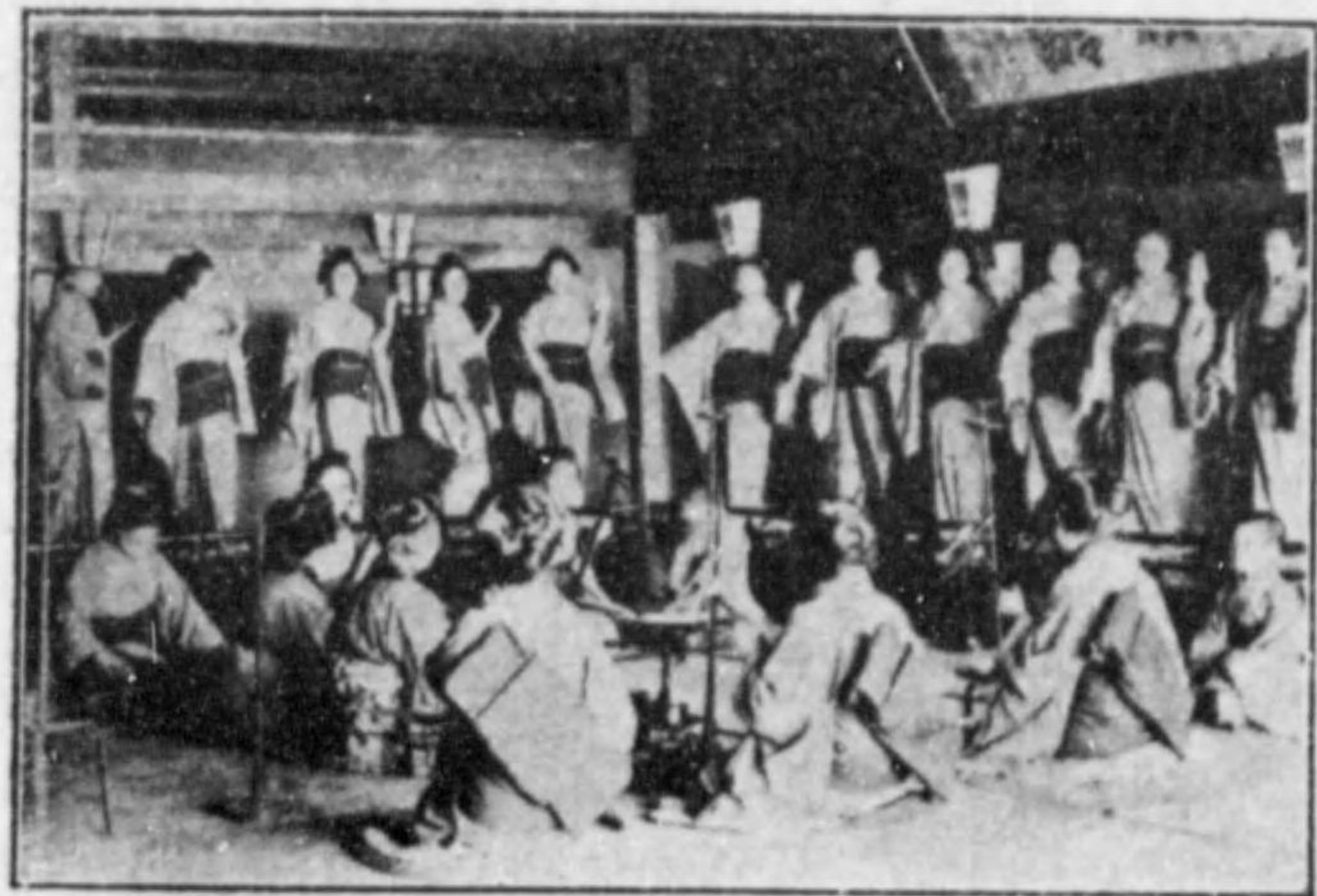
上野へ戻つて月ヶ瀬に向ふ、月ヶ瀬とは伊賀と大和の境十ヶ村約二里に渉る處を總稱して呼ぶ名で四十八瀧の末流名張川を挟んで兩岸とも山も谷も梅、最も廣い處を一目千本と云ふのである、月ヶ瀬村の騎鶴樓、吟香館、香雲亭、桃香野の百香館雲中庵などに泊つて月夜船を流れに泛べて清香に酔つたらば羅浮仙に逢ふ事もあらうと思はれる。

上野から又漁車に乗る、拓植(つ)は草津線の分岐點、時間を圖つて一寸下車し芭蕉翁の出生地を訪ふ事も出来る、停車場から僅に十町位、關驛は日本三關の一、鈴鹿の關のあつた處、昔は此處か、美濃の不破の關、越前の愛發(あ)の關のうちを通らなければ京都から東へは出られなかつたのださうな、有名な關の地蔵と云ふのは町外れにある、龜山驛から約一里で能褒野神社がある、日本武尊が東征を了つて茲に薨去し給へる處、陵の名は白鳥の陵と呼で居る、一身田驛の前に眞宗高田派の本山がある、慈覺大師一刀三禮の阿彌陀佛が本尊で講中信徒の參詣夥しいものである津驛は藤堂卅五万石の城下、其別莊が公園となつて居て、風景は絶佳伊勢の海の見晴し。花紅葉の眺めよろし、宿屋は大觀亭、聽潮館、若六、停車場から東へ十五町海岸へ出れば砂白く水清く海水浴場として千鳥館、魚庄あり、有名な遊廓贅崎は津の町にあるのだ、町の中央大門町にある觀音寺の觀音の石像は和銅二年阿漕ヶ浦で漁夫の網に入つたものと傳へられて居る。

松阪驛は松阪木綿の産地としても三井家の出身地としても一寸見物する可き處、

公園には紀州家の祖徳川頼宣を祀つた南龍神社、其下には本居宣長を祀つた本居神社がある、そして宣長の墓は町の西南山室山の頂巔にある、旅館は山川ホテル、回春樓、松阪から六ツ目で山田驛、停車場を出れば直に外宮である伊勢の大廟は内宮と外宮とに分れ内宮に天照皇太神、外宮に豊受大神を祀つてあつて、昔は内宮を宇治、外宮を山田、其間の相の山を堺としたものであつたが、今は宇治山田町となつて同じ處となつた、先づ宿を取つて翌日参拜をするもよし、直に参拜して後、伊勢音頭でも見るもよし、宿屋は福岡貢の十人斬で有名な油屋、麻吉、藤屋、十文字屋、松島館、神風館、宇仁館、吸震園等、伊勢音頭を見るには妓樓備前屋、松本屋などあり。

伊勢音頭



内宮

外宮へは停車場より五丁、一の華表、二の華表、三の華表を過ぎて正殿あり、社殿は茅葺白木、御柱の高一丈千木鯉木の姿も神々しきに神苑の老杉を吹く風身にしみて、何人も襟掻き合はさぬ者はないであらう、豊受大神は五穀の豊熟を守らせ給ふ神なりとて神苑の正面北側に農業館あり、農業各般の標本統計悉く集められ當業者は是非一見す可きものである。

外宮を参拜して旅館妓樓の並ぶ古市町を通りお杉お玉の相の山を過ぎ宇治町に入れば五十鈴川の清き流れに架したる宇治橋を堺に内宮あり、橋の下河原に竿に網を付けて錢を投げさせて拾ふ乞食あり數十人、投げろくと五月蠅き事限りなし

橋を渡れば神苑なり、右に折れて五十鈴川の清き流れを掬びて嗽ぐに清冽骨に徹す

老杉の間を白丁の苑丁が庭清めの姿も神さびたるを眺めつ、一の華表を越え、二の華表を過ぎると大麻授興所、五丈殿四丈殿あり、内宮正殿前の石段を上り敷石の上
に跪いて拜すれば殿前に垂れたる白布風なきに動いて、畏しこしとも畏し、内宮と
外宮とは用材建築全く同じけれど、唯屋上の千木の切尖、内宮のは内側に廣く、外
宮のは外側に廣きなりと云ふ。

兩宮を参拜して二見に廻はる途中右手に聳ゆる山は朝熊(あき)なり、海拔千五百尺
内宮よりは六十町、古市の町よりは一里にして朝熊村に達し更に廿二町、山上に豆
腐屋旅館、萬金丹本舗あり、絶頂には弘法大師作の虚空藏菩薩を安置する金剛經寺
あり、近くは伊勢の海、遠くは富士、東海十八ヶ國を見る絶景なりとて夏時は登山
する者多し。

二見は遠浅で海水浴に適す、電車の停る處を茶屋町と云ひ、宿屋清洛亭、太陽館
茶店貝細工屋軒を並べ、徴古館の假陳列所として古器物の展覧所あり、茶屋町を過
ぎて道窮る處海上大小二巖の並び立つを見る、右なるは小さく、左なるは大きく

して上に鳥居あり、兩巖の頂きは注連を以て結び付けあり、繪に見る程ではなけれ
ど玆で日の出を見れば如何様、金波銀波紅の色の
朱の色に海悉く變じて目も眩せんとする間に旭日
團々として波上に躍る壯觀比ひなし、泊りの都合
を繰合はして二見に朝日を拜する事旅中に考へ置
く可きである。

二見ヶ浦

鳥羽は二見より二里、昔から伊豆の下田と相持
つて遠州灘乗切りの船付場なれば、今でも良港と
して名あり、造船所商船學校あり、灣内島多く而
も水深く、日和山より眺むれば與志島、菅島、安
樂島等の間に大小の船舶往來し、遠くは東海
山まで見ゆると云ふ、鳥羽より五里にて的矢港あ
り、志摩半島の絶端深く海中に突出し紀州との境をなす處を大王崎と云ふ、巖礁の



七日の旅

形かたち掀きんぱん翻はんする波濤はたうの姿すがた百尺懸崖震萬雷、巨巖如撼雪濤推』の二句是これを悉つくす。

桑名より宮へ七里や天の川

子規

四日市いつか歸らん旅の春

宗因

關の地藏に振袖着せて奈良の大佛堂にとる

俚談

債鬼に攻められる苦しまされ伊勢參宮と洒落た男、お宮へ頼ついで頼りに祈念して居る處へ
おはらひは如何

欠

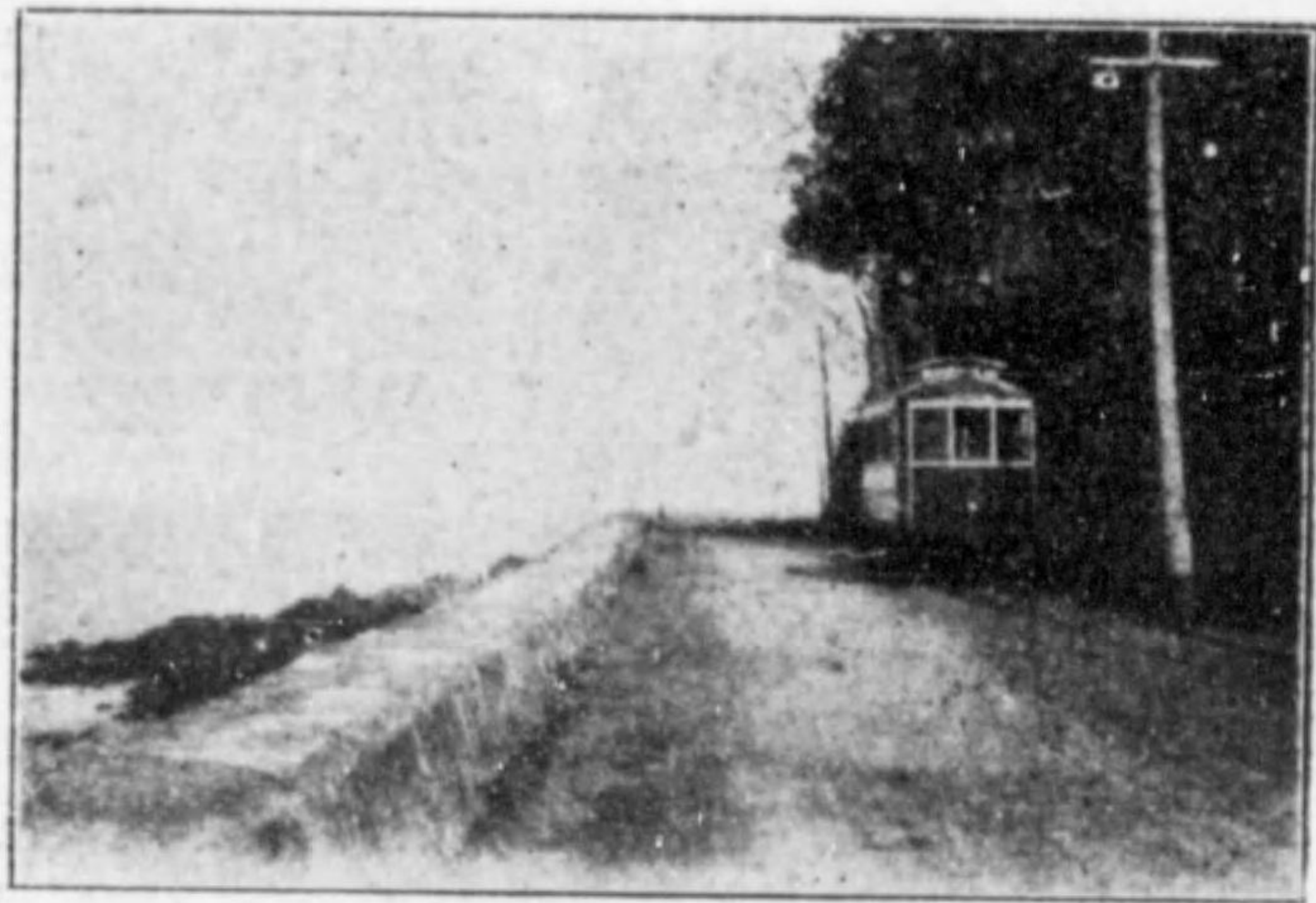
MISSING

茲から東一里で城山と稱へて土肥次郎實平の城趾がある、城山より又一里の山中に
卅三體觀音、温泉場より五十町上れば有名な日金山の展望がある。

伊豆山温泉は湯河原と熱海の間停留場から海岸へ下る事一町許で温泉宿に着く、
江島屋、相摸屋等あり、効能は婦人病、胃腸病、肺病、湯瀧もあり物價が熱海より
は廉いので長逗留には樂なり。

夏は涼しく冬は暖か、避暑にも避暑にもと云ふ熱海温泉は鐵道の終點なり、富士
屋、相摸屋、大光館、鈴木屋、阪口屋、露木、小松屋、尾張屋、古井等温泉宿軒を
並べ三方は山、南は海を隔て、初島を眺め、八町許の山手に公園あり梅の名所、茲
に落ち付いてから伊豆山、湯河原等を巡遊するもよし、下田街道を二里許にて網代
に出る、一漁村に過ぎざるも途中魚見崎の勝あり、半日の散歩には丁度よし。
熱海より下田を訪ひ、吉田松陰が米國軍艦に乗込まんとせし邊、我國最古の貿易
港たりし跡を見るもよし、伊豆七島の内、新島へは三時間、三宅島へは更に三時間
神津島、御藏島いづれも半日、但し風都合好いとしてなり。

熱海より伊東へは陸行すれば五里、伊東と云ふは松原、湯川、岡、鎌田、新井、久須美の六村を總稱したもので、松原に猪戸の湯



熱海々岸の電車

出来湯、和田の湯など聞えたるもの、宿屋は猪戸にて柳屋、山田屋、旭屋、出来湯にて前田屋、寶來屋、玖須美にて大阪屋、櫻屋、いづれも親切にして物價廉ければ湯治には都合好けれど出入りには頗る不便、韭山へも大仁へも五里の山道を徒歩するか、駕を備はねばならぬ。

二つにて相往來して居る、川の中で温泉の湧き出た處があつて浴槽を流の中に設け

て獨鈷の湯と呼で居る、宿泊料は廉し、靜で儂麻質斯、消化器病、婦人病、神經病

呼吸器病などに効がある、近來中々に繁昌する

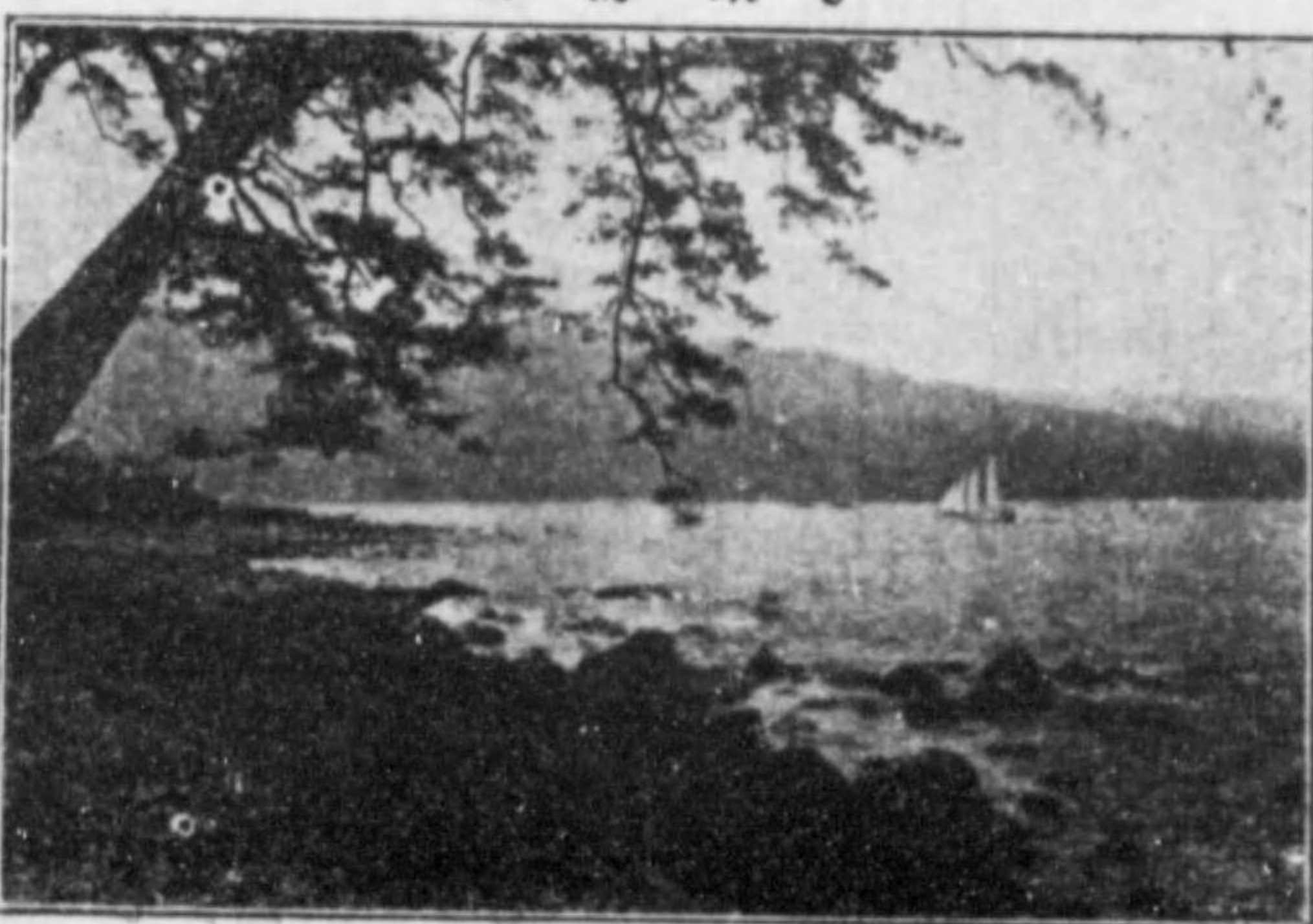
町を流れる桂川の北の岸に肖廬山修善寺がある、弘法大師の建てたもので初め福知山と云ふ名であ

つたのを支那人が廬山に肖て居ると云ひ出したので今の名に改め橋の名も虎溪橋と改め、門まで三

笑關と號したと云ふ事だ、寺に北條早雲の手箱、豊太閤の書などあり、頼家の墓は川の南岸、範頼

の墓は北岸にあり、修善寺から天城山まで四里は車を通じる、修善寺から不越阪を越えて縣道に出で大平に出ると高

さ三十丈旭の瀧がある、東に向つて旭の映する處が壯觀と云ふので此名がある、大平から松瀬、青羽根の二村を過ぎると右に船原の



伊東海岸

七日の旅

温泉(旅館は鈴木)あり、狩野川に沿つて更に南へ月ヶ瀬を過ぎれば門野原に嵯峨澤
の温泉(旅館湯本樓)夫より更に十町で湯ヶ島温泉に着く。
湯ヶ島は狩野川の上流、溪湖の間に宏壯なる建物の旅館落合樓がある、湯ヶ島よ
り北に戻り狩野川を渡ると西平温泉(旅舎湯本屋あり)、嵯峨澤から北へ數町で吉奈
の温泉、旅館東府屋、湯本屋、吉野屋等あり。
修善寺へ戻れば僅に十町許で大仁停車場、是でもう東京へ歸つた氣持になれる。

みやげもの

貝細工(江の島、鎌倉) 寄木細工、生椎茸、山葵、雁皮細工(熱海其他)

江の島や旦那あとかから沙干貝

其 角

驛馬進路行一路、野牛浮鼻入前嘴、遊遊眼器海山景、罷書人過花水橋

箱根路を我越え來れば伊豆の海沖の小島に浪のよる見ゆ 實 朝

土の牢へ道入つて何處から送けたらうと頻りにキヨロクして居る、連れの男
『誰がよ、と尋ねるとぬがらぬ顔、切られ與三がサ』何故『でも土の牢へも二度
三度つてぢやねえか。』

豆相の海岸

▲第七線▼ 本曾路の旅

- ◎ 第一日 飯田町―猿橋―甲府
 - ◎ 第二日 甲府―御嶽―甲府―上諏訪
 - ◎ 第三日 上諏訪―松本―鹽尻
 - ◎ 第四日 鹽尻―洗馬―奈良井―飯原
 - ◎ 第五日 飯原―宮の越―福島
 - ◎ 第六日 福島―寢覺の床―三留野
 - ◎ 第七日 三留野―名古屋―新橋
- ▲飯田町より猿橋、甲府 瀛車猿橋まで哩數五十哩三等賃金八十四錢時間三時間半、甲府までは哩數八十哩時間六時間三等賃金一圓廿二錢、始めより鹽尻もしくは松本までの切符を買ふ方も利益、鹽尻までは百四十三哩三等賃金壹圓九十二錢
- ▲甲府より御嶽 人力車にて一里和田峠、峠を上つて昇仙峽の奥まで約二里、徒歩して行く探勝する

- ▲甲府より上諏訪 瀛車にて約三時間、停車場を下りれば町はすぐ前なり、諏訪湖も五六町なり
- ▲松本と鹽尻 上諏訪より鹽尻まで瀛車一時間と八分、松本へは二時間
- ▲鹽尻より本曾街道 健脚家は徒歩が好い、併し途中驟々にて馬を求め疲れを防ぐ用意も必要であらう
- ▲三留野より新橋 哩數二百八十八哩、時間十二時間三等賃金三圓十九錢、朝八時三留野を出發すれば午後八時半新橋へ着

瀛車が飯田町を發してから第一に注意しなければならぬのは猿橋だ、急ぐ旅ならば車窓から一寸見物する事も出来るが、遠くではなし一瀛車遅らして往つて見る方が好い、驛の名はゑんきやう、橋の名はさるはし、桂川に架けてある長十七間巾三間一本の橋杭もなしに水際から百五十尺と云ふ處に架けてあるのは頗る奇觀と云ふ可し、大月驛は富士吉田口の玄關、茲を過ぎて車窓より右に桂川を隔て、見える絶壁數十丈の山は岩殿山、武田の臣小山田備中が織田家に降つて勝頼の逃場をなくし

た處だと云ふ、此邊より笹子隧道の前後先年の水害の跡今に歴々として居る、笹子

隧道の長さは六萬三千二百呎



武田信玄の墓

つて早く寝るが好し、宿屋は佐渡幸、談露館、水晶細工の店多し。甲府に入つては翌日の用意、湯に入

但し鹽山驛の惠林寺にも信玄の墓あり、いづれをいづれとも知れず。

甲府を拂曉に立ち和田峠にて南の方松林を隔て、富士の背面を眺め一里にして天神平に出づ、是より一里半昇仙峽の奇勝、一幅の畫卷を繰廣げつ、眺むるに異ならず、一步は一步にして水異り山變じ碧潭急湍となり山は右に向き又左に轉ず、兀として高き覺圓峰見えつ隠れつ、カクレンボウの字を此三字に當てたるものと案内者は云ふ、山は紅葉よし松よし、川には猿岩、富士岩、蟾石の奇を見、路傍新道を拓ける孫右衛門の像を見、石門を過ぐれば雪虹の瀧、昇仙橋を渡つて對岸に赴けば高十丈仙娥の瀧あり、瀧を過ぎて猪狩村を半里御嶽の金櫻神社あり、金櫻神社より金風山を上る五里絶頂に又金櫻神社の本宮あれども、好い加減に引返した方が好い。身延山へ參詣するにも途は甲府からを便利とする、緞澤まで四里二十一町、乗合馬車、夫より富士川下りの船にて川の西岸身延村波木井に上陸し阪路を一里半にて身延山久遠寺へ着く、門を入り松並木約二町太平橋を渡ると茶店、飲食店軒を並べ宿屋も澤山あり、又二百八十二の石段を上ると正面祖師堂、眞骨堂、位牌堂、傍に

納骨堂、奥殿、庫裡あり、石殿の下を左に曲れば日蓮上人の廟所八角堂あり、毎年
舊十月十二、十三日を會式とし信徒の集まるもの何萬と云ふ數を知らぬと云ふ、是
より更に五十間登ると芬陀利峰の奥の院、絲の如き富士川を眼下に東海の諸國を眺
めて快絶、七面山へは茲より大蓮阪を下り樋澤川より西ヶ谷、更に田代川の岸を二
里半、久遠寺の奥の院がある爲め身延詣の人の參詣多し、山は高さ海拔千五百尺、
一の華表より五十町の絶頂には七面大明神、池大神あり途中龍ヶ鼻、三十二瀧、雨
乞の瀧、白絲の瀧、鏡ヶ池あり。

緞澤より舟にて富士川を下るのは節堂の紀行を見た人が一度はやつて見ねばなら
ぬ事、十八里を僅に八時間で岩淵驛まで行かれる、流れは急である、加之奇巖怪
石の磊々として水を激し舟を妨げる、其間を唯竿一本右に避け左に躲し、身延山の
麓にて屏風岩の奇勝、大河内村に近くは藪ヶ瀧を過ぎ右折左折九里南部に至る迄の
間は石を乗り越え巖に削られ水沫は袖を濡し危険胸を冷す事屢々、南部よりは水勢
稍緩なれば苦もなく岩淵まで行かれるのである。

スケートで評判の高い諏訪湖は上諏訪、下諏訪の兩驛から近い、上諏訪では牡丹
屋、野々平、鐵鑛泉、中岐草屋、下諏訪では龜屋
などいづれも内湯にて鹽類泉の温泉で皮膚病に効
がある、寒い處だけに宿屋の各部屋には大きい巨
燧の用意があつてあたりながら一杯やり飯を喰ひ
藝妓を上げる、頗る洒落た處だ、湖水は一名鵝湖
東西一里十四町南北三十三町、諏訪の城は上諏訪
の町續き今は高島公園と云ふ、夏は船遊び、冬は
スケートと而して温泉、本朝廿四孝に八重垣姫が
諏訪法性の兜を以て渡つたのは是、而して渡邊國
武千秋兄弟の出身地も此上諏訪であるさうな。

氷上スケート



上諏訪から木曾街道へは鹽尻まで流車で往つて
西へ向ふ、時間の都合で東へ篠の井線に乗つて二三ヶ所の見物も出來やう、松本は

此邊での大都會、宿屋は菊屋、丸茂、秀峰館、料理屋は花月、早崎、三ツ井、松本館、藝妓も約百五十人からあると云ふ、筑摩神社は譽田別命外四神を祀り毎年八月十、十一の兩日近郷近在から非常な人出、此邊第一の大祭である、町から東北へ卅四町淺間の温泉がある、リユーマチス、肋膜炎、中風などに利く、温泉場は上淺間下淺間に分れ、目の湯、鷹の湯、千代の湯などが料理屋を兼ねた宿屋を營むで居る姨捨驛まで行くと月の名所姨捨山を訪ふ事が出来る、山は長樂寺の境内、寺内に姨捨石、本堂、庫裡、満月殿、月見堂、見渡せば下には千曲川の清流を隔て、鏡臺山、月が鏡の様に出ると云ふので付けた名であらう、寺の前は水田多く是へ一つ一つ月が映るので田毎の月の名がある、一説には姨捨驛から廿町の冠着山が姨捨だとも云ふ、麓より六十町冠着神社の邊月を觀るに或は姨捨よりも好いのかも知れぬ。鹽尻から中津まで廿二里を古來木曾街道と云ふので、此間を三日間に歩かなければ日程に狂ひが出る、鹽尻を出て一里廿二町で洗馬、洗馬から贊川を経て奈良井まで五里、(此間は近く汽車が開通したから時間の儉約が出来る)奈良井から鳥居峠に

かゝる、峠は木曾街道の分水嶺北に流れるのは奈良井川即ち信濃川で、南へ流れるのは木曾川、絶頂は木曾の御嶽と向ひ合つて遙拜所がある、茲迄奈良井から舊道二十町、茲より數原迄急阪廿五町。數原より二里で宮の越、驛の東に山口城址あり義仲の本城であつた處、義仲の元服した柏原八幡は木曾川を隔て、對岸の徳恩寺内にある、徳恩寺には義仲と樋口兼光、今井兼平の像、義仲の位牌、巴御前の墓がある、宮の越より二里で福島、此邊一帶お六櫛と蕎麥を賣る。福島は木曾山中第一の都會、木曾川を挟み兩岸に千餘戸、木曾街道關所の趾あり町の興禪寺に木曾義仲の墓あり。木曾の御嶽へ上るには福島より北に御料の檜林を潜る事三里、王瀧峠を越え御登り口の麓に達す、王瀧には旅舎あり登山者の爲め凡ての用意案内等までを調べて呉れる可し、登山者は強力を備ひ草鞋の餘分と握飯二日分とを携へ夜の明けぬ間に出發裾野を過ぎて一合より十合目を絶頂、途中茶店、甘酒屋、百草練藥屋などあり、

三里にして四合目八海大権現、富士なら寶永山とも云ふ可き三笠山の頂きに三笠神社、六合目田原に小屋あり是より途急、梅、黒檜、白檜、五葉松等あるも氣候寒きと風の爲めに延びず地上に蛇くりて姿面白きもの多し、頂きに近くに從ひ樹は五葉松のみ岩に匍ひ地に横はり遠く見れば芝生の如し、十合目には樹も草もなく焼石ばかり御嶽の本社あり劔ヶ峰にも小祠あり、玆迄の高さ一萬五百尺、富士より唯二百尺低いだけである、頂上には小屋あり登山者玆に宿して御來光と稱へ日の出を拜むけれども空氣稀薄、夏尙寒く焚火せんにも十分に燃えず飯を炊ぐ事も出来ず、水なければ雪を溶かして飲む程である、劔ヶ峰の背後に一の池より五の池まで噴火口の跡あり周圍に黒百合美しく咲く、下山の道は飛驒の高山に通ずるものと福島に通ずる王瀧口、黒澤口あり、王瀧口より下りるのが矢張順路である。

『かけはしや命をからむ鳥かつら』の木曾の棧道は福島から西へ一里駒ヶ根村字沓掛、懸崖の高く簷え道を通ずるに由なき處に慶安元年尾州侯の命にて兩端に石を積むで橋脚を作り長五十六間巾三間四尺の橋を渡したるに今は新道開け此棧道を渡る

には及ばず、唯木曾の流兩岸近く相迫りて水は紺碧に澄み樹石の凡ならざる木曾第一の絶勝とす可きものである。

かけはしより西へ一里同村上ヶ松に寢覺の床あり、自然の巨匠巖を刻み石を切り屏風岩、烏帽子岩、獅子岩、硯岩、腰掛岩、組板岩、浦島太郎釣舟岩を作り、清冽玉を削りて流せる木曾の溪流の間に置けるもの、最大なる巖には松樹の間に祠ありて浦島太郎を祀る、絶大なる箱庭なり低徊數時、人間の小ささを自覺する事があらう、國道寢覺の茶屋から一町ばかり崖の上に臨川寺と云ふがある、夫へ上がつて一望すれば寢覺は一幅の畫となる。

寢覺より西須原、野尻、三留野、妻籠を過ぎ美濃の落合に至る迄兩岸の風光端倪す可からず、奇正縦横木曾路を出て中津町に出る事となる、時間の都合にて三留野に此勝地と分れ名古屋を経て新橋に向ふ、名古屋に一泊、疲を休めても好い。

七日の旅

夜もなほ木曾路の橋の危さを知りてや月の澄みわたるらん (新古今)

木曾の名物お六の櫛はきりし前髪の止めに差す (俚談)

「木曾へ往つたさうだれ、大層遅かった
『へい、道中中々面白いので歸りが段々延びちまいました』
『へい、是はお土産の壽夢で御座います』

▲第八線▼ 宮島と瀬戸内海

- ◎ 第一日 新橋△△神戶△△須磨△△明石△△
- ◎ 第二日 明石△△宮島△△
- ◎ 第三日 宮島△△廣崎△△宇品△△高濱△△松山△△道後△△
- ◎ 第四日 道後△△松山△△高濱△△多度津△△琴平△△
- ◎ 第五日 琴平△△丸龜△△高松△△
- ◎ 第六日 高松△△神戶△△
- ◎ 第七日 神戶△△新橋△△

▲新橋より宮島 切符は直通にて宮島迄を買ふ可し、宮島迄五百七十八哩三等賃金五圓廿三錢、朝の瀧車にては神戶見物出來ず、神戶須磨明石などを見るには繰上げて前夜九時の瀧車が好い、夫から正午に神戶へ着き、一通り見物して須磨へ行き明石で泊る、神戶から明石まで瀧車は僅に四十八分、翌早朝に明石を出て、神戶まで戻つて七時廿五分の瀧車で宮島へ直行すると宮島へ午後三時四十二分に着く

▲宮島より宮島 停車場の宮島から一町計で海岸へ出て、棧橋から往復の小
 蒸船へ乗って嚴島神社のある宮島へ着く、瀧船賃は片道八錢
 ▲宮島から宇品 へは直接に瀧船が出るが、矢張宮島停車場から廣島へ行き廣
 島を見物して宇品へ行くが好い、宮島から廣島は十三哩、時間三十分、三等賃金二
 十一錢、廣島から宇品へは瀧車十六哩、時間一時間、三等賃金二十七錢
 ▲宇品から高濱 宇品から朝八時半、午後一時、六時半と三度瀧船が出る、高濱
 へ着くのは丁度四時間、三等六十錢二等一圓壹等一圓四十錢
 ▲高濱から道後 高濱から松山まで瀧車僅に六哩、時間廿分、三等で十錢、松山
 の一町町停車場から更に道後まで瀧車で一哩、賃銀三錢
 ▲高濱から多度津 は大阪商船會社の大阪宿毛線、高濱を朝九時發の瀧
 船で今治を経て多度津へ午後四時に着く、船賃三等一圓川五錢二等二圓廿五錢一等
 三圓十錢
 ▲多度津より琴平 瀧車八哩時間十二分三等賃金十三錢
 ▲琴平より高松 は同じ鐵道にて多度津を通つて丸龜は行き高松が終點になつ

て居る、丸龜まで十哩、三等賃金十八錢、高松まで二十七哩、賃金四十五錢、時
 間は二時間
 ▲高松より神戸 高松を午後七時半發の瀧船にて神戸へ着は翌朝午前二時船賃
 三等一圓十五錢二等二圓五錢、一等二圓六十五錢
 ▲神戸より新橋 最急行にて十一時間五十分、普通車にて十四時間半、三等賃
 金三圓八十一錢

先を急ぐ旅であるから神戸では長く留るを許さない、けれども見る丈は見、行く
 丈は行かねばなるまい、三ノ宮停車場で下車し北へ四五丁生田神社あり、神功皇后
 の創建にて雅日女命を祀つたものである、社の背後は梶原景季が梅花を簾として戦
 つた生田の森、源太の簾の梅は今境内にある、外に梶原の井戸、敦盛萩、夫より東
 北に布引山麓へ出て布引瀧泉あり、温泉宿は常盤館、富貴樓、菊水、茲を過ぎて流
 に沿ふて進む忽ちに轟々の音高七十尺巾十尺布引の雌瀑の前に出る、夫より三町で
 百尺の懸崖より白布を曝すが如き布引の瀧、お茶一杯で引揚げて北野町より西して

諏訪山に至る、神戸第一の遊び場、料理屋あり温泉場あり攝津の海を見晴らしてゆるく居たき心地もするであらう、是も犬の川端として市街へ出て相生橋を渡り湊川神社に賽す可し、烈公の建てたる『嗚呼忠臣楠子之墓』の碑は表門を入ると直きに右手にあり、大須観音同様に雑踏を極めて居るのは心苦しい、神社より北に四丁楠公の一族七十三人が自盡した廣嚴寺、俗に楠寺と云ふ、寺より南は一帶に遊廓福原の外側は楠公戦死の湊川で、今は遊園地として全く俗了されて居る、湊川を渡ると兵庫、來迎寺と云ふのに松王人柱の碑が立つて居る、是は清盛が築島一名經ヶ島を埋め立てた時に人柱となつた記念である、來迎寺一名築島寺の西南の眞光寺に清盛の塔、高さ二十六尺の石塔婆、經政の琵琶塚あり、此寺より眞直に行けば和田の岬、舊砲臺、燈臺、水族館の外に本間孫四郎遠矢の遺跡がある、平野水の出来る奥平野村は湊川の川上で神戸から遠くはない、宿屋は西村、後藤、中居、蓬萊館、諏訪山の西常盤、中常盤、東常盤、常盤花壇、音羽花壇等。

須磨は神戸より四哩瀛車にて約廿分にて達す、總て是源平合戦の舊地、安徳帝の

行在所たりし内裏跡は停車場より西へ十四町、内裏より東へ三の谷、二の谷、一の谷、一の谷の背後には鶴越の鐵拐山、三の谷より西へ一町にて國道の右側に高さ一丈一尺苔蒸したる五輪の塔は敦盛塔、戻つて松風村雨の墓、須磨寺に敦盛が青葉の笛をも一見す可し、旅館は海月館、松の家、敦盛樓。

敦盛塔より五町で、『しほやの沙やく烟り』と沙汲にある鹽屋驛、垂水の次は舞子驛、此邊徒歩で白沙青松の間を悠々とやるも好し人力でもよし、氣の短い人は瀛車の窓からでも濟めば濟ませる、舞子公園は龜屋、萬龜樓、海老屋、松菊樓にて一葦帶水淡路島を眺めて詩囊と腹とを肥すもよし、明石の舊城は今公園になつて居る、人丸神社は公園より東へ八町の丘の上、播州へ入つては土山驛で下車して手枕の松(別府村より西南に一里十町)尾上の松(加古川の南三十町)相生の松(加古川の南一里高砂神社境内)曾根の松と松盡しを生で行くも洒落たもの。

姫路で下車して北へ一里卅町、辨慶が鬼若丸時代に荒した書寫山圓教寺あり、辨慶の學問所、和泉式部の塔など變つた處が見られる、龍野で降りて南へ三里往くと

室の津がある、昔は有名な遊廓のあつた處、那波驛から南へ三里で赤穂の城趾、赤穂町の華岳寺は淺野家の菩提所、四十七士の遺物を珍藏し、舊城内に大石良雄の邸跡、遺愛の櫻は尙時々の春を忘れぬと云ふ、上郡驛から三石まで隧道を沿る、其上は兒島高德が東駕を奪ふとした船阪山、岡山驛には一寸でも降りて日本三公園の一(他は金澤の兼六公園、水戸の第一公園)後樂園と(停車場より十二町)東山公園の借樂園(同じく卅町)を見物した方が好い、宿屋には三好野花壇、錦園、自由館、三好野などがあつた、岡山からは北へ津山へ行く鐵道もあり、岡山の三幡港から高松行の汽船も出る。

ぐつと飛で宮島停車場へ降りると最早嚴島の姿が見える、海岸から小蒸濱で渡される上陸した様子、貝細工やら宮島杓子の類を商人家の續いて居る様子、江の島の大きい様な處がある、島の大きさは東西二里六町南北一里、七浦廻りと云つてぐるりと廻はると七里餘、是は船を備つて悠然と見物が出来る。

旅館は島中第一の奇勝紅葉谷の岩惣、塔の内の松岡、大元公園の白雲洞などあり

宿を取つてから見物に出懸ける可し、嚴島神社は町の中央、市杵島姫、田心姫、湍津姫の三神を祭り本殿、拜殿、祓殿、舞臺、平舞臺とも淺瀬に建てられ満潮の時は全社悉く水に浮べる形あり、有名なる大鳥居は海上八十八間の處にありて満潮の時帆を上げた儘に船が參拜に通れると云ふ、廻廊百四十八間の楯間に掲げし名書畫を見て西へ渡り盡せば御手洗川、橋を渡り松原の百八の石燈籠、重盛手植の松を見て、大元公園に至れば櫻樹多く岸打つ浪は清く風景閑雅なり、御手洗川の筋違橋には寶藏あり、夫より南へ紅葉谷より東へ大宮の岡に豊公が寄附の千疊敷、五重塔を見て略見物終る、嚴島は毛利元就の陶晴賢を撃ちし古戰場、昔を尋ねれば清盛の龍頭鷲首に擬したる船で豪華を極めて參拜し途中鱸の船中に飛び入りしを喜んだ處近くは伊藤公が豪遊を極めし處、島中美姫あり宜しく英雄を學ぶ可しか。

宮島から廣島へ戻り今第五師團の兵營、日清戰爭には大本營とし又行在所の跡ある舊城を見物し、淺野侯の孤景園を見、宇品まで鐵道で行き高濱通ひの汽船に乘込むか又海田市まで戻つて吳の軍港見物も有益であらう。

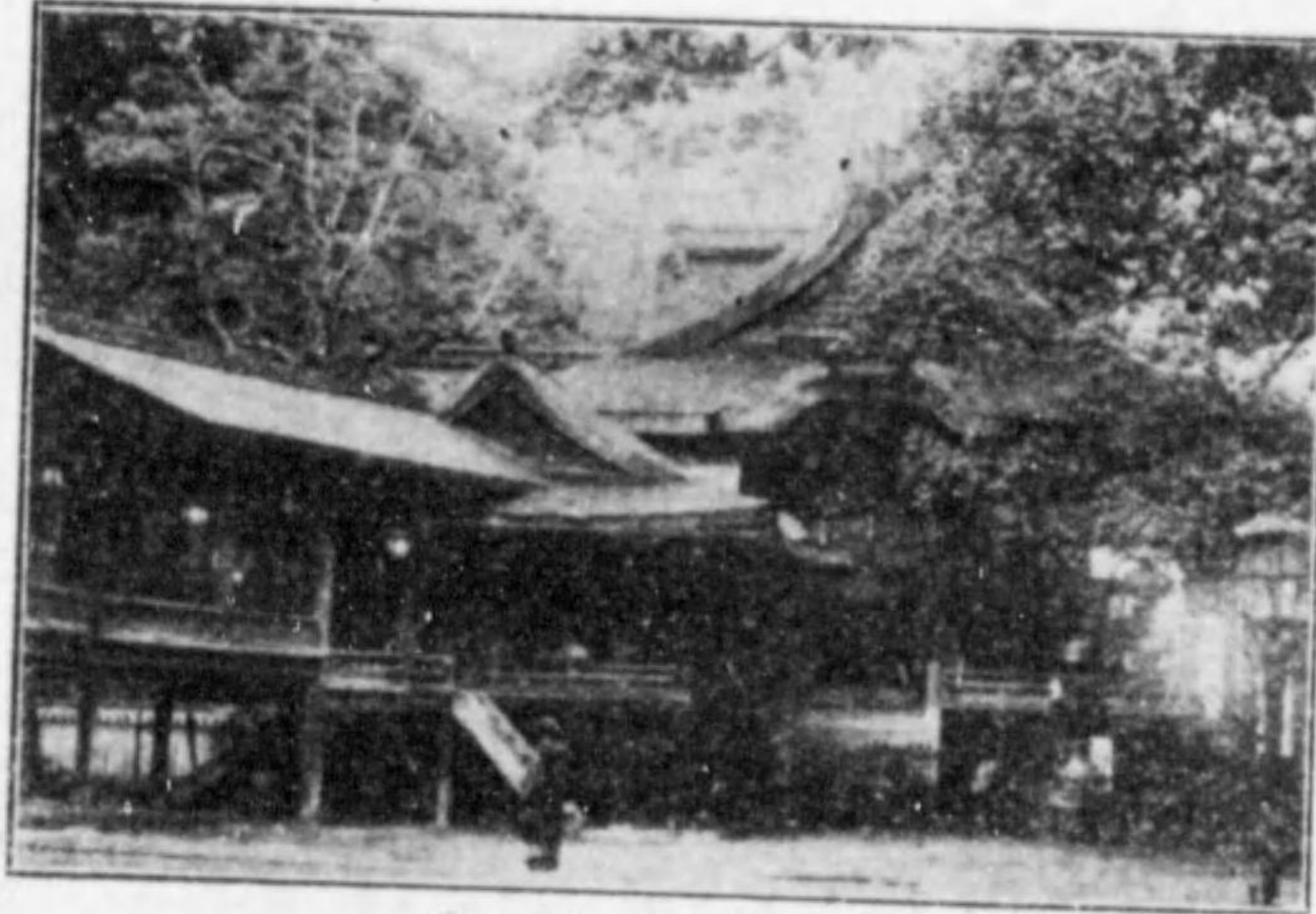
高濱までの汽船は瀬戸内海を横断するので無数の島の間、船の間を行く事、世界的の絶景と云はれて居る處だけに外で見られぬ面白さがある、高濱へ着く前に本名は興居島(じま)形が似て居るので伊豫富士の名のある島を見やう、高濱へ着いてからは海岸から僅で四國の札所五十二番の太山寺へ参詣もよし、海岸には延齡館と云ふ海水浴旅館もある、流車で三津ヶ濱までは僅に煙草一服の間、小富士亭、菊川樓などへ上つて魚の鮮らしい處を賞翫するも好からう、序に三津の朝市と云つて海岸で魚の取引をする一寸變つた風俗を見る事が出来やう。

松山は縣廳の行在地で伊豫では第一の都會、俳人子規を出した處であるだけ、今でも俳句は中々盛ださうだ、宿屋は城戸家、勝山館、日野辨、白石など、此處へ泊つて道後の温泉へ行くもよし、又道後へ往つて泊るもよし僅に一哩ばかりの所だから臨機應變と御勧めして置く、道後の温泉は由来頗る古いもの、山邊の赤人の歌があり景行天皇などの行幸された事もある、温泉場は幾つもあるが一番上等の一の湯と云ふのは花崗石作りで三階建て結構日本一と云つても好からう、其代り入れこみ

の處は湯錢一人前僅に一錢の處もあるが一の湯の三階と來ると慥か一人前廿五錢、是亦日本第一と云つても好い、泉質は無臭無味のアルカリ性で暖まる事非常、生殖器病、婦人病は勿論、疝氣、リユーマチスなどに好く利く、浴場の周圍には旅館と貨席が澤山にある、藝妓は二枚鑑札で慥か此邊も美人系だと云ふ評判だ、近傍の名所を探らうとすれば聖徳太子が入浴された紀念の湯の岡、石手には聖武天皇御建立の石手寺、石手川の上流には湧ヶ淵の奇勝、湯山村には新田義宗、脇屋義治を祀つた新田神社、流車で木屋町まで行けば舊曆一月十六日に必ず咲くと云ふ龍柳寺の十六日櫻、御幸村字姫原には輕太子と輕皇女を祀つた輕神社などがある。

松山から流車で久米驛まで行くと四十九番の札所西林寺、横河原驛から一里で高さ四十八間幅十八間と云ふ白猪の瀧、十町離れて高さ五十二間幅十二間の唐崎の瀧がある、久米驛から西へ半道ばかりで南朝の土居、得能が長門探題を撃つた大星ヶ岡の古戰場、星ヶ岡から二町で、伊弉諾、伊弉册の大神が日の神を産み給ひし跡と傳へられる天山と云ふのがある、森松驛まで行けば故團洲が演じた大森彦七の鬼女

を負ぶつた處魔住の窪と云ふのも見られる。



宮羅比刀金

元琴平の町、虎屋、備前屋、櫻屋、

再び高濱から汽船に乗つて多度津へ上がる、多度津へは尾の道からも連絡船が往復して居るから來往のいづれかを是に依るも好からう、多度津から琴平へ行く途中金藏寺驛には智證大師の誕生地として有名な七十六番金倉寺と云ふがある、善通寺は弘法大師の生れた處として人に知られた處であつたが、先年第十一師團を置かれてから非常な発達、弘法大師の誕生の地と云ふ五岳山誕生院は四國第一の巨刹として境内も廣し結構壯麗を極めて居る、札所としては七十五番である。汽車の終點琴平驛で下車すると、琴平様の御膝芳橋など素晴しく大きい宿屋が澤山にある、町

を突當れば琴平山、其中腹の金刀比羅宮は正殿には大物主命、相殿には崇徳天皇、社殿の内外の立派な事は筆には盡せない、以前は象頭山金毘羅大権現であつたのが神佛混合を禁せられて、今では國幣中社となつて毎年十月九日、十日、十一日大祭の日としてある、竹取物語繪巻、辨財天像、十五童子像、應舉筆山水卅三枚など六點の國寶を藏して居る、琴平町の南には琴平公園、東南へ一里で金藏寺川の水源で風景の好い満濃の池と云ふのがある。

多度津から船で三時間、三崎を廻はつて観音寺町へ行けば町の外れ一町に琴彈山(ざんたん)あり、琴彈八幡あり頂上の風景は下に燈灘を眺めて絶佳、左に下山すれば琴彈公園のある有明の濱、山の麓には弘法大師開基の観音寺がある、観音寺町から託間灣に沿ふて五里で仁尾の平石と云ふ名所がある、多度津からは山越で僅に四里、仁尾村の海上廿町の處に平たい大岩のあるのが夫で上には人數二三百人まで載せる事が出来、鯛網の面白い遊びがあるばかりか景色はよし魚はうましとの事で遊覧の客は頗る多いと云ふ。

宮島と瀬戸内海

丸龜には田宮坊太郎の墓がある、南條町の元要寺と云ふ寺に、茲も金毘羅參詣者を集める處で宿屋は玉川樓、中村樓、八島屋など中々に多い、丸龜を東に一里で阪出町の東、綾川と云ふのは崇徳天皇の『瀬を早み岩にせかる、瀧川のわれても末にあはんとぞ思ふ』の歌を詠ませられた處、景色は非常に好い、更に廿五町宇多津町の南の飯野山は高さ二千四百尺、讃岐富士と云ふ、阪出町から東北に當つて聳えて居るは白峰、絶頂千兒ヶ嶽(けさかた)に崇徳天皇の陵がある、白峰は一に綾の松山と云つて山中には八十一番白峰寺がある、陵を拜し札所を廻るには鴨川驛まで瀧車、茲から西へ廿五町。

高松には高松ホテル、平山、琴富貴樓、角田、中西などの宿屋がある。



(102)

第一に黒田如水の作つた舊城、玉藻の浦に面して城樓の松青きところ、東には屋島の煙るが如き西には槌島、北には男木島、女木島の青螺の如きを眺めて景色は實に好い。

有名な栗林公園は高松の南端栗林村にあつて廣さは十六萬坪、西湖、南湖、北湖等六つの池沼、飛來峰、巾子峰、櫻山、渚山等十三の山坡、是を點綴するに數奇を凝したる木石を以てして殆ど仙境の思ひがあると傳へてある、藩祖松平頼重が遊覽所として拵へたのを四代かゝつて修理したもので幾許の費用が投せられてあるか殆ど分らない位だと云ふ。

源平の古戰場たる屋島は高松からは東へ一里半、屋島の東の山麓が檀の浦、山の北に延びた長崎と云ふのに安徳天皇の行宮があつたと云ふ、屋島山の頂上には八十四番八島寺あり、茲に源平の軍旗、合戦の繪巻物等を秘藏して居る、山を東へ下つて志度街道に出ると、佐藤繼信の墓、義經の愛馬太夫黒の墓などがある。

高松から東へ三里で志度町へ着き義太夫で誰も御存知の志度寺(八十六番の札所)

平賀源内の宅などを見物し、松原村白鳥に伊勢の能褒野で日本武尊が白鳥に化され
飛で茲まで来られた跡と云ふ白鳥神社、丹生村の脇屋義助の墓などは高松から船都
合で樂に見物が出来、序に小豆島の寒霞溪を見やうとなら、吉の浦行の小湊船に
搭し吉の浦で下船し小豆島に入り、橋を渡ると淵崎村で、讃岐の五剣山、屋島山な
どを海を隔て、眺め、淵崎から東北へ三里で銚子の瀑、寒霞溪の神斧の微妙なる絶
景は草壁村と云へば直に分る。

高松から船で神戸に向ふと淡路島の沿岸、播州の海岸、誠に繪の様な好風景の間
ではあるが時間に依つては夜になつて、漁火點々遙に彼方を淡路島と知りつゝ、通
ふ千鳥の聲に寢覺めぬ須磨の關守を學ぶ事になるかも知れない。

みやげもの

吉備團子、米のなる木(岡山) 舞子焼、人丸山の櫻花漬(舞子明石) 杓子、楊子
(宮島) 理平焼(栗林公園) 赤蕪、砥部焼(道後)

ほのくくと明石の浦の朝霧に島くれゆく船をしぞおもふ

(人丸)

讃岐にはこれをや富士と飯野山朝けの烟たゝぬ日もなし

金毘羅詣りの道者無事に神戸へ上り

『あつ仕舞つた、金毘羅様の御札を貰はずに來た』

『好いちやないか』

『あれがなくては船が危い』

▲第九線▼

越路の旅

- ◎ 第一日 上野△△長野△△
 - ◎ 第二日 長野△△直江津△△鯨波△△
 - ◎ 第三日 鯨波△△出雲崎△△寺泊△△彌彦山△△
 - ◎ 第四日 彌彦△△三條△△新潟△△
 - ◎ 第五日 新潟△△夷△△相川△△
 - ◎ 第六日 夷△△新潟△△
 - ◎ 第七日 新潟△△長岡△△上野△△
- ▲上野より長野 △△ 午前六時十分上野發の瀧車なら長野へ午後二時には着く、哩數は七十一哩、三等賃金壹圓拾壹錢、長野驛から善光寺までは十五六町、人力車代も廿錢内外にて行ける
- ▲長野より鯨波 △△ 長野を出て高田へ寄るもよし直江津へ寄るもよし、鯨波への切符を買ふ可し、長野より鯨波まで六十六哩、長野より直江津までは四十五哩、時間

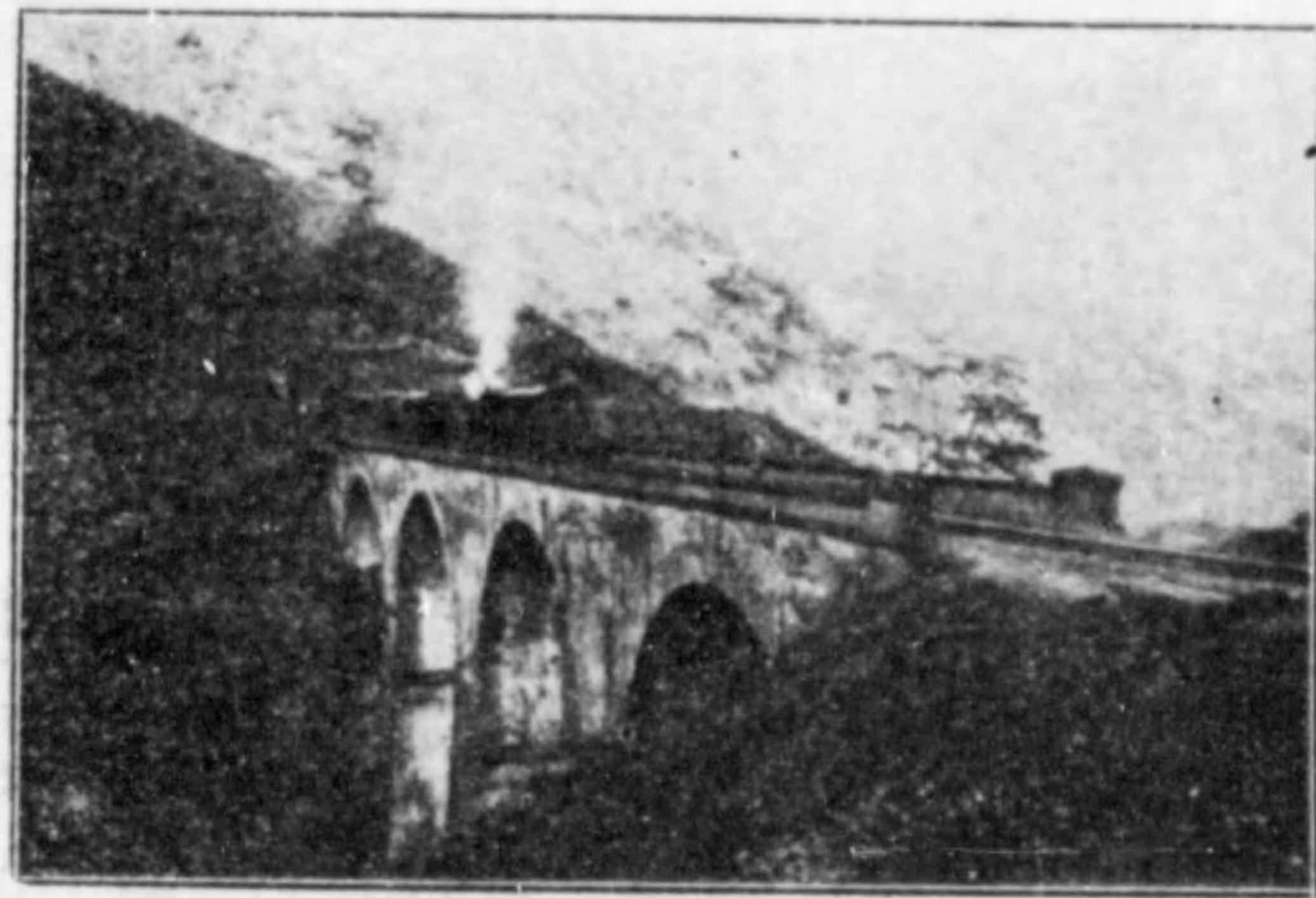
- は鯨波まで三時間と五十分、直江津までは三時間、賃金は三等で直江津まで七十六錢、鯨波まで壹圓四錢
- ▲鯨波より彌彦 △△ は國道に入り出雲崎、寺泊を過ぎ約八里、道は平坦であるから人力でつきくゆつくり夕方までに着く事が出来る
- ▲彌彦より新潟 △△ 是又人力にて四里ばかりで三條、三條より瀧車、新潟まで二十七哩、時間一時間と四十分、賃金三等にて四十五錢
- ▲新潟より夷 △△ 海上三十二海哩、瀧船にて平時三四時間にて着く、夷より相川迄は人力車にて六里
- ▲新潟より上野 △△ 直行車にて哩數二百三哩時間十五時間、賃金三等にて三圓一錢

越路の旅

碓氷の隧道を過ぎれば輕井澤である、箱根を瀧車で越すと同じ趣きで更に雄大、紅葉の時には是非一度、瀧車で通るだけでも好いから御出なさいと何人にもお勧めする、輕井澤は夏も寒い『拾やりたや足袋添へて』と云つた處で避暑には持つて來

い、秋は紅葉だ、満山の錦繡溪谷の清泉と相映じて唯もう奇麗なパノラマの中の人

となるのである、三笠ホテル、龜屋、萬松軒等の旅館がある。



碓氷峠

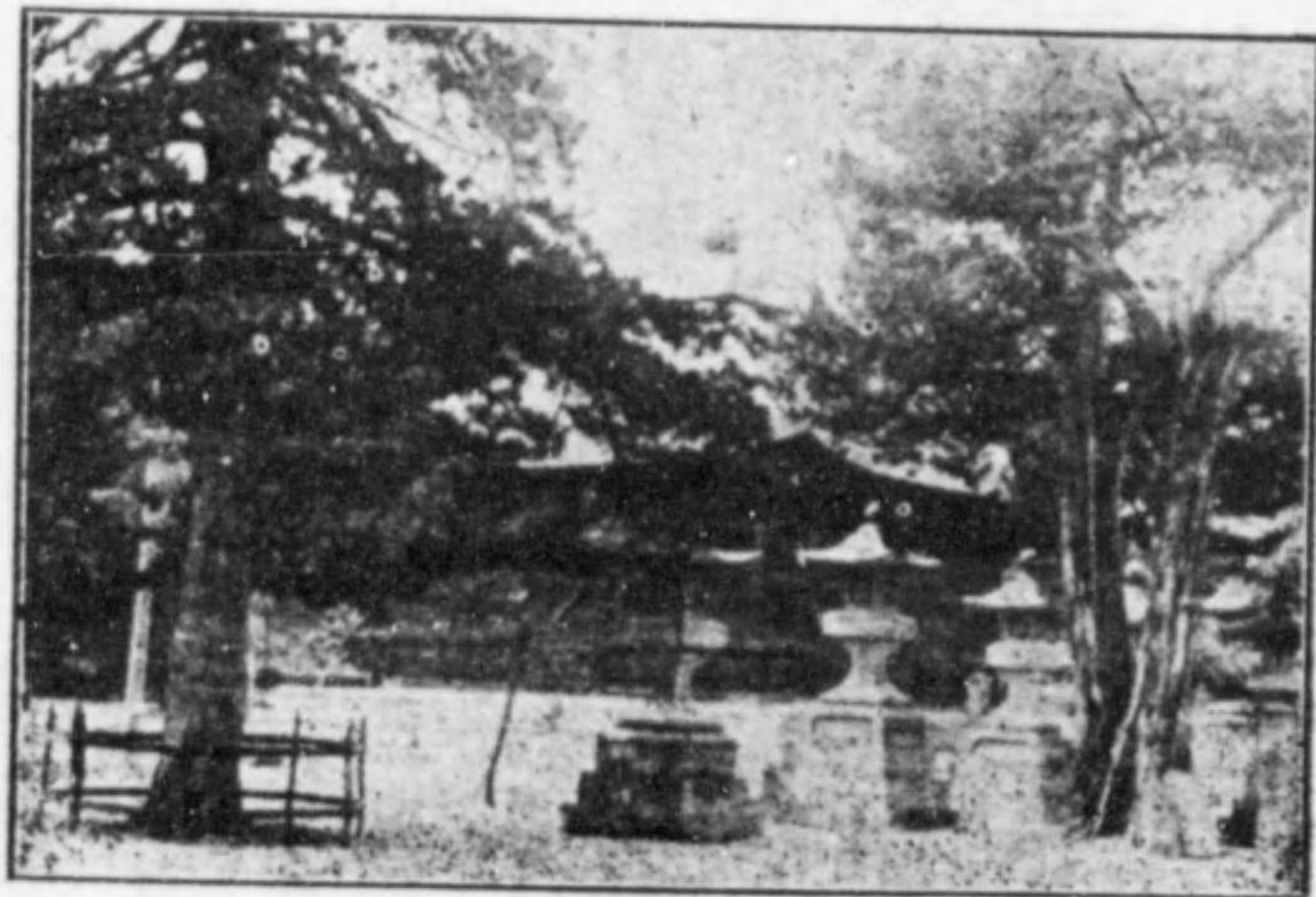
んだのを本田善光が拾ひ上げて来た閻浮檀金の彌陀如来、云は、日本へは第一番に

淺間山へ登山しやうと云ふのは稍遊山よりは冒險に近い、追分の驛で下車して頂上まで三里十町火山岩、何とか岩と地質學上の勉強にもならう、絶頂煙を吹いて居る近くから雲を隔てる下界を見たら大に浩然の氣を養ふ事も出来やう、併し飛び込むのはよし給へ、非常に熱いから。

善光寺へは長野で下車、急げば二時間位で参詣が出来から次の汽車に乗る事も自由である、善光寺の本尊は例の物部守屋が難波の堀江へ投込

輸入された佛様、丈は僅に一尺五寸だが本堂の大きさは南北六十二間東西四十二間背後には先年共進會を開いた跡があり、市の公會堂城山館あり、是へ上ると古戰場川中島、千曲川と犀川との流れが糸の如くすぐ目の下に見える、長野から五里十町、善光寺の裏手から阪を上つて飯綱神社に詣で飯綱の原を過ぎると戸隠の山にかかる、中社、寶社を過ぎ更に急阪卅町、手力雄命を祀つた戸隠神社、平維茂の鬼女を退治した處など見物す可き處はいくつもある。

善光寺經堂



時間の都合が付くなら、高田で下車して町を見物し、西北一里の春日山の城址を訪ふのも大に好い、城壁今は跡なく一堆の丘陵、古松の間に枝を交ゆるの櫻のみ昔を知り顔である、山上長尾高景建立の林泉寺あり、茲に謙信の自

畫贊の幅、大額面の外に兆殿司の畫などがある、高田の宿屋は郷三館、柳絲、高陽館等である。

直江津へ出て始めて越後の海岸、汽船の出入は繁し貨物の輸出入越後の咽喉である。文明の様子も見て置く必要があらう、船は郵船會社の定期の外に越中商船會社の伏木七尾通ひもあれば佐渡へ直航のものもある。

鯨波は越後海岸中第一の奇勝であらう、停車場から出れば一足、奇岩怪石の間に旅館あり、北海の波は掀翻岸を噛み巖を洗ひ、小島點々の間に白帆を眺め、魚は新らし風は冷たし、夏ならば是非一日足を茲に止めて海水浴を試みなくてはなるまい。鯨波から國道を傳はつて行くと出雲崎、寺泊を過ぎて彌彦へ着く、出雲崎は芭蕉が『荒海や佐渡に横ふ天の河』の吟をなした處で正しく佐渡とは向ひ合ひ、呼べば應へん形をして居る。

彌彦詣では越後人全體の唯一のたのしみ、三條から汽車で行く事も出来、新潟からは信濃川を溯る小蒸瀛でも行かれる、彌彦神社は彌彦山の麓に天香註山命を祀つた處で老杉古松の間刺さびたる建築、山を上り切ると奥の宮があつて茲からは越後中が一目だと云つて居る、彌彦の隣には角田山、下は浦濱と云つて十丈の懸崖波濤と相戦ひ、巖龍の如き虎の如きもの海中に散在する壯觀あり、是を見に行くには寺泊から船の仕度をして網でも打せながら出掛けると好い。

柏崎は石油が盛に出るので近年段々に好くなつて来る、宿屋は天京、岩戸屋、町の末端に行基の作になる閻魔の像を本尊の堂があつて、茲で毎年五月に馬市がある。柏崎の盆踊に『閻魔前なる茶屋の娘、あれを地獄へやらぬは、去りとは閻魔も依估を引く』とあるは此の閻魔様の事である、町から國道を東へ椎谷へ行く間に荒濱と云ふ處があつて芥多(あ)のがあつたが、今では俗謠に名のみを残して橋が架つて居る。

『行こか參らんしよか米山の薬師』と云ふのは柏崎へ行く手前の汽車の隧道上になつて居る、昔は米山峠の上下三里は險峻を極めたものであつたが今は新道が出来て樂だ、謙信が長尾景政と戦つて勝つた瓶割阪も山中にある、等師は絶頂にある、

山中瀑處々にあり夏は參詣者が非常に多い、柏崎から西へ十町ばかりで番神が鼻と云ふ海水浴場がある、海へ突出した半島で端々に三十番神の堂がある、日蓮が佐渡から歸つて茲に上陸した紀念に建立したものと傳へられて居る、佐渡も繪の如くに見え東に彌彦、角田も見える好い景色の處である。

長岡は新潟に次ぐ大都會である、信濃川を前にし三國峠と清水越の險を要して維新の當時河井縫之助が屢々官軍を敗つた處、今は商工共に發達し越後の中樞である宿屋は枋屋、野木屋、大野屋、町から東へ一里で悠久山と云ふのは舊藩主の墓地、櫻が多く花時は長岡中の賑を集める處である、『小千谷縮みの何處やらが』と云ふ小千谷は長岡から信濃川を上つて四里。

三條は西本願寺の別院があつて日蓮宗の本山本成寺があるので越後中の兩宗の信者を茲へ集める處だ、商賣も中々盛だが、門跡様のお下りと本成寺の御會式には踏み殺される程有難連が出る處である。

新潟停車場で下車すると直ぐ日本第一の長橋長さ四百卅間の萬代橋が長虹の如く

に横はつて居る、此橋を渡れば即ち新潟の町の中心、旅館は吉勘、篠田、室長、古甚、越路の雪の肌、新潟の美人を見んと欲すれば料理屋鍋茶屋、行形(なり)亭に行く可し、美人の美なると共に料理は東京の人の舌をも巻かす丈の伎倆あり、白山公園に白山神社を拜し日和山に上り、新しい魚を喰ひ、美人を見れば新潟は既に知る事を得たるものであらう、若し彼の有名なる盆踊を見んとすれば舊盆の夜、市の北の端に行つて見ると、娘、職人、女房、商人、子供などが歌拍子面白く聲張り揚げて歌ひつ舞ふのを見る事が出来る、新潟は水郷で、町に縦横の堀があつて橋の多い川端を月に浮れて日和下駄の足拍子、處々の橋板をとゞろと踊り狂ふのが如何にも詩的であつたのを警察から禁められて、一部だけで踊る事にしたのだと云ふ。

汽船で佐渡へ向ふと上陸地は夷港である、夷は湊町と橋を堺にして相接し兩津町の名がある、橋の一方は海で一方には加茂湖がある、月園四里半、金北山、檀特山の影を斂波に宿して風景絶佳、鯉鮒鮓の料理を命じて酒樓に盃を揚げると絶海の孤島に在るのを忘れて仕舞ふであらう、新潟に似て茲も美人系とでも云はうか、いや

女の多い事。

兩津から西へ六里佐渡の西岸川原田へ出で川原田から又一里で相川へ出る、此間人力が通る、相川の金鎖深さは一千尺、職工三千人、昔は島流の悪人を收容した處だが、今では日本唯一の寶庫、惚れ薬、一ツち利くのが佐渡の土が如何して金になるかを一覽したら、恐らく金の價値も分るであらう、相川から川原田へ戻り海岸を東南一里の平泉村字泉に黒木の御所がある、啼けば聞く聞けば都の戀しきに此里過ぎよ山ほととぎす』と詠ませられた順徳天皇の假の御所である、御陵は黒木の御所より東へ十町の處にあり、傍に眞野宮があつて宮司が御陵の御守をして居る、日蓮の遺蹟は眞野の山陵に近い妙宣寺にある、妙宣寺の境内に阿新丸の父日野大納言資朝の墓がある。

再び新潟へ歸り更に信濃川の悠々たる景色を眺め萬代橋を渡つて歸途に就く。

みやげもの 水飴(高田) 梨、越後上布、五泉平(新潟) 常山焼(佐渡)

柏崎から椎谷まで、間に荒濱あら砂、あくたの渡もなやかかる (俚語)

信濃なる千冊の川のさゝれ石も君しふみては玉と拾はむ (萬葉)

越後から佐渡へ賣られた女に向ひ、歸り度いかと尋ねたま
「いゝえ私は佐渡の土になる積り」

▲第十線▼大和巡り

- ◎第一日 新橋△大阪△堺△濱寺△
 - ◎第二日 堺△和歌山△和歌浦△和歌山△
 - ◎第三日 高野山△高野口△高野山△
 - ◎第四日 高野山△高野口△吉野口△吉野山△奈良△
 - ◎第五日 奈良△法隆寺△王寺△畝傍△櫻井△奈良△
 - ◎第六日 奈良△笠置△奈良△宇治△京都△
 - ◎第七日 京都△新橋△
- ▲新橋より大阪 前後十一時の流車にて出發するのち好都合である、大阪着は翌午後五時三分、流車賃は三等で三圓六十六錢
- ▲大阪より堺、濱寺 大阪梅田の驛に着くなら難波驛まで電車あり、夫より南海鐵道線で住吉、堺、濱寺のうち都合の好さうな處に泊り翌朝の流車で和歌山に向ふ
- ▲難波より和歌山 は哩數四十哩、時間急行にて二時間十分普通列車でも三

- 時間迄は費らず、賃金は三等で七十二錢、難波より住吉迄は七哩、堺は十二錢、濱寺は十六錢、和歌山へは濱寺より五十六錢、堺より六十一錢、住吉は六十六錢
- ▲和歌山より和歌の浦 南海鐵道の終點和歌山市驛から和歌の浦まで三哩の間は電車がある、賃金片道拾錢、往復十八錢、朝六時より夜十一時迄運轉
- ▲和歌山より高野山 和歌山市から高野へは流車で舊紀和歌道線へ高野口まで哩數廿四哩、時間約二時間、三等賃金四拾錢、高野口より女人堂まで距離三里、駕籠代一圓八十錢、高野口より最一ツ先の橋本からは紀の川を渡り學文路(むろ)までは道平なる爲め人力車通じ賃錢僅に十二錢、夫より駕籠を備へば二圓五十錢
- ▲高野より吉野 高野を下つて高野口又は橋本から吉野口まで又流車、哩數十六哩、時間一時間と廿分位、三等賃金二十七錢、吉野口より下市六田の渡、迄馬車あり、人力車は尙山の中までも通じて居れども花の咲ぬ南朝の古蹟、行々懐古の思ひに耽る方が好いてあらう
- ▲吉野より奈良 流車にて二十五哩、時間一時間半若くは二時間、賃金三等で

ある、三ヶ所はいづれも近所の事、氣に入つた處へ宿を定め翌日は和歌山へ向ふ事になる、貝塚驛から一里で行基の開いた水間寺と云ふのがある、此寺に『笠が好う似た』清十郎とお夏との墓がある。

紀の川で布を晒すのを見ながら和歌山の停車場に着く、和歌山で見るとは岡公園、市の東南岡山町にあつて、一名を天女山、林泉の美後樂園、兼六園に及ばずと雖も亦頗る珍とす可きものがある、電車で約一里、日本三景に次ぐと云ふ和歌の浦に出る、入江の多くが水減じ田圃となりしもの多きは遺憾とす可きも尙玉津島明神の邊、繪にも及ばぬ所あり、片男波は明神より右へ數町の處にあり、は、あ是がかと云ふ位のものなる可きも兎も角一覽の必要はあり、玉津

濱海寺濱



島明神社より入口を隔て、奠供山あり、巖石高く聳えて山上に南龍神社、東照宮あり、眼下に和歌の浦を視、左手に遙に紀三井寺を見る、宿屋は苜邊の茶屋、望海樓



岡公園

に賽す可し、此邊一帯要塞地帯であるから寫眞を撮る事は出来ない。和歌山市驛より舊紀和線に乗つて高野山に向ふ途中、見る可き名所舊蹟頗る多くある。

船戸驛から一里半で根來村字西阪本の根來寺に着く弘法大師作の不動を本尊とし
(是を身代錐もみの不動と云ふ)眞言宗の本山、荒法師の出身地であつた處だ、粉河
驛に近くと車窓から大伽藍の屹立して居るのが見える、施恩寺即ち「父母のめぐみ
も深き」粉河寺である、本尊は千手千眼の觀音西國第三番の札所五百六十の増坊が
あつたが、根來寺と共に秀吉に焼かれて烏有となり次第に再興して今は堂宇廿二、
寺院八ヶ寺。

高野口にて下車、紀の川を渡れば對岸の山は眞田幸村の隠居せし九度山、善名稱
院と云ふ寺に其住居の跡がある、門内巨松の下に眞田昌幸の墓あり、九度山より推
出川に沿ひ一里、道險にして車通せざる處を更に一里にして神谷に出で、神谷より
極樂橋を渡り不動阪を登れば既に高野の聖地である、神谷は高野口道、橋本道の咽
喉で花本館、花屋、金川等の旅館あり。

山に入り先づ清めの不動にて旅中の不淨を除き、岩不動、袈裟掛松、稚兒ヶ淵、
花折阪を経て女人堂に達す、昔は茲より先へは女は行けなかつたのだが今ではお構

ひなし、女人堂の先に參詣人取調所があつて氏名年齢などを調べ宿坊の案内をして
呉れる、大門は高廿二間表行十五間に奥行九間、二重の樓門、是より十五町で藥師
如來を本尊とする金堂、夫より二町で金剛峰寺の主坊、壯麗なる結構に聳え立つ、
堂中柳の間は豊臣秀次自殺の室である、東八町で僧坊數十、其盡くる處からは松杉
暗き道二十町にして奥の院に達す、此二十町の間兩側の道は悉く墓なり、太閤の墓
光秀の墓、曾我兄弟の墓など探し出す事が出来る、玉川の御廟橋を過ぐれば歴代皇
帝の御寶塔、千餘年不斷の燈をなす燈籠堂、弘法大師入定の地、經堂、納骨堂あり
歸路は又神谷に戻り橋本に出る方便利であらう。

北守智驛から一里半で金剛山に達す、山上葛城神社あり、眺望絶佳紀淡の海攝河
泉の山一目指呼の間にあり、山を河内の境に下れば廿五町にして千早の城あり、城
趾の跡千草神社あり、戻る事數町楠正儀の墓あり、松籟颯々として喊聲の如く感慨
深かる可し、千早を出で河に沿ひて一里半河内に入り桐山城と赤阪城の趾に出づ、
赤阪は正成が始めて籠りし處、桐山は其臣恩地左近をして守らしめたる處、赤阪の

城趾は絶壁數十丈、風光頗る佳、赤阪から三町で水分村字山の井に楠公誕生の地があるが、今はたゞの田圃の中、三四町離れて建られ神社其境内の楠木神社は楠公の戦死後醍醐帝の親ら刻まれし楠公の像を祀り此地に社を建させられし處である。茲まで来て仕舞ふと一里で富田林の驛に出られるから戻るより汽車でぐるりと奈良へ出る方が好い。

前の鹿ヶ壺阪驛へ下りて壺阪寺へ詣り「夢が浮世か浮世が夢か」と云つた澤の市君の古蹟を尋ね、吉野口停車場へ向つて又汽車に乗る。

吉野口から約一里半、六田の渡を越えんと最早吉野山である、六田の渡から先は一町毎に石の標が道傍に打てある、一の阪を越すと櫻は其笑顔を見せる、二十町の間次第に樹深く花多く此間を長峰の櫻と名付けられて居る、途中に村上義光の碑、豊太閤の花見の舊蹟がある、更に行く十町で、全山悉く花となり所謂一目千本の名所となる、三十町で千本の茶屋あり、七曲阪を上り黒門を入つて吉野町、町を過ぎると藏王堂、香雪深き間に東南院、勝手の社、竹林院、吉水院、吉水神社あり、後

醍醐帝の此地に行宮を置かるゝや「花に寝てよしや吉野のよし水の枕の下に石はしる水」と御製ありし處、正行の「歸らじ」との歌を遺せし如意輪寺は勝手社より左に折れ谷に下り又登り七八町如意輪山の半腹にあり、散りかゝる落花を拂ひも敢へず如意輪堂に上れば誠に「古陵松柏吼天懸、山寺尋春春寂寥、眉雪老僧時輟帚、落花深處說南朝」の詩を思はる、吉野の町端れ天皇橋より奥の千本あり、橋を渡つて路二つに分れ、其左を取れば櫻木の宮、宮瀧、右は大將軍社の上に佐藤忠信の義經に代つて踏留まりし花櫓、夫より子守社、金峰神社を過ぎ數町にして西行庵あり西行の像を掲げ境内幽邃、花俗ならず、西行の「淺くともよしや又汲む人はあらじ我にことたる山の井の水」と詠み、芭蕉が「露とくく試みに浮世そ、かばや」と吟せし苔の清水は庵室の手前にあり、吉野町の宿屋芳山館、芳雲館等に一泊し夢に花神と語り、翌朝は清明が瀧、宮瀧を探り、山深く入つて大峰山に花王堂、金峰山より西に南芳野村字丹生に賀名生の行宮の趾を訪ふも好い。

見物遊覽の都合を考へる可し、奈良は遊びには全く好い處である、梅は淺茅原、櫻は公園と猿澤の池、藤は春日の神苑と南圓堂、月は三笠山、猿澤の池、手向山の紅葉等春秋行樂の地多きばかりか、美術工藝の二千年來の精華の地ゆるくすれば一ヶ月や二ヶ月では見切れぬ程の處である、形が猿に似て居ると云ふ猿澤の池は市の中央、西岸に采女の社、東に衣掛柳、大御堂十三鐘は其東、池の北には興福寺あり、境内に金堂東金堂、西側に日本三大松の一つなる花の松あり東金堂の南に五重の塔、金堂の西南に南圓堂、其北に北圓堂あり、春日の一の華表前に菩薩院あり茲にて毎年二月七日より七日間有名なる薪能催はさる。

奈良猿澤池より五重塔



春日一の華表より北東に博物館あり、美術歴史工藝の三部四室ありて是だけでも一日はかゝる筈、一の華表の東を春日野、博物館の南を飛火野と云ひ人に馴れた神鹿數百若草を尋ねて犬の如しである、春日神社は一の華表から這入つて三笠山の麓松杉千古の寂ある處に丹碧色鮮に建て連ねられた燈籠の數が三千もあると云ふ事だ、三笠山の北に若草山、年々三月廿一日に山燒の神事があつて京都の大文字程の奇觀ださうだ、若草山の續きが手向山「紅葉の錦神のまに〜」の歌の處さ、手向山の手向山神社と春日神社との間に東大寺は嚴然として聳えて居る、本堂は例の大佛様だ、南大門、二天門、茲には洪慶、運慶作の密迹金剛がある、手向山神社の東に三月堂、其西に四月堂、三月堂の北に二月堂あり、二月堂には丈七の十一面觀世音あり毎年三月一日より松明の神事あり、天平時代の寫經を充せる尊勝院寶庫は正倉院の西、四天王の名作で聞えて居る戒壇院は大佛殿の西にある、大佛殿から西北三町に正倉院あり、歴代の御物、寶物の數を知らず、景清が大佛供養の時賴朝を撃たんとせし東大寺の碾磑門より北十町般若寺に入る、護良親王の經櫃に匿れて賊手を

免れ給ひし處である。

郡山驛に下車し金剛山寺に矢田の地藏等を拜し南に山路を半里、松樹寺に詣り舎人親王の刻める千手千眼の觀世音、境内の大黒堂に弘法大師作の大黒天に賽し、南都七大寺の一薬師寺に向ひ、本尊の丈六金銅の薬師、行基の佛足石、養老年間百濟より献せし長九間幅二間高一尺六寸の瑪瑙石の佛壇を見、是も七大寺の一唐招提寺に行く可し、薬師寺から僅に五町、天平勝寶八年に唐僧鑑眞の草創以來一ヶ所も修繕しないと云ふ純乎たる古美術品、黄金の乾漆丈六の釋迦などが好いも悪いもあつたものではない。

松尾寺まで戻つて十五六町行くと日本最古の建築物たる法隆寺へ出る、聖徳太子の建立の斑鳩寺と云ふのが是だ、堂塔の配置が人の顔に象つてあると云ふ程の建物微密にして雄大、茲で説明をするよりは往つて驚く方が好い、法隆寺の扉一枚で博士になつた人さへある、半日や一日では外側だけでも見られぬ事と思はずんばなるまい茲から北東へ六町で法輪寺と法起寺がある、是亦見る可きものである。

法隆寺驛から瀛車に乗れば次の停車場は王寺、茲で降りれば二十町、法隆寺からでも半道で龍田の町に行く瀧田川は町の中央を流れ兩岸楓樹多く龍田橋の邊は『からくれなるに水潜る』のを見られる、龍田神社は三郷村立野にあつて境内神さびて奈良朝の思はる、心地す、王寺の北勢野より阪路三十三町、龍田の西に聳ゆる信貴山に上つて觀喜院に詣る、聖徳太子が此山の巖の上に毘沙門天の立てる姿を見て守屋を亡ぼし、後に建立したる名利、山の上に松永久秀の織田信長に亡ぼされし城趾あり。

王寺の次、下田停車場で下車、廿五町南に天智天皇の時代彌勒三尊の形をした夜光の石を見出して建てたと云ふ石光寺、本堂の東の染の井即ち中將姫の曼陀羅の絲を染めた井戸を見て更に五町南の方當麻寺に赴き中將姫の蓮絲で織つた曼陀羅を見再び瀛車に搭じて畝傍驛に下車檀原の神宮に詣り、停車場より三町にして畝傍山の麓に神武天皇の御陵に至り参拜して南に向ひ數町檀原皇居の跡たる檀原神宮に詣り久米寺、橘寺、岡寺、飛鳥神社等を巡遊して又瀛車、天の香久山を見、櫻井に下車

して三輪山の麓大神神社に詣で、三輪の檜原、玄寶谷、印の杉、夫婦石等を見、三輪町に入り、何處の茶屋でも三輪の茶屋と看板打つたるに驚く、多分『奈良の旅籠屋二輪の茶屋』と梅忠の文句にあるを取つて附會せしなる可し、序に初瀬町に入り初瀬の観音に賽するが好い、茲は淺草の観音に負けないと云ふ處、おまけに吉野、初瀬と並び稱されて居る花の名所である、初瀬より東へ三里室生山室生寺、是亦有名なる古代建築として美術家は是非一見しなければならぬ處ださうだ。

奈良へ歸つて一休み、關西線に乗つて笠置まで行く、千早、吉野を見て笠置を見残す譯には行かないからである、停車場より山麓まで二町、夫より八町で山頂に達す、文珠院より東に薬師、彌勒、虚空藏の三石あり、夫より北に石門を入る幾千切とも知らざる絶壁に立ち溪間千手の瀧を見、太鼓石を過ぎて平坦なる處に出づ、是即ち皇居の跡なり、外に文珠院、福壽院等あり、笠置の山は嵯峨たり木津の流は潺湲たり、此邊瀛車の窓からのみにても高く笠置城趾の碑を望み南朝を懷はずには居られないのである。

茲より奈良を経て京都に向ふ、



宇治平等院鳳凰堂

木津で下車して木津町に入れば和泉式部の墓、棚倉よりは宇鳥居前の高倉宮、源三位の一敗の爲め以仁王の自刃せられし舊蹟、玉水は橘諸兄の舊蹟井手の玉川は今水なけれど驛の西にあり。

宇治へ下車、宇治町は宇治川に沿ひ風景好し、旅館菊屋、佐々木梶原の先頭を争ひし小島ヶ崎は橋の川下二町の處、橘姫の社は宇治橋の西、平等院は南にあり佛殿は鳳凰を象り屋上に雌雄の鳳凰を上げた故に、鳳凰堂の名がある、源三位頼政自殺の扇の芝の傍には駒繫松、鏡掛松あり、木幡の西北十五町に明智光秀の土民に刺されし小栗樞村あり、宇五箇庄の南に黄檗山、其外三室戸寺、稚朗子の陵ある宇治山等此驛より遠くはない、桃山に桃山城の趾、桓武天皇の御陵を

七日の旅

見、伏見に先づ第一に稻荷社、鳥居元忠の古戦場、御香宮神社に義民文珠九助の碑
深草少將の宅地たりし欣清寺等を見て京都に歸り、京都見物も後廻しとして新橋へ
歸る。

みやげもの 双物(堺) 筆墨、霰酒、奈良人形(奈良) 茶、朝日焼(宇治)

行春に和歌の浦にて追付きけり

(芭蕉)

春日野は今日はなやそ若草の妻もこもれり我もこもれり

(業平)

宇治川は頼みに思ふ川でなし

(川柳)

『宇治へ泊ったかい』『ウム悪い宿屋へ泊った』『幾何取られた』『旅籠が五十銭、茶代が三圓』
『恐ろしく氣張つたね』『でも宇治は茶所だつて云ふから』

房 總 半 島

欠

MISSING

▲第十二線▼ 京都と大阪

◎第一日 新橋△岐阜△

◎第二日 岐阜△馬場△天津△

◎第三日 天津△馬場△京都△

◎第四日 京都△

◎第五日 京都△龜岡△京都△大阪△

◎第六日 大阪△

◎第七日 大阪△新橋△

▲新橋より岐阜 岐阜へ寄るのは長良川の鵜飼をと云ふ計劃なのであるが、此の望みもなし季節でもなければ直に先へ進むがよい、岐阜までは二百五十二哩、時間十時間半、三等賃金二圓九十錢、京都迄買へば三圓四十錢で途中の見物に差支はない

▲岐阜より馬場 馬場は近江八景を目的に下車する、八景見物には天津の方が道順もよし序に天津の町もと云ふので

京都と大阪

▲馬場より大津 迄は支線の流車哩 數一哩、三等賃金僅に三錢

▲馬場より京都 距離十八哩、時間も僅に四十分

▲京都の市中 を一日に見物するのは困難の機だか七條から北野迄、途中木屋町で乗換へれば三條敷上げへ、寺町丸太町で乗換へれば出町橋迄の東線と、四六條から堀川下立賣迄、押小路で乗換へて千本二條までの西線と、東寺から肥後町迄の稻荷線との三つで十五哩ばかりの電車があるからぐるぐると乗り廻はし及ばぬ處は人力を備へば一日で見物が出来やう

▲京都から龜岡 龜岡へ行くのは嵐峽第一の遊、保津川下りの爲めである、京都

▲京都より京都 龜岡の驛から僅に二丁の城丹株式會社で舟を備ふ、一艘借り切り三圓から五圓、乗合もある、僅に二時間半ばかりで嵐山の三軒茶屋まで下るのである

▲京都から大阪 此間は二十六哩、僅に一時間と十分

▲大阪市中 の見物は是も一日では少々無理かも知れないが、城東線と云つて

梅田驛から大阪城の傍を通つてぐるりと南は湊町までの流車が八哩あるし、梅田から難波の停車場を通り越して天王寺下まで、末吉橋から築港までと十文字に市營電車もある、人力も存外安い

▲大阪より新橋 は三百五十四哩、最急行なら十二時間、普通ので十八時間、三等賃金三圓六十六錢

忙しい旅であるから悠然とはして居られない、京都と大阪を七日で見物しやうと云ふのさへ頗る六ヶ敷い仕事であるのに、行掛の駄賃に長良の鶉飼と養老の瀧を見物しやうと云ふのだ、先づ岐阜へ下車する、信長が舅齋藤龍興を攻めて美濃を奪つた、其城趾のある稲葉山を東に西北に長良川を控へて居る、周の文王が岐山から出て天下を一統したと云ふ故事を取つて、信長が岐阜と名付けたのださうだ、稲葉山(二名金華山)は岐阜の市街、長良川の景色を一眸の下に集めて居る、山へ上るには岐阜公園萬松館(板垣伯の遭難の場所)の前よりする七曲口と間道との二つがある、稲葉山の麓益屋町の正法寺に岐阜の大佛、高さ四十五尺、顔の長さ十二尺、耳の長

さが七尺と云ふのがある、序に是も稻葉山の麓に伊奈波神社がある、景行天皇時代の鎮座で岐阜全市の鎮守様である。

長良川の鵜飼は毎年五月十一日から五ヶ月間月夜を除いて何時でもある、岐阜で宿屋玉井屋、津國屋、小橋屋、住吉屋、日下部、油喜、十八樓等に宿を定めて案内をさせれば親切に世話をする、若左もなければ遊船株式會社と云ふのもあるから夫へ頼むもよし、船賃は二人より五人乗位まで一圓、五六人乗れるのが二圓、十五人乗で四圓、此外に炭、醬油代等が幾何か要る、けれども暗中篝火點々の間に鵜の飛び交ふ奇觀を見ながら取り立ての鮎を直に下物にして一杯を酌むのは頗る愉快な事であらう。

養老の瀧へは大垣停車場を下車して高田を経て養老山の麓まで人力車で片道五十錢位、里數は三里、山腹の養老寺、養老神社を過ぎ瀧に達す、瀧は高さ七丈、幅一丈二尺、山中に豆馬亭、榎水樓等の旅館あり、宿料八十錢位、菊水の泉の傍に素心庵あり、元名古屋の豪家の娘にて遁世したる老尼素心が薄茶の立前一服を乞ふて靜

に山氣松籟を味ふも面白からう、山中にある千歳樓からは富士も見え名古屋の金の鮎も見える。

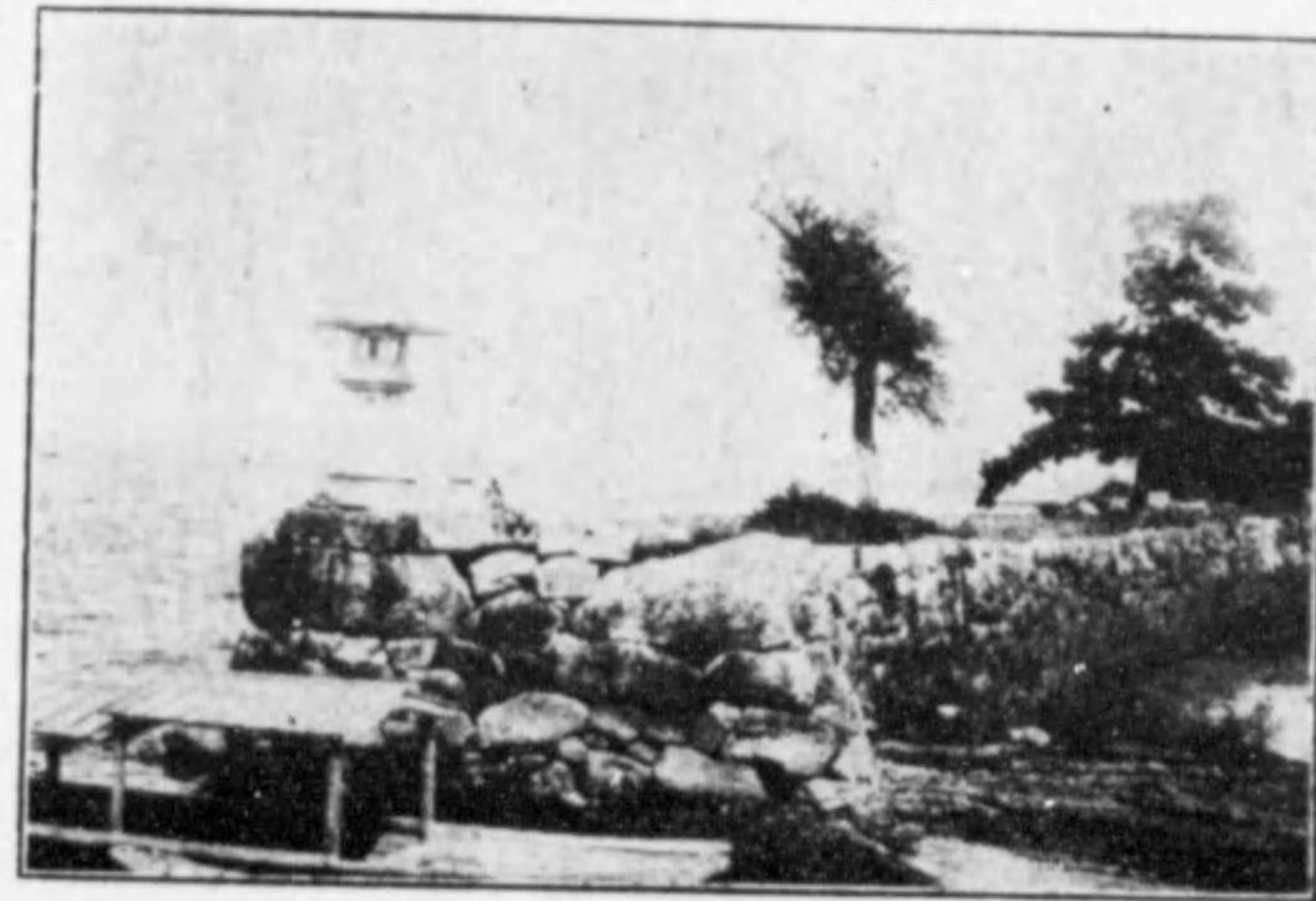
垂井驛から西へ三丁玉泉寺門前の泉が有名な垂井の泉、垂井より西卅町勝山村の桃配野は家康が關ヶ原に入つた舊蹟、同村に常磐御前の墓がある、關ヶ原驛は關ヶ原役の古戰場、停車場から西十五町で不破の關の舊趾に出る、近江と美濃の人が寝ながら話が出来ると云ふ寢物語の里は柏原驛から西へ一里半、伊吹山は關ヶ原から二里、此邊は『番場醒ヶ井柏原不破の關屋は荒れ果て、尙漏るものは』と云ふ俊基朝臣の東下りの街道である。

馬場で乗換へて大津に下車、大津からは近江八景遊覽船と云つて四月一日から七月廿日迄は僅に四時間で一週して大津へ戻れる船が出る、竹生島行の汽船も三月一日から十月卅一日迄、此外大湖汽船會社の舟も、湖南汽船會社の船も大津から出る、琵琶湖畔の地へは自由に往復が出来、三井寺の下から京都へ抜ける疏水乗合船が出るから是に乗つて船の山へ上り下りする奇觀を見るも好し、近江八景のう

京都と大阪

ち、矢橋の歸帆は湖水の東岸草津の停車場から西へ一里、湖水の南端を流る、勢田川に架けられた橋が勢田の唐橋、仰げば石山、三上、四明、比良の山々を望み脚下は宇治の上流となる可き清流なり、「夕陽人影與橋長、勢田曝網東山月」の光景を以て八景に數へられて居る、石山の石山寺は秋月を以て知られて居る、天平年中に創建されたもので紫式部が源氏物語を書いた處で源氏の間があり、觀月亭の背後に式部の墓もある粟津の晴嵐と云ふのは勢田の橋から西、膳所(せ)町の背後に當つて義仲の戦死した古戰場、義仲を葬つた義仲塚のある義仲寺は天津町の字馬場にあつて義仲の塚に並び芭蕉の塚あり、句碑題して曰く「木曾殿と春中合せの寒さかな」と。

帆跡の橋矢



橋唐の田瀬

三井寺は大津の西山手にあり、寺域七萬五千、明鏡の小白帆の點々映ぜるが如き琵琶の湖を眼下に見る景色、紀三井寺の和歌の浦に於けると同一にして其規模雄大、瀟湘八景寒山寺に譲らざる事勿論、本堂、唐院、大講堂、金堂其他寺坊數十の外大津分營、西南戦役陣亡者の紀念碑あり、武藏坊辨慶の曳鐘は境内の北隅急阪の中腹にあり、中院の日光院には元信、探幽合作の猛虎抱子の圖其他應舉の珍品ありと、「名にしおはば逢阪山のさねかつら」の逢阪山は大津より南の山を云ふ、街道の峠より東にゆるさじと云ふ逢阪の關の趾あり、街道に關の明神、蟬丸の祠、關の清水、關寺の趾などある、此内關寺は小野の小町が晩年零落して茲に寓居したるが謠曲に出て居る、走井、走井餅など名物尠からず

『さゝなみや、滋賀の都は荒れにしを』と讀まれた滋賀の舊都は○大津の宮と云つて今の大津から遠からぬ滋賀村字錦織にあつて、今は二町四方許の上壇の地を御所跡と云ふだけである、大津を北へ一里阪本村の東の端が唐崎の唐崎神社、其一つ松は幹一本にして枝を垂れ葉を重ぬる廣さ百坪、『唐崎の松は花より臙にて』の句のある處、夜雨を以て八景の一となつて居る、堅田の落雁と云ふのは大津から北へ三里、堅田の湖岸から十四五間ばかり突出して作られた浮見堂の景色である、堂は恵心僧都の草創、堂内に同じ恵心僧都作の彌陀などがある、比良の暮雪も八景の一であるが、登るには木戸村字八屋戸から一里十五町十一月から翌年の三月迄は頂上は常に雪である、下から眺めて置いても濟まぬ事は

栗津の晴嵐



ないが、上れば無蓋頂、佛坐峰、紫雲嶺、法華灘、櫻桃溪、瀑布泉、栗原、龍華の八勝がある。

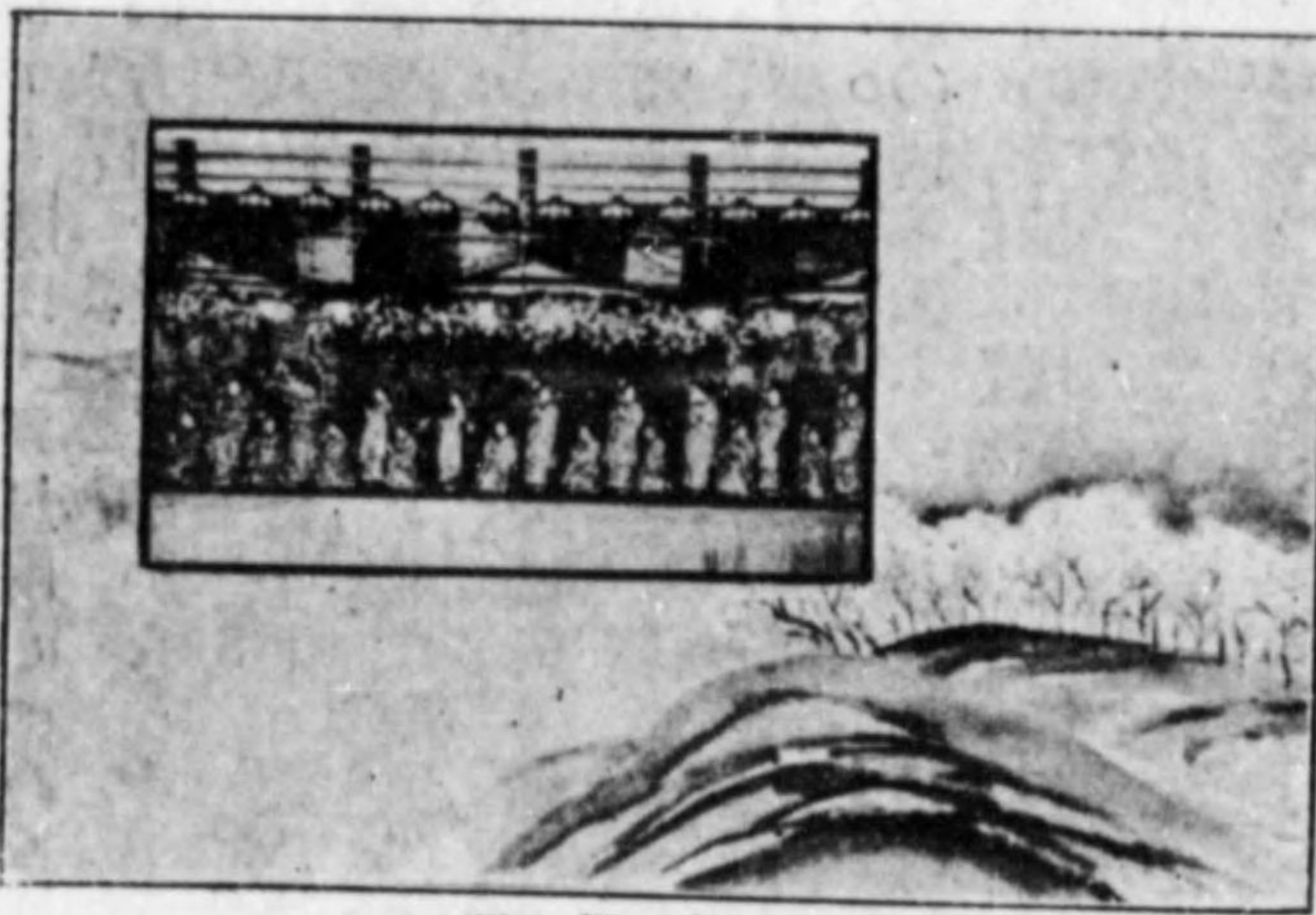
竹生島へ參詣するには大津からも船は出るが米原で乗り換へて長濱で下車した方が便利だ、長濱から湖上六里で竹生島へ着く、島の周圍は二十六町、悉く斷崖で唯だ東の入江から舟が出入りするだけ辨財天に詣でて平の經盛を懐ひ、更に車を走らして停車場から二里三十町の姉川の古戰場、次の高月驛から小谷の城、賤ヶ嶽を見源平時代の優にやさしさと、元龜天正の擄猛なる武者振とを比較するのも一興であらう。

京都で泊るなら、麩屋町姉小路上の俵屋、終屋、麩屋町押小路上の澤文、小堀通新門前上る月の家、三條通り河原町萬屋、日光屋、西石垣通四條下る津田樓、下河原鷺尾町杉の井、三條小橋西吉岡屋、御幸町通三條上る松吉、麩屋町通御池上る若彦、木屋町通佛光寺下の松花樓、西石垣通り四條下る八百傳、外若彦、富田屋、海老岸、田中屋、綿屋、河六、八勘、龜吉等の内にて見物に都合よき處を選む可し

贅澤には限りはないが宿泊料は壹圓以上二圓迄の見當で濟まう、外に花外樓、大可樓、池庄、吉富など云ふ家も宿屋をする。

舊内裏仙洞御所は別として三條の大橋から見物を始めやう、東海道五十三次で上つて来れば江戸の日本橋で振り始めた賽の振り仕舞は此橋である、長さは五十六間秀吉の天正十八年に作つたのが始めであるさうだ、橋の西へ三四町の處が東京では淺草公園と云ひ度い新京極、觀世物、芝居、飲食店で夫は夫は賑かな處、新京極の六角通りに誓願寺、夫から南へ半町ばかりで道傍に和泉式部の墓がある、傍に軒端の梅がある、四條の大橋へ出る、河は悉く積となつて東側に形を遺して居るだけ、夏向此邊へ料理屋は床几を設け觀世物は小屋を作り「都人わづかな水で涼しがり」夕涼と稱して河原を町に變化させて大雑踏を演ずるのだ、橋の東は祇園、先斗町、紅燈綠酒、ヂツと目を閉つて通ると繩手通りの四辻に目疾地藏のあるのはおかしい、眼疾は嘘で雨やみが本當だと云ふ説もある、新地を東へ突き當ると八阪神社、素盞鳥尊を祀つたもので毎年七月十七日より七日所謂祇園會と云つて鉾山車が出、藝

岐の練物が出て盛なものだ、境内には櫻が多い、祇園の夜櫻と云ふのは處から夜になつて酔歩蹠蹠の客が多いからの事であらう。



京都都部

八阪神社の東北へ智恩院に行く、兩側に櫻を見ながら山門を這入る、本堂の東南の屋根裏に建築の時大工が置き忘れたと云ふ傘の差してあるのが下から見上げると幽かに見える、左甚五郎の拵へたと云ふ鷲張の廊下は直ぐ傍にある、本堂に上つて狩野派の抜け雀の襖、八方睨みの猫などを見、山を上つて勢至堂、紫雲水、圓光大師の廟などを見る、八阪神社の東は圓山、其南隣の長樂寺には安徳天皇の御衣で作つた十六旋の幟がある、長樂寺より少し上、山の半腹に頼山陽、頼三樹の墓がある、

ある、眺望も非常に好い、東山の最高峰にある將軍塚は平安奠都の時王城を守護せ

しむる爲とあつて八尺の土偶に甲冑弓箭を携へしめて西向に埋めたもの、長樂寺からでも圓山、智恩院いづれからでも上れる、上れば山城の半分が一目で、方々見物の方角が分つて好からう。

八阪神社前を繩手通り建仁寺まで下ると建仁寺、建仁寺垣の元祖であるといふ、寺内に石田三成と共に刑場の露と消えた安國寺惠瓊の塔がある、建仁寺の東隣に安井の金毘羅、以前は安井觀勝寺、藤原の鎌足が藤と愛して澤山に植ゑた花の寺とまで云はれた處で今でも藤は少々ある、金毘羅より南手鷺尾町に金玉山雙林寺と云ふのは傳教大師の開基、西行法師が此寺で死んだので西行庵、西行櫻の遺跡がある、寂照の塔と云ふのがあるが是は俊寛僧都の友だち平康頼の墓だ、頓阿も居た事がある、寂たので是亦塔がある、西行庵の隣に芭蕉堂があつて木像が安置してある、芭蕉堂からは道を隔て、北に大雅堂がある、是も大雅堂の書畫遺愛の品を藏して望めば見せて呉れやう。

高臺寺は秀吉が建立に係り萩の花で有名である。雙林寺の隣にあつて建築壯麗殊

に豊臣家の廟は金銀を鏤めて美事なもの、千の利休の好みに依つた時雨の亭、傘の亭は寺の背後獨秀峰にある、高臺寺の南に八阪の塔あり、夫より三年阪を上れば子安觀音、更に清水の阪を上り音羽山の清水寺に達す、阪の兩側は清水焼の賣店、石膏まがひの裸體美人を澤山に並べて居るのは少々心細い、清水寺の堂に安置されてるのは高八尺十一面の觀世音、田村磨が東征の時是を脊負つて陣頭に現はれたもので其證據には尊體に箭の疵があると傳へて居る、思ひ切つてと云ふ形容詞に用ひられる清水の舞臺、南に向つて遙に河内の金剛山、淡路島まで見えると云ふが夫は兎も角花もよし紅葉もよし、舞臺の下へ廻れば音羽の瀧、轟の橋、梟の水、地主權現、月照の居た成就院、景清が爪で作つた爪

清水寺



形の観音等の見る可きものが多い、舞臺の下を東へ山に上れば歌の中山清閑寺、六條高倉二帝の陵、小督の局の墓あり、清水寺を西南に下りて西大谷へ出る路傍に墳墓の累々として起伏して居るのが鳥邊山、右側の寺にお俊傳兵衛の墓がある、西大谷は西本願寺の廟所、親鸞上人の墓があり、蓮池あり、櫻あり楓あり、池に有名な眼鏡橋があり、花時には雑踏を極める處である、秀吉建立の大佛殿方廣寺は西大谷から南へ正面の通りにある、家康が秀頼に向つて難癖を付けた鐘は今も其儘、國家安楽の字を讀む事が出来る、大佛殿の南隣に豊國神社があり、其背後の山阿彌陀ヶ峰に秀吉の遺骸が葬られてある、豊國神社の前、路傍に耳塚と云ふのは朝鮮征伐で敵兵の首を獲た印に耳と鼻を切つて鹽漬にして送つて來たのを埋めた處である。豊國神社の南に三十三間堂あり、南北の長さ六十六間、二間毎に柱ある爲め三十三間堂と云ふ、本尊は康慶作の千手觀音、外に運慶、湛慶の千手觀音千體あり、卅三間堂の南山の上に泉涌寺あり、後水尾天皇以降歴代の帝陵が茲にあるので俗塵も及ばず堂塔宏壯、域内霧不斷の香を炊き、松籟梵鐘を學ぶ靈境である、泉涌寺の北

の山腹に新熊野觀音(いまくまのく)あり、本尊は弘法大師の作、脇壇の不動は智證大師、毘沙門は運慶の作。

東本願寺は烏丸通りの南端、八條通り大宮に東寺あり、寺内瓢箪池に燕子花多し東寺の北門を北に數町で六孫王社あり、六綠王經基の祠は社の背後にあり其左右の小祠、左を五所社と云ひ右を多田權現と云ひ、北隣大通寺境内辨天祠のほとりに多田滿仲産湯の水あり、六孫王社を出で北に七條通りを右に堀川に行けば興正寺、其隣を西本願寺となす、西本願寺は天正十九年の建立、本堂に親鸞上人自作骨肉の像あり、鼓樓の太鼓は大和西大寺、鐘は太秦廣隆寺にありし者、庭内には秀吉が聚樂亭に作りし三層の飛雲閣あり、西本願寺の北隣は法華宗の本山本國寺と云ふ、寺寶鸞鷲の曼陀羅は日蓮上人の筆で表装は楊貴妃の上衣であつたと云ひ、此地面は源爲義の住居で義經の居た「堀川御所」なるものも是であらうと云はれて居る。丹波街道を西に進み左に曲つて裏片町の南を右に曲ると島原の遊廓である、昔は外國使臣を見た鴻臚館のあつた處ださうだ、島原から十町綾小路の西の端は壬生寺

である、毎年舊三月に壬生狂言を開催するのは茲である、壬生寺から東北へ六七町
 蛸薬師通り堀川には例の空也念佛で有名な空也上人開基の空也堂がある、五條天神
 は松原通り西洞院の西、大泉寺は西洞院月見町、菅原是善の邸跡で、菅公誕生の地
 飛梅の跡もあり菅公の産湯の井もある菅大臣社も西洞院佛光寺筋の北にある。
 五條橋の傍にある御影堂は信州善光寺の如來を寫した御影を本尊として居るので
 此名がある、敦盛の室蓮華院尼が茲に閑居して阿古女扇を拵へたのを種にして扇谷
 熊谷なる芝居が出来たものであらう、五條橋の今ある處は昔の六條で今の松原橋が
 波の牛若、辨慶の相闘つた五條の橋ださうだ、序に織田信長の光秀に弑せられた本
 能寺ももと六角油小路の東で其後今の押小路へ轉居したのでさうだ。
 北野の天満宮は北野右近馬場、三條大橋から約一里菅原道真を祀つたもので、境
 内は松と梅「一條戻り橋」一條生樂屋、三條みすや針四條芝居」と歌にもある一條戻橋
 は一條通り堀川に架けられてある、何故戻橋と名が付いたかと云ふと昔三好清行が
 死んで葬列既に茲に到つた時紀州に居た子淨藏が駆け付けて來て専念に祈願したら

ば清行忽ち蘇生して悴と共に邸へ戻つたと云ふのが元である、お目出度い話だが戻
 ると云ふ字を忌むで嫁入婿入の行列は決して茲を通らない其代り又旅立は是非早く
 歸る様にと茲で袂を分つさうだ、小野小町の雨乞の歌を詠んだ、而して又鷺が五位
 を賜はつた處である神泉苑は御池通り大宮門前町にある。
 二條堀川に面して居る二條の離宮も表からなりとも是非拜さねばならぬ、是も光
 秀謀叛の時織田信忠が攻め殺された舊蹟である、三條栗田口に植髮の御影堂と云ふ
 のは親鸞上人が剃髮の時其毛を植ゑて指貫直衣を着けた童形の像がある、粟田口よ
 り北南禪寺町の南禪寺は京都でも有数の名利寺院廣く幽邃閑雅、金地院の東照宮廟
 所、境内丘上の龜山法皇の廟などを拜し駒ヶ嶽羊角嶺等に上れば悠悠々自適半日を忘
 れる事が出来やう、南禪寺の北に永觀堂あり、其北に若王寺社あり、若王寺社より
 更に北の鹿ヶ谷(たじ)の談合谷(だんか)こそ俊寛僧都の山莊のあつた處で平家を討たん
 との相談があつた處、背後に如意が嶽のあるのに如何して相談が思ふ様に行かなか
 つたかと一寸洒落たい處である、談合谷の上に樓門の瀧あり、鹿ヶ谷の北淨土町に

銀閣寺あり、銀閣寺は足利義政閑居の地、庭は相阿彌の意匠で一木一石も苟もせず



銀閣寺

心空殿、潮音閣の二層の建物頗る数奇を凝したものではあるが義政が建築中死んだ爲めに銀箔を置くに違あらず銀閣は金閣の實あるに對しては虚名なのである。

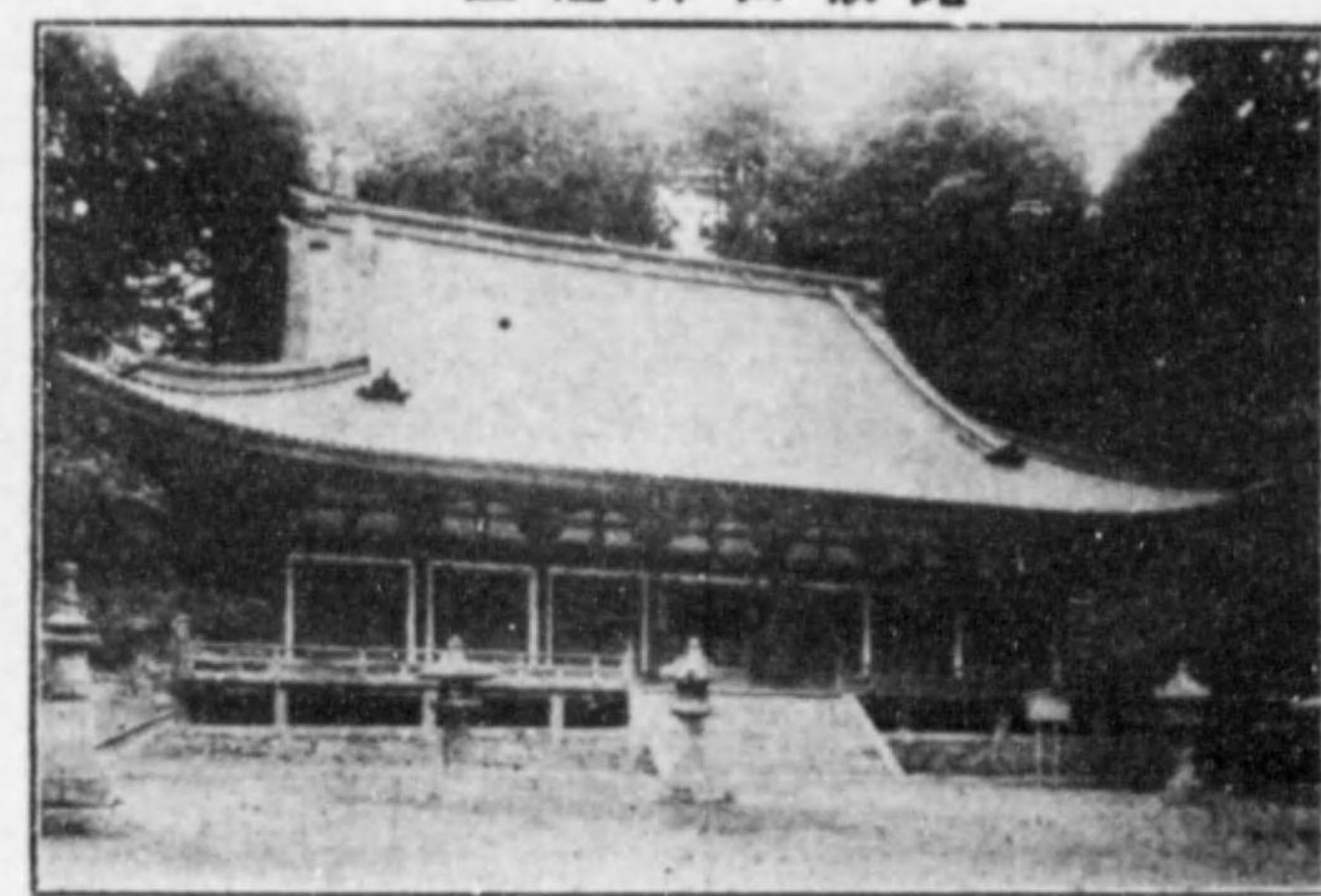
と云ふ、寂光院は建禮門院閑居の地、元草生村にあり、下鴨村に葵祭のある加茂御

是だけで市内は先づ一巡市外に必要な處は飛々に御案内しやう、石川丈山の詩仙堂は元一乗寺村比叡山には若狭街道山端の雲丹阪(さか)か、小原女の出る八瀬(や)から上る、東塔、辨慶の居た西塔覺範の出た横川の三塔を見て無動寺に至ると琵琶湖の風光手に取る如くに見え、夏向は登山者頗る多くテントを張つて一家生活をする者も中々多い

祖神社、夫より加茂川を半里溯つて俗に上加茂社即ち加茂別雷神社にも是非參詣しなればならぬ、三條大橋から真北に三里市原を経て鞍馬山へ上るも好し、序に牛若の天狗に劍法を傳へられたと云ふ僧正谷を抜けて貴船神社へも詣らねばなるまい。

平野神社は北野天神社より西北へ二町、平野の夜櫻と云つて花の名所である、金閣寺は夫より更に西北へ七八町、足利義滿の別荘として三層の建物に金箔を置いて鏡湖池に面せしめ、林泉に數奇を凝らしたる事は『秋の違ひ棚南天床柱』と俗謠にも謠はれて居る、一小亭夕佳亭だけでも驚かれる程である、此外紫野に織田信長父子の墓、船岡山に建勳神社、西陣に織物の工場を見物す可し。

比叡山釋迦堂



嵐山の勝は保津川下りに依るを好しとす、龜岡より船に掉して急流を下れば、春は躑躅、夏は青葉、秋は紅葉を山迫り水激する間に眺めつ、端睨に違なく應接に忙



寺 閣 金

嵐山の櫻は云はずもがなであらう、渡月橋畔より流を溯ると小督の塚、仲國の塚、川を渡つて嵐山の麓に出で三友亭、三軒屋等に憩ふも可、花の山二町上れば大悲閣の句碑を尋ね更に山頂に大悲閣を訪ふもよし、妙心寺、太秦の廣隆寺、蠶の

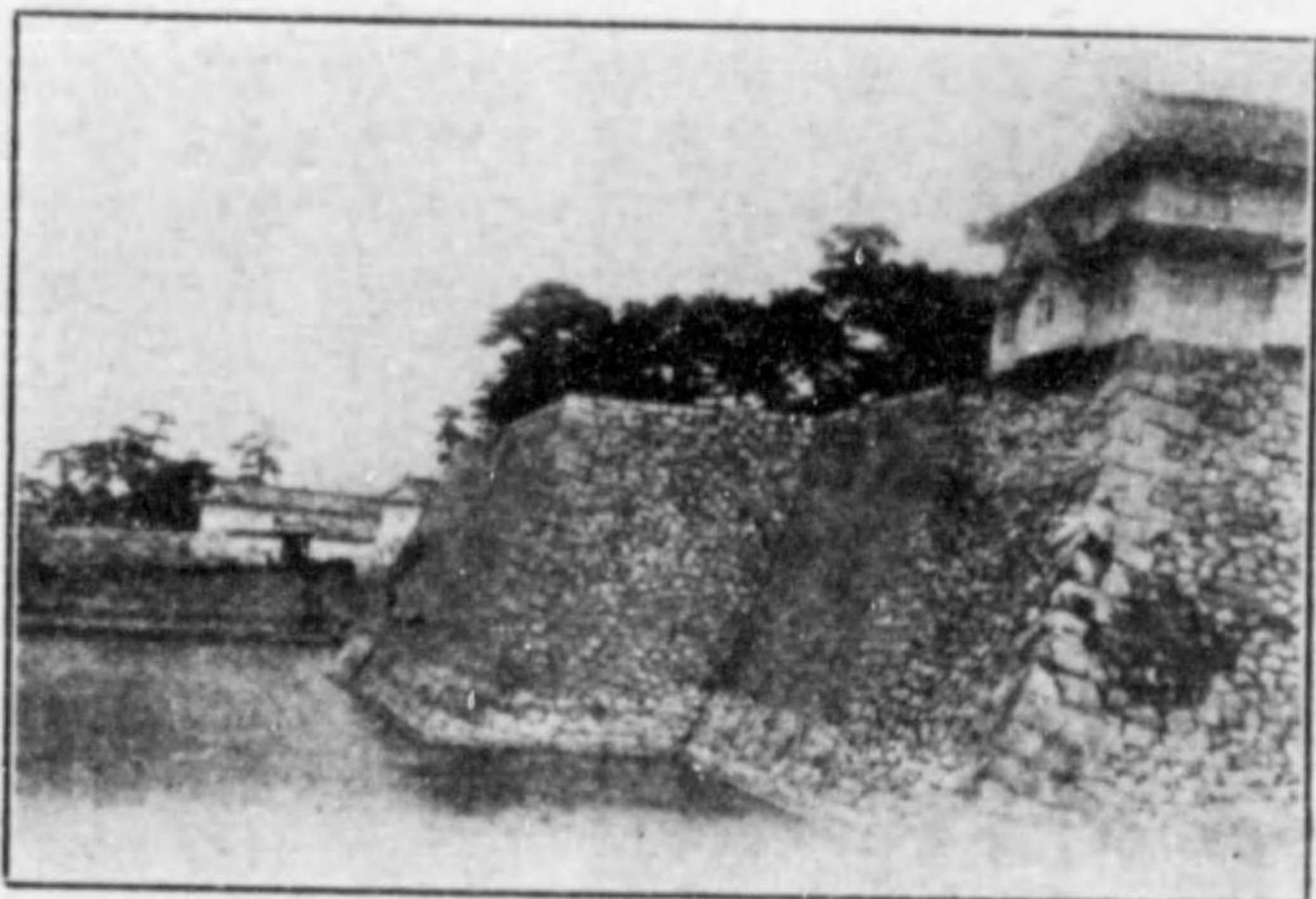
野を過ぎ峨嵯野の祇王寺に祇王祇女佛等の墓を見、「萌え出づるも枯るゝも同じ」人生の運命を観するも妙、新田義貞の首塚、勾當内侍の隠家等を訪ふも面白かる可し。

大阪に入つても先づ第一に宿を取り夫よりぐるるとまめに赤毛布を極めるが好い、中の島で銀水、自由亭、花屋、西照庵、伊豫屋、北濱で加賀屋、銀波樓、丸三、出雲屋、炭屋、龜谷、福岡屋、南興、今橋にて紫雲樓、泉米、大川町で明石屋、水明館、池喜、備後屋、讃岐屋、いづ六、大黒屋、香月樓、岩田、北川樓、千秋樓などの内で落付場所を定め其上に第一に大阪城。

大阪城は今第四師團の兵營中へ這入つても面白くない、外から石垣の石の大きさをみて大閣殿下の御威勢の程を感服して置いて



東に平野川に出で大阪陣の古戦場鶴野を經、玉造に出で真田幸村の出丸たりし真田



城 阪 大

山に上り西南へ下り餌差町に契沖阿闍梨の圓珠庵を訪ふて幽齋庵室と阿闍梨の墨蹟などを見、高津に仁徳天皇の皇居の跡に詣で、大小橋命の産湯に用ゐさせられしと云ふ産湯の清水、其丘上にある産湯稻荷に賽して桃山の桃林に豊公の榮華を思ひ日本佛法の嚆矢たる靈地四天王寺に千五百年の昔を訪はう、四天王寺は聖徳太子の草創、屢々兵燹に逢ひ寛文四年再建したのが今の堂塔であつて寺域東西八町南北七町、大鳥居を過ぎ東門より入れば百三十三尺の五重の塔、塔の北に金堂、其北に聖徳太子が經を講じ給ひし大講堂あり、東南猫門より入れば太子十六歳の像を安置せる太子堂あり、其他堂塔無數、先年聖徳太子千

三百年忌を紀念として聖徳會は世界無比と云ふ巨鐘を献納した。

天王寺を出て寺町に鳳林寺あり、聖徳太子作の觀音像、弘法大師の眞經、兆殿司の十六羅漢等を藏す、茲より南に月江寺、吉祥寺あり、吉祥寺は山門に淺野内匠頭の筆に成りし萬松山の扁額を掲げ本堂には四十七士の木像があるさうだ、天王寺と月江寺の間に超願寺あり、茲に淨瑠璃の鼻祖竹本義太夫の墓がある、遂近所に合邦の辻などがあつて東京から行くところ中義太夫だらけの様にお思はれる、天王寺を出て博覽會跡を通り東へ出ると大阪攻めの時家康の本陣たりし茶臼山、濠池の畔の邦福寺と云ふのが俗に雲水と云つて精進料理を喰はせる處、茶臼山の北逢阪下之町の一心寺と云ふのに七代目市川團十郎の墓がある、安居の天満宮に賽し、新清水寺に出づ、京都の清水寺から聖徳太子作の千手觀音を移して本尊とし新の字を付け寛永十七年建立の寺で、西に向つて舞臺あり、下は紅葉に埋める谷の阪道、開基延海阿闍梨の墓、狂歌師油煙齋貞柳の碑、音羽の瀧と名付くる三條の小さい瀧あり、勝鬨阪の遊行寺は藤澤の一遍上人の假寓した處で境内に芭蕉の茶屋、芭蕉の碑あり、勝

勝鬘院の上勝鬘院は聖徳太子の勝鬘經を講じ給ひし處、勝鬘院の西大江神社は豊受大神を祀り境内は幽邃、夫より北は夕陽岡、梅林を歩み抜けて丘上に藤原家隆の古墳あり、茲より遠く淡路島に没する夕陽を眺め得るより夕陽の岡を云ふのである、家隆卿の『契あればなにはの里にうつり来て浪の入り目を眺めつるかな』の歌を思はせる、墳の東に家隆卿橋居の跡なりと云ふ一軒の家がある、外に陸奥完光伯、伯の父伊達千廣卿の墓碑がある、夕陽岡より生玉の寺町を北に大阪城の守護神たる北向八幡宮、八満社の蓮池を隔て、生國魂(なま)神社あり、櫻多く、春夏花見蓮見の雅客雜沓す。

生國魂社より東一町、元梅屋敷、其北に梅屋敷あり、梅屋敷より西は高津にして仁徳、仲哀、應神、履仲の四帝と神功皇后、葦姫皇后とを鎮座せる高津神社あり、境内に梅の橋、頌徳碑、仁徳天皇千五百年祭に建設した望烟亭等がある、舞臺はその右手遠く六甲山、茅渚の海を眺め風光佳、高津の南に翫菊庵の菊、吉助の牡丹あり、高津社を出で西南に二つ井戸に至る、岩おこし屋津の清の店先にあり、往時徳

川幕府の鑄錢場の用水なりしと傳へられて居る。

道頓堀、千日前は大阪第一の繁華な處、二つ井戸より少し東へ行けば浪花座、中座、角座、朝日座、辨天座の五座を圍み昔いろは茶屋の名ありし芝居茶屋、貸席、旅館、飲食店軒を並べ南へ曲れば道頓堀と相並での裏町が千日前、昔千日寺と云ふ寺あり、維新前までは刑場で晝も尙寂しい處であつたに、今では見世物小屋角並に建ち連なり、飲食店、露店數を知らず、ドンチャン囃し立て聲々に客を呼び立つる賑かさ押し返へす雜沓に採まれては方角を取り違へる恐あり、此邊難波新地甲部乙部と遊廓二筋の通りにあり、道頓堀を隔て、宗右衛門町、九郎右衛門町の二遊廓あり、是を南地と云ひ、有名なる富田屋、伊丹幸などは此中にある、道頓堀の戎橋を渡つて三津寺町に眞言宗の三津寺あり、夫より北佐野屋橋に三津八幡あり、佐野屋橋筋より東へ二ツ目は心齋橋筋と稱して東京ならば銀座通りと云つた處、今宮神社は天照大神、蛭子命、大己貴命を祀れる處、世に今宮の戎と云ひ、毎年一月十日に十日戎として境内大に賑ひ『十日戎の賣物は』と歌にもある通り縁起物として小判、立

鳥帽子、東鬘斗などを小篋に付けたるを賣る。

道頓堀の新戎橋より西横堀に添ひて北に數町長堀川と交叉する處に有名なる四つ橋あり、長堀川には炭屋橋、吉野屋橋、西横堀には上繫橋、下繫橋、「すゝし」に四つ橋を四つ渡りけり」と來山の句がある、橋畔柳多く景色好し。

四つ橋より鞆に出づ、鞆南通一丁目に陶器神社あり、七月十四日の祭禮には西横堀の陶器問屋競ふて陶器にて作り物を拵へ見物人多く出づ、鞆には干魚問屋多く是も七月卅一日の住吉祭に鹽魚の作り物を拵へる、京町堀の西端雜魚場は魚市場、其南薩摩堀北の町の廣教寺(がんげう)は近松の淨瑠璃にある寺、廣教寺の西江の子島には大阪府廳、市役所等あり、江の子島の西木津川橋を渡れば居留地、夫より一二町で川口の波止場、波止場より南九條町には毎月三六の日吳服古着骨董の市を開く茨住吉神社、九條の東、木津、尻無二川に狹まれし松島に遊廓あり、松島より更に東玉江橋の南詰に土佐の稻荷あり、境内櫻多し、茲より又東へ三町阿彌陀池に達す、今長野の善光寺にある阿彌陀の像を本田善光が茲にて拾ひ上げし處なりと云ふ、今

和光寺あり、楠木市のある處、再び西に向ひ尻無川の紅葉を見、薰釣の名所甚兵衛の小屋を経て大阪築港の模様を見物し安治川、天保山を見て一先づ引返へす。

次の日の出、點を玉江橋とす、北詰の角堂島高等女學校敷地内に故福澤諭吉氏の誕生地あり、玉江橋より北に福島を経て西野田玉川町に有名なる玉川の藤あり、藤の棚、春日神社、藤の庵あり、かげ藤と云ふ不思議あり、野田の藤の西に證如上人が日蓮の宗徒に追はれ救けられし舊蹟、野田停車場より福島停車場迄戻つて黄檗宗の妙徳寺には五百羅漢像あり、義經、景時逆櫓の論をなせしは此邊にして逆櫓の松は今枯れ果てしも其根は今福島橋詰町の松本と云ふ人が持て居る、福島は上中下に分れ各々天神社一つ宛あり、菅公左遷の時茲を経て出船したと云ふ古蹟なり、福島の西北鷺洲村浦江の了徳院に歡喜天、境内は杜若をもて名高し、了徳院の東北字大仁に百濟より來りし博士王仁の墓ありと云へど北河内郡菅原村にも王仁の墓あり、何れをいづれと眞偽は分ち難い、梅田停車場の北茶屋町に九層の櫻閣高さ廿二間、名を凌雲閣と云へども人は皆九階と呼で居る、凌雲閣より東南北野東の町に綱敷天神

あり、菅公左遷の途中此地に梅の花盛なるを見、船綱を敷かせ賞せられし古蹟なりと、天神社より西南稻荷山に近く萩に名高き圓頓寺を見、更に一町太融寺、弘法大師が手刻の佛像と脇壇に嵯峨天皇寄進の千手觀音を本尊とす、寺内に淀君の墓、藤棚あり、境内に割烹店藤澤亭あり、太融寺に近く不動堂、眼病に靈驗ある眼神八幡鐘に聞えし寒山寺、日限り地藏、菅公左遷の途、道傍露深きを見て『露と散る涙に袖は朽ちにけり都の事を思ひ出づれば』と詠せし古蹟は寒山寺に近く今露天神の社あり、俗にお初天神とも云ふ、西山宗因の墓は天満西寺町西福寺、大鹽平八郎父子の墓は天満寺町橋成正寺にあり。

天満宮は天満大工町にあり、昔公の御夢相建てられた靈社で境内に地主神、大將軍の祠、蛭子祠等澤山の末社あり、社後一帯には芝居、寄席、見世物多く、一月廿五日は初天神、七月廿五日は夏祭と稱し參詣の男女群をなす、殊に夏祭には鉾流しの神事と稱し炬火を焚き續けて幾艘の船川を下つて松島のお旅所にする壯觀あり天満橋より淀川堤に沿ひ長柄村に行く、『雉子も鳴かずば撃れまい』の人柱の長柄の

橋は此邊なりと傳へらる、更に東へ行くと崇禪寺あり、有名なる崇禪寺馬場の復讐の遺蹟、境内に遠城治左衛門兄弟の墓あり、寺には二士の刀劔、鎖帷子を藏す、寺の前の松林は所謂馬場なり、是より造幣局、泉布觀、泉布觀の對岸は櫻の宮、川を渡るに淀屋橋の長橋あり、流れに添ふて一帶の櫻樹の中にある櫻の宮神社は天照大神を祀れるもの、櫻の宮より網島に向ふ途中、大長寺あり、心中天網島の小春治兵衛の墓あり、天満橋と天神橋の間に伏見通ひの船溜り八軒屋あり、難波橋は中の島の東端山崎鼻にて二分さる、山崎鼻より西に木村長門守の紀念碑、大阪ホテルを過ぎ豊神社、白玉稻荷あり、此邊を中の島公園と云ひ、櫻、萩、藤、春秋の花に富み公會堂、圖書館、太閤の銅像などあり、公園の西北は大江橋、昔正成が六波羅勢を敗りし古戰場、南は淀屋辰五郎の住居跡にて其名を遺す淀屋橋、大江橋を渡つて北に北の新地(曾根崎新地)に境して『其涙が蜷川、小春が汲んで』の蜷川に架けたる蜷橋あり、曾根崎と南地の外に新町、堀江の二遊廓あり、平野町の御靈神社、夫より南備後町に本願寺の津村別院(俗に北の御堂)、夫より御堂筋を三丁大谷派本願

寺の難波御堂(俗に南の御堂)其背後に坐摩神社、博勞町に難波神社、難波神社より南安堂寺町に油懸地蔵として石地蔵あり、日本紀にある安堂寺の石佛ならんと云ふ説もあり、高麗橋に大阪城廓の名残を止むる檜屋敷を見、北濱に鴻池、住友の金の唸るのを聞き、御霊社内の文樂座、堀江廓内の明樂座に紋十郎、玉造の人形芝居も見逃す可からず。

大阪は此位にして梅田より瀛車に乗つて西に池田驛に下車すれば人力車賃廿五錢にて紅葉で有名な箕面山に達す、山中には瀧安寺、本堂に役小角が刻みし辨天を安置し日本四辨天(江の島、嚴島、竹生島と合せて)寺より上る事十七八町、山は悉く錦繡に装はれ道險しく阪急なる邊り溪間には清泉淙々として流れ正面に箕面の瀧を見る、瀧は高十一丈幅三間、紅葉の天ぶらを喰ひて歸る、池田より阪鶴線に乗換へ伊丹に行くいづれも酒の酔なるを賞す可き處だ、伊丹寺町の墨染寺には荒木村重の墓、鬼貫の墓あり、伊丹町は古の猪名野にして『有馬山猪名野笹原風吹けば』の歌のある處なりと。

阪鶴線寶塚で下車、武庫川を渡れば對岸は寶塚の温泉、分銅屋、寶樂屋、炭酸ホテル、泉山、丸山等の旅館あり、泉質は炭酸泉にして皮膚病によし、宿泊料一日一圓前後、山道少し上つた處に炭酸水の湧き出す處あり、此外附近西の宮の戎様、打出の濱、住吉神社、岡本の梅林などあれどもさうくは見て居られず、暇ある人は大和めぐり及び瀬戸めぐりを参照して探勝す可し。

みやげもの

京都では 半襟、清水焼、松茸、紅、扇、千枚漬、鷺しらす

大阪では 岩おこし、奈は漬、昆布、雀鮓

舞臺からとんだ話は清水にひやかされたる身こそくやしき

北八

いつとても調子くるはじ三味線のどうとんぼりのにぎはひはそも

彌二

『大阪は商人の本場だ』では京都は『美術家』して東京は『ウム』……江戸ッ子

▲第十三線▼ 富士と三保

- ◎ 第一日 新橋△△△△△ 御殿場△△△△△
 - ◎ 第二日 御殿場△△△△△ 富士山△△△△△
 - ◎ 第三日 富士山△△△△△ 富士△△△△△ 興津△△△△△
 - ◎ 第四日 興津△△△△△ 江尻△△△△△ 三保△△△△△ 龍華寺△△△△△ 久能山△△△△△
 - ◎ 第五日 久能山△△△△△ 静岡△△△△△ 舞坂△△△△△
 - ◎ 第六日 舞坂△△△△△ 濱松△△△△△ 静岡△△△△△
 - ◎ 第七日 静岡△△△△△ 沼津△△△△△ 新橋△△△△△
- ▲新橋より御殿場 哩數六十九哩 時間四時間と十分、三等賃金一圓〇八錢
- ▲御殿場より富士 停車場より一合目まで三里八町 人力車あり、馬に乗るも面白う、太郎坊に着き登山の仕度をなす可し、大概の事は御殿場の宿屋で用意を整ふ
- ▲富士より富士驛 表 口に下山して一合目より約二里で八幡堂に達し、故より大宮迄馬六十錢、大宮より富士驛まで四里馬車賃二十錢

- ▲富士驛より興津 流車十二哩 時間四十分三等賃金貳拾錢
 - ▲興津より江尻 流車三哩三等賃金六錢
 - ▲興津より三保 海上二里舟にて往復一圓以内、江尻よりは人力にて陸路一里半、舟に乗りて二十町、龍華寺へは江尻より一里十町、三保よりは約廿町
 - ▲久能山へは 江尻より二里半、静岡より二里三十町、いづれも人力車通じ片道四十錢位
 - ▲静岡より舞阪 流車五十四哩 時間二時間と四十分三等賃金八十八錢
 - ▲舞阪より 濱松、静岡、沼津とも途中下車驛であるし、いづれかで一泊しても通用日限には大丈夫なれば、通しにて新橋までの切符を買ふ可し哩數百七十二哩、三等賃金貳圓貳拾錢
- 富士へ登山するには五つ道がある、大宮口(表口)吉田口(北口)須走口(東口)須山口、東表口(新道)、吉田口は甲州吉田より上るので、甲武線を飯田町から大月まで(此間哩數五十二、三等賃金八十六錢、時間約四時間)大月より吉田まで馬車、大宮

口は富士驛より大宮に出で登山、須走口は御殿場驛にて下車、馬車にて須走まで、須山口は佐野停車場にて下車、葛山を過ぎ愛鷹(あしたか)山の麓を行く二里半にて須山村に達す、東表口即ち御殿場の新道より上るのが此頃通常の道となつて居る、停車場を下りると驛前に富士屋支店、吉島屋、松屋、桐屋、大黒屋等の旅館あり、停車場より十二三町の舊御殿にて富士屋本店、近江屋、恵比壽屋に泊るも便利なり、御殿場より瀧川村を經二里にして馬返し二里半にして太郎坊、茲にて金剛杖を買ひ一合二合と上る、五合目からは箱根、足柄、雨降の諸山を脚下に望み、六合七合を經て胸突八丁の險を經山嶺に達す、日の出の壯觀は六合若くは八合の岩室に泊つて見るを最も佳とす、泊るには宿屋にて綿入を貸すが汚いと思へば毛布を用意せば澤山なり、草鞋も十足位腰に付けて行く可し、五ヶ所の上りにいづれも奥宮あり、奥宮の中の本當の奥宮は表口即ち南に寄つた淺間岳にある神社とす、左手に都良香の富士山紀の碑あり、社の後數歩にして舊墳火口の傍に出る、坑内には千秋不盡の雪の間に岩見ゆ、墳火口岸の南に虎石あり、墳火口の直徑は十三町、是を圍はるに外輪め

ぐり、内輪めぐりの二途あり、外輪めぐりは富士山紀念碑の南より鯨池(このしろ)と稱する凹地を過ぎ左に三島社を望みて劔ヶ峯に上る、麓には野中至氏の測候所あり、雷巖を過ぎ白山嶽に至り釋迦の割石を見、東に出れば久須志嶽あり、吉田、須走兩口の絶頂は茲で久須志神社あり、伊豆嶽、成就ヶ嶽を廻はる、此邊に蒸發氣の地面より噴出する處あり、東賽の河原を過ぎ巖の間に銀明水を汲み八ツ子の梯子を上れば駒ヶ嶽にして大石、俵石を見て下る此間五十町、以上の峰を蓮華の八葉に擬し富士八峯と云ふ、内輪めぐりは外輪廻りと同じ道を劔ヶ峰に出で下つて噴火口の岸の平池西賽の河原に出で、馬の脊山を左に見て數十歩、白山嶽の麓金明水より噴火口に沿ひ巖石の間を行く事總て三十町にして東表口に達す、中道巡りと云ふのは六合目の中腹を一周するので寶永山、崩れ穴、牡丹畑、鬼ヶ澤、天の浮橋、冠石、姥ヶ懷、大澤、大澤の石瀧、佛石澤、神の御庭、小御嶽等の勝あり、下山はいづれよりするも僅に三時間一步に數尺を走り羽化して登仙の思ひをして居る中に山麓に着く可し、下るには草鞋三四足を重ねて履く、然らざれば足を痛める、草臥れずして足

を棒にする虞があるさうだ。

大宮口の裾野には頼朝が『白糸をなむ緒によりて結べども瀧の流は手にもたまらず』と咏むた白糸の瀧が大宮口から三里の上井出村と白糸村の間にある、高さ八丈幅四十尺、仁田四郎の人穴は瀧より約一里上井出村字人穴、瀧より四五町で工藤祐經の墓あり、建久四年富士の牧狩は此邊を中心にしたもので、假御殿井出の館蹟と云ふのが白糸村狩宿にある、大宮口より大宮町に出で、吉原、鈴川の風光を探ると吉原の福泉寺には曾我兄弟の墓、木像あり、虎御前が草庵を結んだのも矢張此寺、吉原から鈴川への馬車道に富士を正面から見ると、鈴川停車場の南の天の香久山は北に富士、西に田子の浦、三保と久能を見て景色好し、田子の浦は鈴川の西南元吉原に近く三保の松原を望み、富嶽を仰ぎ風光絶佳。

富士川の鐵橋を涉ると岩淵の停車場、其次は蒲原、町内に牛若丸を慕つて此地に悶死した淨瑠璃姫の墓あり、瀛車は蒲原より興津まで隧道、隧道の上は有名な薩埵峠、峠の上からは富士と三保の松原とを見て東海第一の絶景だと云はれて居る、山

の神さつた峠の風景は三行半に書けど盡きせじ』と蜀山人の狂歌のある望嶽亭、興津から薩陀峠の望嶽亭まで僅に二十町。

興津停車場から七八町で清見瀧の海岸に出る、前には三保の松原、西南に清水港久能山、東南は駿河灣を隔て、豆相の峰巒、東北には富士、愛鷹、海岸浪は平にして冬暖かく夏涼しく海水浴場として好適の地である、東海ホテル、一碧樓、身延樓佐野屋、千歳屋、龜島樓、十文字屋、山田屋等の旅館あり、五十錢より一圓前後の宿泊料、民家の貸間は一ヶ月五圓前後から、興津の北即ち海岸から鐵道線路を越えた山の半腹は清見寺である、寺門は清見ヶ關の跡であつて寺内に開山堂、佛殿、書院あり、書院の庭には牛石、龜石、虎石などの奇石がある、境内より真下は清見瀧遙に三保の松原を見る、三保へ行くには興津からでもよし、江尻まで瀛車で行つて清水を通つて行くもよし、清水は江尻から僅に十町、東北の海岸に海水浴場あり、三保の松原は清水港の南方より一里許突出した砂洲で、三段をなして上には松杉鬱蒼、三保神社あり、羽衣の松あり人をして『白良と申す漁夫にてい』と知らずくに

微吟せしむ、清水より西へ一里観音山龍華寺、寺は山の中腹にあり、有名の大蘇鐵
を見、中腹の平地に上れば富士は正面に興津を其下に、三保を前景にして駿河灣一
帯繪の如く一眸に集まる、茲に高山
橋牛の墓あり、「吾人は須く現代に超
越せざる可からず」と此景色を見て
居ると其様氣にもなる。

龍華寺



清水より二里、久能山は有渡郡久
能村字根古屋にあり南は遠州灘、東
北には駿河灣一帯の眺望壯絶、旅館
石橋、豆腐屋、石垣屋、いづれも宿
賃四十錢位、山は老樹鬱として昔紀州より江戸に通ふ船頭が海上より眺めて半道の
標としたものであると云ふ、東照宮の社殿は結構壯嚴、静岡の淺間社に次ぐもの
である、久能山から静岡へ出る、静岡市の北賤機山は停車場から十二町、麓に淺間

神社あり、木花咲耶姫を祭り社殿の壯麗なる事日光に次ぐと云ふ、境内櫻多く今は
公園になつて居る、淺間社より東北三四町に今川義元の建立した臨濟寺、其隣地に
古城趾あり、停車場より西へ三四町の寶臺院は家康の側室寶臺院を葬つた處で、維
新後、江戸城内紅葉山にあつた徳川氏累代の位牌を此堂内に遷してある、連歌師宗
長の庵室のありし吐月峰は停車場から西へ一里ばかり、静岡市の西を流る、安倍川
其支流蘆科川を溯る五六町に風の森あり、清少納言の草紙にも森はとして其名を擧
げ、定家卿も「住みわびぬうつらふ人の秋の色に身を風の森の下露」と詠まれた處で
ある。伊勢物語には宇津の山、太平紀に「宇都の山邊を越え行けば」とある、今は宇
都の谷峠と云ふのは静岡から西へ三里ばかり。

舞阪の海水浴場は濱名湖畔辨天島と云ふのにある、辨天島は夏期停車場で冬は停
車しない、旅館は濱名館、茗荷屋、鯛山樓、松月、中村屋、伊勢屋などあり、宿泊
料七十錢より一圓、濱名湖は東西二里南北三里南岸は今切と云つて明暦八年海嘯の
時崩れて海と續いて仕舞つたのである、湖中十二勝あり、是を探るには辨天島で舟

を傲ふが好い、舟賃一圓五十錢位、釣を垂れ網を打ちながら湖中の風光を悠々と味ふ事が出来やう、舟にて鷺津に渡れば茲にも海水浴場あり、濱名湖に面する風景辨天島に譲らず、家康が織田家に奪はれし汐見坂も僅に一里ばかりである、舞阪より舟にて對岸氣賀に至れば茲も避暑地として名あり其北凡一里井伊谷村に宗良親王を祀りし井伊谷神社、社後に御陵あり、井伊谷村の西一里に奥山半僧坊あり寺號を方廣寺と云ひ宗良親王の御同胞滿良親王の開基である。

濱松の町の北端は濱松城址、城内に東照宮あり、秋葉山は二股村を経て十一里、濱松の町端れに秋葉道の第一の鳥居がある、三方ヶ原は濱松より北へ一里「引馬野」に匂ふ榛原入り亂れ衣にははせ旅のしるしに」と萬葉にあるは此原だと云ふ、徳川勢が甲州軍に敗られた古戰場である、秋葉山は袋井驛に下車し北に卅町、可睡齋に三尺坊に詣で森町まで三里は馬車、夫より五里半にして坂下に出で、絶頂迄登り五十町、頂上には軻遇實智神を祭りし秋葉神社、老杉の間に鎮座し境内は天龍川、濱名湖、遠州灘を望みて景色佳し、下山は坂下より戸倉に出で天龍川を下り池田より

卅町にして中泉停車場に着く。

金谷停車場より日阪峠に上り菊川の里(俊基朝臣の東下りにあり)小夜の中山に夜泣石を見、名物飴の餅を喰ひ掛川停車場まで約二里半。

静岡を経て沼津に行く、沼津は今川家の城地なるも城は今影をも存せず、停車場より南行狩野川の湊橋を渡つて二十町、牛臥山に牛臥海水浴場あり、旅館三島館、左に伊豆の大潮崎、右に三保の松原を望む、牛臥の西狩野川の河口を我入道と云ふ茲も海水浴場として其名高く、狩野川を渡れば有名なる千本松原の公園に達す、旅館松風館あり、牛臥より東南十町に静浦海水浴場あり、旅館保養館、佐野停車場より十二町佐野瀑園には雪解、富士見、月見、銚子、狭衣の五瀑布あり、五龍館と云ふ旅館あり、停車場より西數丁に足利尊氏と戦ひ戦死したる藤原為冬を祀つた佐野神社あり、三島町には停車場二つあり、東海道線は三島停車場と云ひ、豆相線のは三島町停車場と云ふ、大山祇命を祀つた三島神社は三島町停車場より四五町鮎壺の瀧は三島停車場より西へ二丁高二丈ありて瀧壺に鮎が澤山居るのが珍しい、沼津